

潤地頭給遺跡Ⅱ

(第Ⅳ区)

東風小学校建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 96 集

2007

前原市教育委員会

『潤地頭給遺跡Ⅱ（第四区）東風小学校建設に伴う文化財調査報告書 前原市文化財調査報告書 第96集』正誤表

- 巻頭図版 4 1 落ち込み出土丸窓壺 (49) →fig45-1
2 落ち込み出土筒型器台 →fig41-217
3 丹塗り甕 (570) →fig16-11
4 落ち込み出土鋤先口縁壺 (552) →fig25-64
5 樽型壺 (290-1、2) →fig36-161
6 丸窓壺 (445) →fig39-188
- 図版 10 大溝出土土器 11-25 (上から2段目、中央) →11-22
- 図版 17 F-9・F-10 出土遺物 34-144→34-143
34-148→34-147
35-156→34-155
- 図版 19 G-9 出土遺物 40-198 (下) →40-197 (下)
41-205 (上から2段目、中央) →41-204
41-210 (上から4段目、左) →41-209
- 図版 20 G-10・G-15・H-10・H-12・H-14・I-14 出土遺物 42-220→42-221
- 図版 30 大溝・落ち込み出土土器② 69-31→69-32
- 図版 36 I 区土坑出土遺物 1 87-11→88-1
- 図版 37 I 区土坑出土遺物 2 88-18→88-19
88-19→88-18

潤地頭給遺跡Ⅱ

(第Ⅳ区)

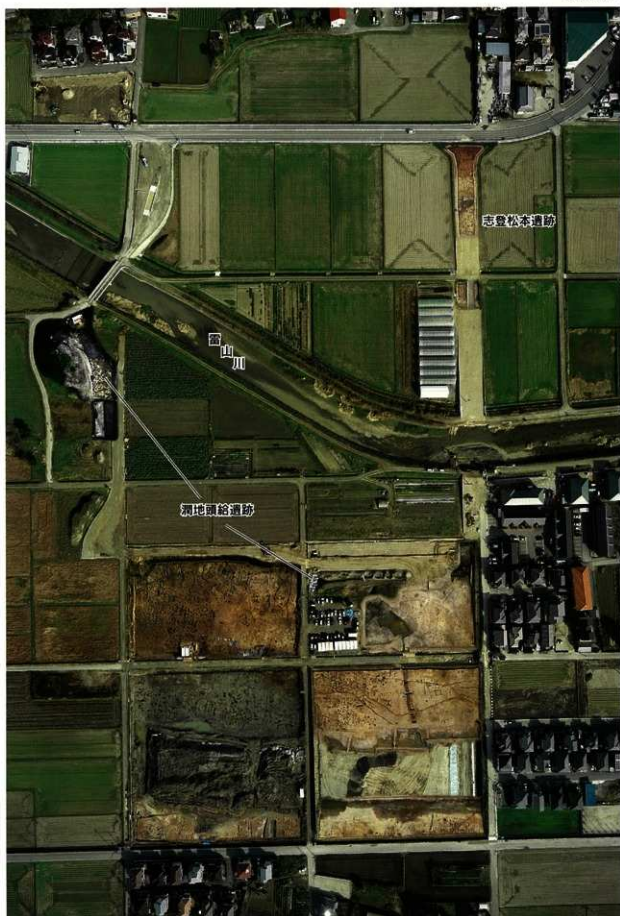
東風小学校建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書

第 96 集

2007

前原市教育委員会



上空から見た瀬地頭給遺跡と志登松本遺跡



洞地頭給遺跡全体写真（真上から）



1 落ち込み土器出土状況（真上から）



2 大溝・落ち込み出土土底部穿孔土器



1 落ち込み出土丸窓壺 (49)



4 落ち込み出土陶先口縁壺(552)



2 落ち込み出土筒型器台



5 樽型壺 (290-1、2)



3 丹塗り壺 (570)



6 丸窓壺 (445)

序

前原市は近年、福岡市のベッドタウンとして発展を続けています。JR筑肥線の複線化、国道202号バイパス、西九州自動車道の開通はますます前原市の都市近郊としての位置付けを強め、今後も人口増加と都市化が進められると予想されます。

このような背景の中、瀬地頭給遺跡は、市内の児童増加に対応するため計画された東風小学校の建設に伴って行われた発掘調査です。遺跡からは、九州で初めての出土となる玉作り工房を始め、弥生時代から中世にかけての大規模な集落が発見され、報道機関を含め大変注目されました。このような重要性から、子ども達の歴史教育の一助として、遺跡を現地で保存し、校内には弥生時代当時の玉作り風景を復元した模型やパネル展示を行っております。

この度、本報告書に掲載した瀬地頭給遺跡Ⅳ区は、弥生時代中期の谷が検出され、丹塗り磨研土器や底部穿孔土器が出土するなど水辺の祭祀に関わる遺物が大量に見られました。本書はこのような貴重な成果をまとめ、皆様にご公表するものであり、当地の歴史を解明する上の一助となれば幸いです。

なお、末筆となりましたが発掘調査にあたってご理解とご協力を頂きました周辺住民の方々、発掘調査ならびに報告書作成にあたり、ご協力いただきました関係機関、関係各位に厚く御礼申し上げます。

平成19年3月31日

前原市教育委員会

教育長 菊竹利副

例言

1. 本書は東風小学校建設に伴い、平成14、15年度に前原市教育委員会が行った瀬地頭給遺跡の発掘調査の記録である。
2. 瀬地頭給遺跡は、前原市大字瀬に所在し、約2,949㎡にわたって遺構を確認、発掘調査を行った。
3. 遺構の実測にあたっては、川原秀子、川内真智子、川淵恵子、菅原千恵子、谷脇友子、藤野きゆり、甲斐玲子の協力を得、江崎靖隆が行った。
4. 遺構の写真は空中写真を(有)空中写真企画に委託し、その他は江崎が撮影した。
5. 遺物の復元は、藤本和子、中田朋子、川上辰子、藤森啓子、和多治子、柏田勝子、三嶋弘美、石原美恵子、末益真奈美、波多江聡美、名取さつき、柴田由美子が行った。
6. 遺物の実測・製図にあたっては、江崎の他に、角浩行、横崎直子、笹田博右、平野隆之、田中裕美、加藤優香、田中阿早緑、友池真由美、末益、名取の諸氏に多大なる協力を得た。
7. 遺物の写真は横崎、福田が行った。
8. 本書に掲載した遺構及び全体図で使用した座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅱ系に準拠した。また、方位は座標北であり、水平基準は東京湾平均高潮水準（T.P.）である。
9. 報告書の出土土器観察表及び底部穿孔土器観察表に示す以下の遺構名は、次に示す略称を付した。
SS：大溝 SC：竪穴式住居 SE：井戸 SK：土坑
10. 出土遺物に示すスクリーントーンの表示は以下のとおり。

 丹塗り  スス  コゲ  二次焼成痕

11. 遺物・実測図・写真は伊都国歴史博物館にて管理・保管している。
12. 本書の執筆は瀬地頭給遺跡の底部穿孔を江崎靖隆、田中裕美が共同で、その他を江崎が行い、志登松本遺跡を平尾和久、編纂は江崎が行った。

本文目次

I. はじめに	
1. 調査に至る経緯	1
2. 調査の工程	1
3. 調査の組織	2
II. 位置と環境	
1. 地理的環境	3
2. 歴史的環境	3
III. 湯地駅給湯跡IV区の調査	
1. IV区の調査	
(1) 調査の概要	6
(2) IV区の遺構と遺物	
A. 掘立柱建物	6
B. 大溝	10
C. 落ち込み	17
D. 井戸	83
E. 土坑	85
(3) まとめ	90
IV. 志登松本遺跡の調査	
1. はじめに	
(1) 遺跡の概要と調査の経過	97
(2) 調査の組織	97
2. 遺構と遺物	
(1) I区の概要	98
(2) II・III区の調査	104
(3) まとめ	112

挿図目次

第1図	周辺の主な道路(1/50,000)	4
第2図	酒地頭給送路周辺主要道路分布図 (1/4,000)	5
第3図	1・2号独立柱建物断面実測図(1/60)	6
第4図	2号独立柱建物出土土器実測図(1/4)	7
第5図	3号独立柱建物平面・見越し実測図(1/60)	7
第6図	3号独立柱建物出土土器実測図(1/4)	8
第7図	3号独立柱建物出土土器実測図(1/4)	9
第8図	大溝土層断面実測図(1/30)	10
第9図	大溝断面実測図(1/150)	11, 12
第10図	大溝出土土器実測図(1/4)	14
第11図	大溝出土土器実測図(1/4)	15
第12図	大溝出土土器実測図(1/4)	16
第13図	大溝・落ち込み調査グリッド平面図 (1/400)	17
第14図	落ち込み及びAトレンチ東側土層断面実測図 (1/50)	18
第15図	落ち込み全体実測図(1/150)	19, 20
第16図	Aトレンチ土層・1・2層出土土器実測図	21
第17図	Aトレンチ5・6層・7・8層出土土器実測図	22
第18図	F-8出土土器実測図(1/4, 1/6)	28
第19図	E-8出土土器実測図(1/4)	29
第20図	E-8, E-9出土土器実測図(1/4)	30
第21図	R-9, E-12出土土器実測図(1/4)	31
第22図	F-7, F-8出土土器実測図(1/4)	32
第23図	F-8出土土器実測図(1/4)	33
第24図	F-8出土土器実測図(1/4)	34
第25図	F-8出土土器実測図(1/4, 1/8)	35
第26図	F-8出土土器実測図(1/4)	36
第27図	F-8出土土器実測図(1/4)	37
第28図	F-8出土土器実測図(1/4)	38
第29図	F-8出土土器実測図(1/4)	39
第30図	F-8出土土器実測図(1/4)	40
第31図	F-8, F-9出土土器実測図(1/4)	41
第32図	F-9出土土器実測図(1/4)	42
第33図	F-9出土土器実測図(1/4)	43
第34図	F-9, F-10出土土器実測図(1/4)	44
第35図	F-10出土土器実測図(1/4)	45
第36図	F-10出土土器実測図(1/4, 1/6)	46
第37図	F-10, F-11, F-12出土土器実測図 (1/4, 1/6)	47
第38図	G-7, G-8出土土器実測図(1/4)	48
第39図	G-8出土土器実測図(1/4)	49
第40図	G-8, G-9出土土器実測図(1/4, 1/6)	50
第41図	G-9出土土器実測図(1/4)	51
第42図	G-10, G-15出土土器実測図(1/4)	52
第43図	H-10, H-11, H-12, H-14 出土土器実測図(1/4)	53
第44図	H-16, I-10, I-14, J-11 出土土器実測図(1/4)	54
第45図	落ち込み出土土器実測図(1/4)	55
第46図	大溝・落ち込み出土土器実測図(1/3)	55

第47図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	58
第48図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	59
第49図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	60
第50図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	61
第51図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	62
第52図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	63
第53図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	64
第54図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	65
第55図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	66
第56図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	67
第57図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	68
第58図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	69
第59図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	70
第60図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	71
第61図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	72
第62図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	73
第63図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	74
第64図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	75
第65図	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図(1/4)	76
第66図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/3)	78
第67図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/3)	79
第68図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/3)	80
第69図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/3)	81
第70図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/3)	82
第71図	大溝・落ち込み出土土層実測図(1/2)	83
第72図	1号井戸断面実測図(1/20)	83
第73図	1号井戸出土土器実測図(1/3)	84
第74図	1号井戸出土土器実測図(1/3)	84
第75図	1・2号土坑断面実測図(1/30)	85
第76図	3号土坑断面実測図(1/40)	86
第77図	4~9号土坑断面実測図(1/30, 1/20)	87
第78図	1~9号土坑出土土器実測図(1/4)	88
第79図	P-11断面実測図(1/10)	89
第80図	P-11出土土器実測図(1/4)	89
第81図	志登松本遺跡 木棺実測図(1/20)	99
第82図	志登松本遺跡 墓壇出土状況と墓壇実測図 (1/20, 1/6)	100

第83回	志登松本遺跡1～7号竪立柱建物実測図 (1/60).....	101
第84回	志登松本遺跡8～13号竪立柱建物実測図 (1/60).....	102
第85回	志登松本遺跡1区14～16号竪立柱建物実測図 (1/60).....	103
第86回	志登松本遺跡1～7号土坑実測図(1/20).....	105
第87回	志登松本遺跡土壌出土土器実測図(1/3).....	106
第88回	志登松本遺跡土壌出土土器実測図 (1/3.1/1)、有文土器(1/1).....	107
第89回	志登松本遺跡ピット・包含層出土遺物1 (1/3).....	108
第90回	志登松本遺跡ピット・包含層出土遺物2 (1/3).....	109
第91回	志登松本遺跡Ⅱ区SD01出土土器実測図 (1/4).....	110
第92回	志登松本遺跡Ⅱ区SD01・ピット、 Ⅲ区ピット出土土器実測図(1/3).....	111

図版目次

巻頭図版1	上空から見た彌地頭給道跡と志登松本遺跡
巻頭図版2	彌地頭給道跡全体写真(真上から)
巻頭図版3-1	落ち込み上層出土状況(真上から)
巻頭図版3-2	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器
巻頭図版4-1	落ち込み出土土器(49)
巻頭図版4-2	落ち込み出土筒型厨台(262)
巻頭図版4-3	丹塗り甕(570)
巻頭図版4-4	落ち込み出土鎌先口緑甕(552)
巻頭図版4-5	樽型壺(290-1、2)
巻頭図版4-6	丸型壺(445)
図版1-1	彌地頭給道跡から志登石蒜を採む(南西から)
図版1-2	Ⅲ-E区・Ⅳ区全体写真(西から)
図版2-1	Ⅳ区全体写真(真上から)
図版2-2	調査区北側部分全体写真(真上から)
図版3-1	調査区南側部分全体写真(真上から)
図版3-2	1号住居遺景(南西から)
図版3-3	1号住居近景(南西から)
図版3-4	1号竪立柱建物(南から)
図版3-5	2号竪立柱建物(南から)
図版4-1	大溝・落ち込み上層出土状況遺景(真上から)
図版4-2	大溝・落ち込み土器出土状況近景①(真上から)
図版5-1	大溝・落ち込み土器出土状況近景②(真上から)
図版5-2	大溝完備状況①(西から)
図版5-3	大溝完備状況②(東から)
図版6-1	大溝土層断面状況(東から)
図版6-2	落ち込み土層断面状況(東から)
図版6-3	Aトレンチ土層断面状況(南西から)
図版7-1	落ち込み遺物出土状況①(北から)
図版7-2	落ち込み遺物出土状況②(北東から)
図版7-3	落ち込み遺物出土状況③(北から)
図版7-4	落ち込み遺物出土状況④(西から)
図版7-5	落ち込み遺物出土状況⑤(北から)
図版7-6	落ち込み遺物出土状況⑥(北西から)
図版7-7	落ち込み遺物出土状況⑦(北から)
図版7-8	大溝取水口状況(北から)
図版8-1	1号土坑(北から)

図版8-2	2号土坑(北から)
図版8-3	3号土坑(北から)
図版8-4	5号土坑(北から)
図版8-5	6号土坑(北から)
図版8-6	11号ピット(北から)
図版8-7	1号井戸(北から)
図版8-8	調査区東側谷トレンチ(東から)
図版9	3号竪立柱建物および大溝出土遺物
図版10	大溝出土遺物
図版11	Aトレンチ上層・8号・9号・10号・10-11 層およびE-8出土遺物
図版12	E-8・E-9出土遺物
図版13	E-9・E-12・F-8出土遺物
図版14	F-8出土遺物
図版15	F-8出土遺物
図版16	F-8・F-9出土遺物
図版17	F-9・F-10出土遺物
図版18	F-10・F-11・F-12・G-7・G-8 出土遺物
図版19	G-9出土遺物
図版20	G-10・G-15・H-10・H-12・ H-14・I-14出土遺物
図版21	I-14および落ち込み・大溝出土遺物、 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器①
図版22	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器②
図版23	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器③
図版24	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器④
図版25	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器⑤
図版26	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器⑥
図版27	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器⑦
図版28	大溝・落ち込み出土底部穿孔土器⑧
図版29	大溝・落ち込み出土石器①
図版30	大溝・落ち込み出土石器②
図版31	大溝・落ち込み出土石器③
図版32	志登松本遺跡、全景Ⅰ区全景
図版33	Ⅱ、Ⅲ区全景、Ⅰ区7号土坑
図版34	Ⅰ区木棺箱全景、Ⅰ区壘形墓、Ⅱ区全景
図版35	Ⅱ区1号溝出土状況①、Ⅱ区1号溝出土状況②、 Ⅲ区全景
図版36～39	志登松本遺跡出土遺物

表目次

表1	彌地頭給道跡Ⅳ区出土土器観察表	114
表2	彌地頭給道跡Ⅳ区出土底部穿孔土器観察表	124

付 図

付図1	彌地頭給道跡Ⅳ区全体図(1/300)
付図2	彌地頭給道跡Ⅲ・Ⅳ区全体図(1/300)
付図3	志登松本遺跡全体図(1/200)

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

平成15年1月15日付けで、前原市教育委員会（学校教育課）から前原市大字濁字地頭給地内の東風小学校建設工事約40,014㎡に関して埋蔵文化財発掘調査の通知（文化財保護法第57条第3項、現在第94条第1項）が前原市教育委員会（文化課）に提出された。

対象地の周辺は、国指定史跡「志登支石墓群」、酒巻田遺跡、酒神社古墳など重要な遺跡があり、事業対象区の試掘調査が必要な旨を回答した。しかし、実際は用地買収の進捗状況や幅、ケール等の作付けの影響から、それとは別に地権者の承諾を得た用地から試掘調査を行うこととなった。試掘調査は平成14年4月17日～5月13日までの約1ヶ月間である。

試掘調査の結果、落ち込みと微高地が南北に入る旧地形を呈し、その微高地上に弥生時代～中世の遺構が確認され、複合遺跡であることが判明し、調査必要面積はほぼ全域にわたると暫定的な回答をした。

この試掘結果を受けて、本調査の工程協議・調整が行われ、約40,000㎡もの範囲の本調査を行うことは、時間的にも、費用的にも困難であると判断され、調査計画と工事計画の見直しが行われた。その結果、工事掘削の影響を受けない、落ち込みの調査を断念し、微高地上の遺構を対象に平成15年1月～平成16年3月までの1年2ヶ月の調査期間を確保した。

2. 調査の工程

微高地の上のみの調査とはいえ、その対象は約22,000㎡あり、調査は時間に迫られるものとなった。本調査は対象地の中心を十字に走る道路を基準に4つの調査区と工事用仮設道路部分の調査区を加え5工区を設定した。

調査は用地買収の都合上、Ⅲ・Ⅳ区（運動場予定地）から行い、Ⅴ区（仮設道路）続いてⅠ区（校舎、コミュニティセンター）、Ⅱ区（校舎）の順で調査を行った。

ところが、調査が進むにつれて、Ⅲ・Ⅳ区からは弥生時代中期の大溝、掘立柱建物群、土器溜りを検出、Ⅰ・Ⅱ区からは玉作り工房群や掘立柱建物群、甕棺墓が370基以上検出されるなど、遺跡の重要性が確認され休日返上の調査が行われる一方で、すでに調査済み箇所に関しては工事が始まっており、現状の調査計画

のまま遂行することは困難であり、再度、調査計画と工事計画両方の変更、修正が求められた。度重なる協議の末、工事計画上遺構を破壊しない部分（運動場部分、校舎・体育館以外の部分）については、遺構の保全が図られることから、遺構の範囲確認のみとし、構造物によって破壊される箇所は調査を集中することにより、発掘調査期間の短縮を図った。その後も時間的な制約に悩まされながらも、平成16年3月19日をもって全ての作業を終了した。

Ⅳ区の調査は平成15年1月15日～平成16年4月18日まで実施した。以下、調査日誌から抜粋して調査経過を記す。

平成15年

- 1月15日 現場作業員が入る。遺構検出を開始。
- 1月17日 落ち込みの土器溜りを検出。座標杭を設置。
- 1月20日 平板測量を開始
- 1月31日 1・2号土坑、11号ピット掘削、土器出土状況写真撮影
- 2月 3日 1・2号掘立柱建物掘削、写真撮影
- 2月10日 谷部Aトレンチを入れる。
- 2月13日 Aトレンチ土層断面実測、写真撮影
- 2月15日 大溝・落ち込みの調査開始。大量の弥生中期の土器が検出。取上げ用グリッドを設定。
- 2月29日 大溝・落ち込み土器出土状況全体を撮影、1/20での調査区全体実測を開始
- 3月10日 大溝1・2層土器取上げ、重機による調査区北側への拡張
- 3月14日 大溝土器上げ終了
- 3月17日 落ち込み掘削終了、土器取上げ、落ち込み土層写真撮影
- 4月 2日 1号井戸調査開始
- 4月 9日 大溝実測、写真撮影
- 4月14日 Ⅳ区清掃
- 4月15日 空中写真撮影
- 4月18日 Ⅳ区調査終了

3. 調査の組織

平成14、15年度にかけて実施した潤地頭給辺跡の調査組織は以下の通りである。

発起調査（平成14、15年度）

調査主体 前原市教育委員会

		平成14年度 (調査)	平成15年度 (調査)	平成18年度 (報告書作成)
総括	教育長	菊竹利嗣	菊竹利嗣	菊竹利嗣
	教育部長	上田勇介	久我和彦	三嶋俊蔵（～平成18年9月） 坂巻善直（平成18年10月～）
	文化課長	小池史哲	鬼木武信	鬼木武信（～平成18年12月） 久保静代（平成19年1月～）
	文化課長補佐			
	兼文化振興係長	中村鉄弥	中村鉄弥	久保静代（～平成18年12月）
	文化課文化財係長	林 覚	岡部裕俊	角 浩行
庶務	同 主事	浜地 克	浜地 克	大久保二葉
	同 主査	瓜生秀文	瓜生秀文	瓜生秀文
調査	同 主事	江崎靖隆	江崎靖隆	江崎靖隆
		江野道和	江野道和	藤谷華代子
		平尾和久	牟出華代子	梢崎直子
		牟田華代子		福田博石（臨時職員）

本調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々のほかに多くの方々からの御助言、御支援をいただいた。明記して深謝いたします。（敬称略、順不同）

生田弘毅、川原秀子、川淵恵子、菅原千恵子、宮本博子、村島富夫、黒木岩男、田中阿早緑、徳重英俊、中原尚美、吉村政隆、小林正昭、浦山勝昭、浦田雲子、齋池重治、神谷三枝子、嶋崎禮子、木永優子、波多江勝義、福井尚雄、益戸ミュキ、高秀子、蓮知昌夫、石尾久美子、古家いずみ、小金丸勲雄、杉本美智子、高橋マツ子、徳永美根子、中田朋子、原口マツノ、堀田昇、溝口英太郎、米山八重子、藤木和子、大内進、木下真紀、西郷陽子、田中弘、中山健介、宮下ヤス子、猪熊三枝子、平野隆之、高橋政子、北海京子、無津呂麻里、田中康夫、馬場義照、藤野さゆり、一ノ宮嘉弘、鹿見島 代、石山勝代、梅津睦子、江口富美子、川内真智子、柚木智博、波多江徳光、美島弘英、織田優平、石垣房子、高月幸子、市丸千賀子、井上狭衣、柏田睦子、川上久美子、藤森啓子、和多治子、青木輝代、山崎子ヨ子、宮本ミキヨ、合歡垣淑子、荻野スマコ、園田静江、林穂子、土井幸子、荒木治子、吉村レイ子、佐藤秀行、波多江武利、吉原耕太郎、高江芳男、谷脇友子、甲斐玲子、三島美也子、加藤優香、西村康子

II. 位置と環境

1. 地理的環境

調査地頭給遺跡は前原市大字西字地頭給に位置し、糸島半島の南西部にあたる。この地域は雷山川系に源を発する雷山川が北流し、この沖積作用によって徐々に平野を形成したものである。現在では雷山川は西に向きを変え、水田の中央を進み、加布里湾へと注いでいる。

この加布里湾と今津湾の間には、帯状の低湿地帯が存在し、この湿地帯に「糸島水道」と呼ばれる海峡があり、怡土と志摩は分断されていると考えられてきた。これに対して、近年、下山正一による縄文時代の海面変動の分析、地質・貝化石の分布調査によって、遅くとも縄文時代後期以降は泊一志摩間は陸地で繋がっていた可能性が高いと考えられている。これに依拠するならば、当時は加布里湾と今津湾が大きく湾入し、志摩と怡土を結ぶ陸橋は、交通の要衝として、または交易の拠点として重要な地域であることがわかる。その後、両湾とも江戸時代の干拓で丘陵際まで水田化され、現在に至っている。

2. 歴史的環境

周辺の遺跡を概観すると、雷山川の左岸地域では、まず志登支石墓群がある。志登支石墓群は、本遺跡の北東にあたり、昭和28年12月に文化財保護委員会によって発掘調査が行われている。調査の成果は、弥生時代前期～中期後半にかけての支石墓10基、甕棺墓8基が確認され、そのうち4基の支石墓について内部主体の調査が行われている。6号基からは打製石鏃6本、8号基からは標葉形磨製石鏃4本が出土しており、支石墓研究に大きく貢献した。この時、確認された弥生中期の甕棺墓群は、周辺の遺跡にも見られ、調査地頭給遺跡でも370基以上、さらに西側の台地でも畑の耕作土中に甕棺墓の破片が散乱していることから、集落を囲むように墓域が広がっている可能性がある。

本遺跡の南側では、潤中町遺跡、潤谷丁田遺跡、前後方円墳である潤神社古墳がある。このうち、潤谷丁田遺跡では、溝状遺構14条、土坑3基を検出している。SD-01、02、05、06、08では山陰形二重口縁壺、鼓形器台などを含む土器群が検出されており、周辺に古墳前期の集落が展開するようである。

さらに西側に目を向けると、潮志遺跡（A地点）、上町向原遺跡、前原西町遺跡2と海浜部周辺に点在し

ている。上町向原遺跡は、弥生時代～古墳時代にかけての墳墓群が展開する。数度にわたる大規模な造成工事によって、破壊されているため、詳細は不明であるもの、同地点で発見されたとする細形銅剣（泉立糸島高等学校所蔵）、素環頭大刀が現存している。素環頭大刀については、昭和32年9月に大型箱式石棺の西側壁外に棺外副葬されていたと報告されている。これについては、本来古墳の主体部であった可能性が示唆されており、近年行われた理科学分析においても古墳時代前期の可能性が高いことが指摘されている。

一方、浦志遺跡（A地点）では溝状遺構から小銅鐻、把手付壺形土器、前原西町遺跡2では瓦質土器、陶質土器が竪穴式住居、掘立柱建物から出土している。このような半島系遺物は、糸島地域では多く見られ、志登B遺跡5次、御床松原遺跡、深江井牟田遺跡、二雲・井原遺跡などが挙げられる。このような傾向は、韓半島との交流・交易が盛んであったことを伺わせるが、その貿易体制について白井克也氏は各時期の中心的な交易拠点をもとに、勸島貿易（弥生中期）→原ノ辻貿易（弥生中期末～後期後半）→博多湾貿易（古墳前期）として変遷することを指摘している。（白井2001）また、近年、久住猛雄氏は半島系土器の出土傾向の再検討から、勸島貿易（弥生中期前半～中期末）→原ノ辻＝三雲貿易（弥生中期末～古墳時代初葉）→前期博多湾貿易（古墳前期前半）→後期博多湾貿易（古墳前期後半）→金海貿易（古墳時代前期後半～末）とし、原ノ辻＝三雲貿易については、原ノ辻遺跡における糸島系弥生土器が多く検入することから、貿易体制の背後に「伊都国」が関与すると見る。また、三韓・楽浪系土器が原ノ辻遺跡では多く見られるのに対して、三雲・井原遺跡では三韓系土器が少なく、楽浪系土器が多いことから、楽浪系渡人は王都まで訪問するといった程度統制された交易・外交機構を想定されている。

次に雷山川の右岸地域では、志登遺跡群、今宿五郎江遺跡などがある。志登遺跡群では2～5次の調査が行われている。2次調査では弥生時代後期～古墳時代前期の住居跡12棟、土坑4基、溝1条を検出。3次調査では溝の埋土中から弥生後期の銅鏃が出土、5次調査では古墳前期の井戸が検出されている。また、2005年に調査された志登橋本遺跡では弥生時代後期～古墳時代前期にかけての溝状遺構1条、弥生時代後期の掘立柱建物1棟、古墳時代前期の竪穴式住居5軒が検出されており、弥生時代後期～古墳時代前期にかけての集落が大きく展開していると考えられる。

今宿五郎江遺跡は現在も継続して調査が行われている。全体の集落構造として、SD-100を挟んで、南北に台地があり、弥生時代中期中葉から南台地に集落が営まれ始める。SD-100には弥生時代中期後半～後期初頭の上層が大量に廃棄され、小銅鐸も出土しており、著しく集落が発展する。その後、弥生時代後期前半になると北台地に環濠が形成されているが、環濠内部は不明である。ただ、周辺の遺跡からは、瀬戸内系土器や山陰系の外米系土器が出土しており、海洋を介した交流が行われていた可能性が指摘されている。

このように周辺遺跡を含めて、徐々に「伊都国」の構造が明らかになりつつあるが、潤地頭給遺跡は弥生時代から古墳時代にかけての生産と流通を考える上で、重要な遺跡であり、今後、出土遺物の整理、報告書の刊行をもって、その責務を果たしていきたい。

【参考文献】

江野道和編 2005『潤地頭給遺跡Ⅰ』前原市文化財発掘調査報告書第89集

久住猛雄 2004『古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義』『人と王権と渡来人』大阪府立弥生文化博物館

白井克也 2001『動島遺跡と原ノ辻貿易』『弥生時代の交易』第49回埋蔵文化財研究集会

平尾和久 2006『生産と流通からみた伊都国と奴国』伊都国歴史博物館研究紀要 創刊号

岡部裕俊編 1988『前原地区遺跡群Ⅰ』前原町文化財調査報告書第28集

岡部裕俊編 1992『前原地区遺跡群Ⅱ』前原町文化財調査報告書第40集

岡部裕俊編 1985『志登遺跡群』（第5次）前原町文化財調査報告書第18集

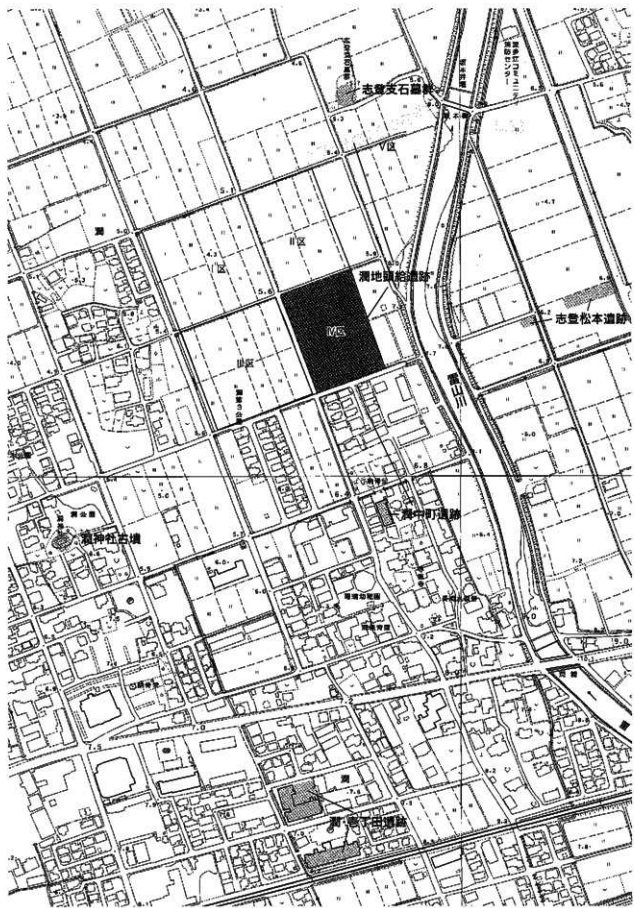
榎本義嗣・屋山洋編 1996『今宿五郎江遺跡Ⅲ、徳永A遺跡Ⅲ、丸隈山遺跡群Ⅰ』福岡市文化財調査報告書第479集

文化財保護委員会 1956『志登支石墓群』埋蔵文化財調査報告書第4集



1. 潤地頭給遺跡 2. 前原西町遺跡第2次調査地点 3. 前原北側古墳 4. 上町向原遺跡 5. 浦志遺跡群 6. 御神社古墳
7. 志登支石墓群 8. 志登遺跡群 9. 稲葉古墳群 10. 津和崎権限古墳 11. 御道長山古墳 12. 泊大塚古墳 13. 釜塚古墳
14. 貴山鏡子塚古墳 15. 上鎌子遺跡 16. 平原遺跡 17. ワレ塚古墳 18. 鏡塚古墳 19. 狐塚古墳 20. 三雲・井原遺跡
21. 三雲南小路遺跡 22. 嶋山古墳 23. 菓山古墳

第1図 周辺の主な遺跡 (1/50,000)



第2圖 水地頭給通附近主要通分布圖 (1/4,000)

Ⅲ. 潤地頭給遺跡 Ⅳ区の調査

1. Ⅳ区の調査

(1) 調査の概要

Ⅳ区はⅢ-E区の東隣接地であり、南北の同一微高地上に位置する。Ⅲ-E区については前年度に報告されており「潤地頭給遺跡Ⅰ」（江野羅2006）そこで発見された大溝、掘立柱建物をⅣ区でも検出している。

旧地形はⅢ-E区の微高地から派生する北東に向かって延びる微高地があり、北東側と南西側には落ち込みが存在する。微高地上の遺構は疎らで空開地が目立つが、大溝と繋がる北東側落ち込みには、大量の土器が検出されており、今回の報告はそれが中心となる。

検出された遺構は弥生時代中期の大溝1条、落ち込み、掘立柱建物3軒、土坑8坑、古墳時代の井戸1基、土坑1基である。

(2) Ⅳ区の遺構と遺物

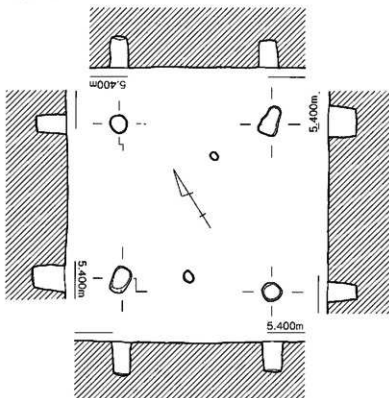
A. 掘立柱建物

いずれも1間×1間であり、竪穴式住居であった可能性もあるが、床面が存在しない為、判断が難しい。3号掘立柱建物は排水溝を巡らせるため、竪穴式住居の可能性があるが、本調査では竪穴式住居が全く検出されていないため、一応掘立柱建物として報告する。

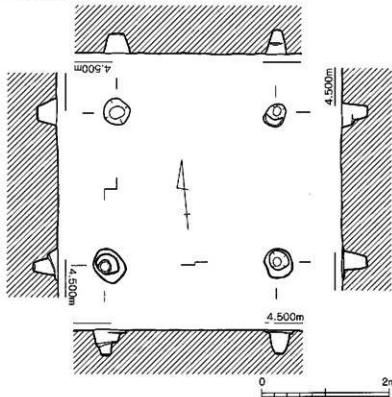
1号掘立柱建物（第3図）

微高地ほぼ中央、やや東側落ち込み寄りに位置する1間×1間の掘立柱建物である。柱間距離は柱穴中心で東西2.36m、南北2.66mで長方形を呈する。柱穴深は41～52cmと若干のばらつきがある。主軸方位はN-57°-Wである。土器が出土しておらず、時期は不明。

1号掘立柱建物



2号掘立柱建物



第3図 1・2号掘立柱建物平面断面実測図（1/60）

2号掘立柱建物 (第3図)

1号掘立柱建物の北東側に建てられている1間×1間の掘立柱建物で、主軸方位はN-5°-Eとほぼ真北を向く。柱間距離は柱穴中心で東西2.72m、南北2.38mを測り、長方形を呈する。1号柱穴の軸が若干ずれる。

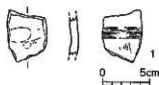
出土遺物 (第4図)

1は裏の胴部片で、柱穴からの出土である。外面は、横方向のハケメ、下位に縦方向のハケメを施す。弥生時代中期か。

3号掘立柱建物 (第5図)

調査区西側に位置し、北西側落ち込み寄りにある。1間×1間で、竪穴式住居であった可能性を残すが、土器が削平されていない状況を見ると、掘立柱建物であろうか。柱間は芯々で東西2.2~2.4m、南北で

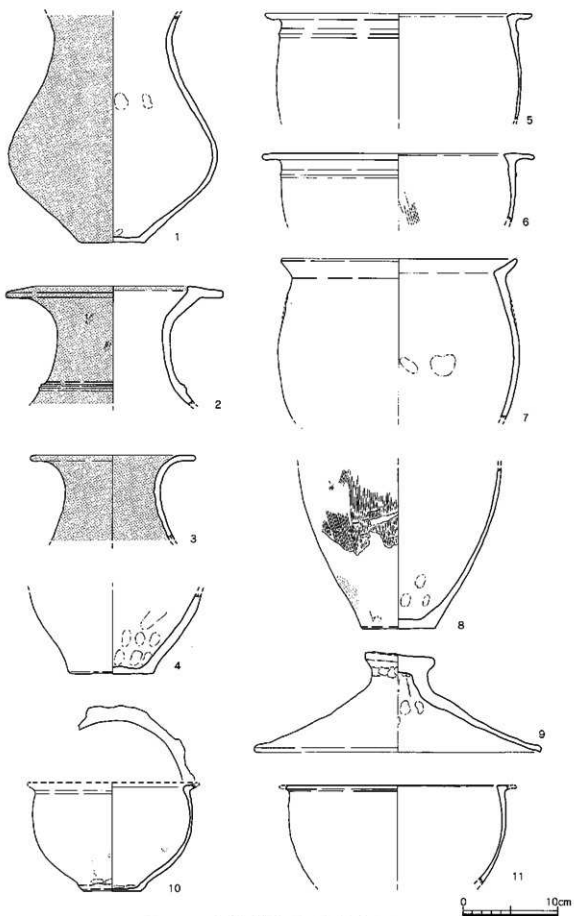
3.6mを測り、平行四辺形状に傾く。周囲に排水溝を巡らし、南から2mほどで西に折れ、谷の方向に延びる。排水溝は残りが悪く深さ10cm程度しか残っていない。土器は掘立柱建物内西側よりから北側にかけて分布しており、土器の多くが摩滅を受けており、残りが悪い。柱穴・排水溝からの土器は細片のみで、時期比定が難しいが、掘立柱建物内の土器から弥生時代中期後葉~末と考えておきたい。



第4図 2号掘立柱建物出土土器実測図 (1/4)



第5図 3号掘立柱建物平面・見通し実測図 (1/60)



第6图 3号独立柱建物出土土器実測图① (1/4)

出土遺物 (第6、7図)

図示した遺物は、すべて掘立柱建物内から北側にかけて分布していた土器群である。全体的に風化が著しく、実測に達さない破片も多い。落ち込みから出土する土器群は、ほとんど風化しておらず対照的である。

壺 (1~4) 壺は丹塗り磨研が施されているものが多い。1は袋状口縁壺で、口縁部を欠損する。胴の張出しが若干弱く、頸部の締まりが緩い。全体として風化が著しいが、丹塗りが一部残る。2は、鋸先口縁壺で、口縁~頸部にかけて残存している。口縁は外傾しており、口縁~外面頸部まで丹塗りが観察できる。3は広口口縁壺で、頸部まで残る。風化が著しいが内外面の丹塗りが認められる。4は壺の底部片で、内面の指頭圧痕が残る。

甕 (5~8、13) 5はL字状口縁の甕で、胴中位以下を欠損する。口縁下に低い三角突帯を巡らす。風化が著しく調整不明瞭。6は薄く延びるL字状口縁を持つ甕で、口縁下の三角突帯が低い。風化が著しく、わずかに外面の縦方向のハケメが観察できる。7はくの字状口縁の甕で、胴下半を欠損する。外面は風化が著しく、表面が剥落している。8は胴中位~底部のみ残存する甕。器面調整は、外面が縦方向のハケメ、内面は胴中位にナデ調整、底部付近に指頭圧痕を施す。外面胴下位に二次焼成痕があり、表面が剥落している。煮炊きに使用されたのであろうか。13は甕の底部片で、外面底部付近に縦方向のハケメがわずかに残る。

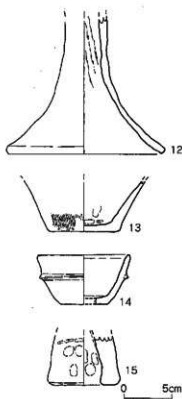
蓋 (9) 9はつまみを有する蓋である。つまみ外面を指押さえ、内面をシボリで成形する。裾部に指頭圧痕が残る。

鉢 (10、11) 10は内傾するL字状口縁を持つ鉢で、口縁部の打ち欠きが行われている。内外面には部分的に丹が付着している。11は中型の鉢で、L字状口縁を持つ。口縁~胴部が1/4程度残存する。

高坏 (12) 12は高坏の脚部で、裾部に向かってきれいに延びる。内面にはシボリ痕が明瞭に残る。

ミニチュア土器 (14) 14はミニチュアの鉢形土器で、底部を欠損する。胴中央に三角突帯を1条巡らせる。

器台 (15) 15は手捏ねによって成形された器台で、胴下位のみ残存。内外面の指頭圧痕が明瞭に残る。



第7図 3号掘立柱建物出土土器
実測図② (1/4)



3号掘立柱建物土器出土状況

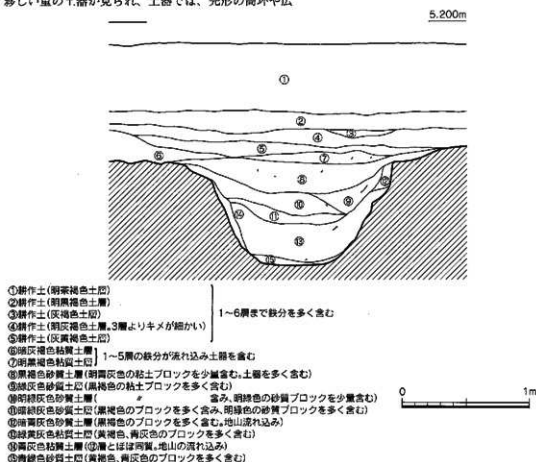
B、大溝 (第8、9図)

Ⅲ区で微高地を東西に横断する大溝は、Ⅳ区においても引き続き確認され、落ち込みへと繋がっている。大溝の規模は、全長約56m、幅2.15m、深さ0.81mであり、Ⅳ区では、全長56mのうち、約14mを検出した。Ⅲ区に比べ幅状な印象を受け、深さも20cm程度高いが、これは上面が削平を受けているためであり、西端の床面標高は3.280mとⅢ区A区東側断面の床面標高3.3mとさほど変わらない。断面形態は逆台形を呈し、両斜面とも上位に緩やかなテラスを形成する。

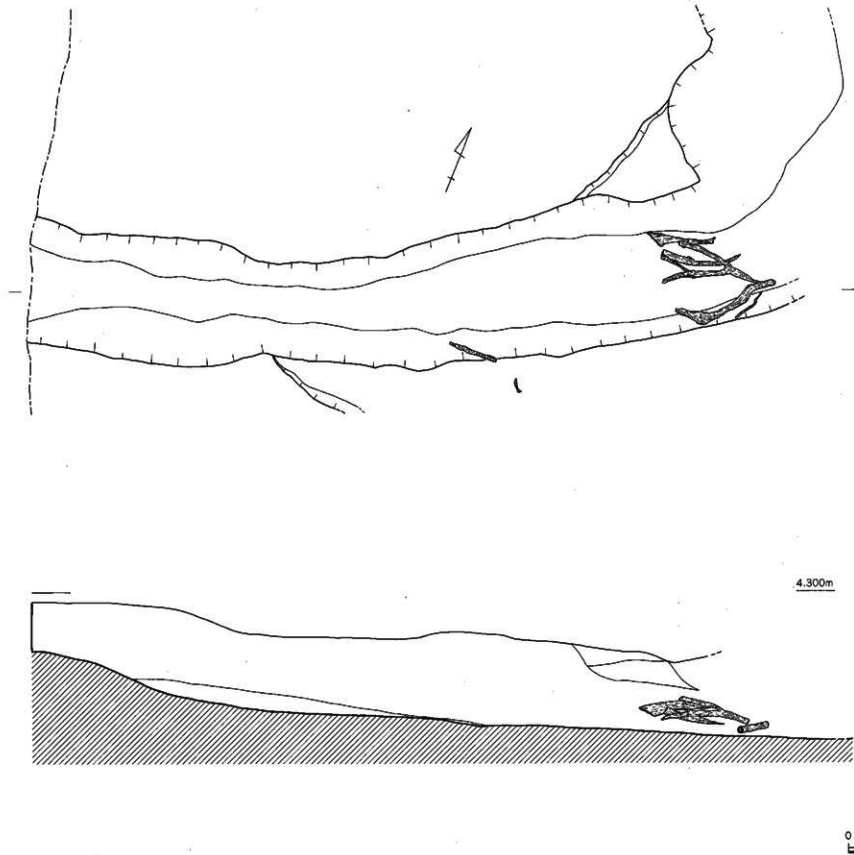
上層断面を観察すると、3回の堆積によって、この溝が完全に埋没している状況が伺えた。埋没過程を復元的に考えると、まず、13～15層の青緑色砂質土を中心とする層が堆積する。水分が多くグライ化しているため、多少の水の流れがあったのであろう。土器の出土は上層に比べかなり少ない。次に、9～12層の緑灰色砂質土層が堆積する。青緑色の地山がブロック状に多く混入するため、意図的に埋められた可能性がある。下層に比べ、土器が多く確認され、完形の土器も見られる。この段階で大溝は窪地状として残り、上層である8層の堆積によって、完全に埋没する。8層には、夥しい量の土器が見られ、土器では、完形の高環や広

口縁壺、丹塗り磨研土器、石器では、磨製石斧、石包丁、砥石などが出土している。また、底部穿孔土器は、この大溝からも検出された。

大溝は、落ち込みに向かって緩やかに標高を下げ、浅くなっていき、落ち込みとの連続部分では、深さ28cm、標高2.700mとなる。大溝は、落ち込みが沼地化した段階で掘削しており、その床面には落ち込みの影響で、腐植土層及び樹木、木杭の若干の集積が見られた。



第8図 大溝土層断面実測図 (1/30)



第9図 大溝断面実測図 (1/40)

出土遺物 (第10～12図)

大溝の出土土器は、上層がもっとも多く、下層は細片が少量出土しただけである。よって図示したものはほぼ上層のものである。

壺 (1～12) 1は素口縁の広口口縁壺で、約1/2程度残存する。頸部には暗文状のミガキがわずかに残り、胴中央で内から外への胴部穿孔が見られる。外面胴上位に二次焼成痕、内面にも一部コゲが確認される。祭祀に使用されたものか。2は9層から出土した広口口縁壺で、1/4程度残存。器面調整は外面頸部に暗文状の縦ミガキ、胴部が横ミガキ、頸部内面まで横ミガキを施す。3は口縁及び胴中位以下を欠損する広口口縁壺で、頸部が一且上に伸び、外方へ開く。2と同様頸部外面に暗文状の縦ミガキを施す。4は丹塗り磨研壺で、内面胴上位まで丹塗りを行い、底部付近には斑点に付着している。胴部が大きく膨らみ、底部に向かって強くすばまる。器面調整は胴部が横ミガキ、頸部が横ミガキの後、縦ミガキを施す。頸部と胴部の屈曲を強い横ミガキで作り出している。5は壺の胴部片。胴の形状から広口口縁壺であろう。胴部外面の横ミガキが明瞭に残り、内から外への胴部穿孔が確認できる。6は口縁が未発達な壺で、胴以下が欠損している。頸部外面は暗文状の縦ミガキを施す。7は胴下位を欠損する小型壺で、胴部内面にへら状工具によるナデが明瞭に残る。口縁上面に強いヨコナデを施す。8は口径が10cm程度の小型壺で、口縁が外側に向けわずかに発達する。9～11は短頸広口小壺で、4世紀後半～末。9はナデによって成形される。胴中位～底部にかけて屈曲がある。10は胴下位を欠損する。器面調整は内面がナデ、指押さえ外面が胴下位に縦方向のハケメを施す。11は口縁部を欠損する小壺。器面調整は外面がハケメ、内面が指押さえである。12は壺の胴部片か。2本1条の粘土紐を貼付しており、2本とも下方にやや開く。内外面ともにナデ調整。

壺 (13～18) 13～17は大溝の腐植土層からの出土である。13は逆L字状の口縁を持つ壺で、外面の口縁～胴上位にかけてススが附着、内面には胴中位でコゲ(噴水線)が確認される。14は胴部に若干の丸みを帯びる壺で、口縁上面に強いヨコナデを施す。口縁部～胴部にかけてススが附着し、内面にも胴部上位にコゲが確認できる。煮炊きに使用されたものであろう。15は水平な鋤先状口縁を持つ壺。口縁～胴上位にかけて1/6程度残存。胴部外面に10本の縦沈線、口縁部上面にミガキを施す。胎土は精良。16は口縁～胴上位にかけて残存する壺で、口縁は内傾する。外

面はススが濃く付着し、内面も胴上位までコゲ(噴水線)が見られる。17は藍底部片。摩滅が著しく調整不明瞭であるが、内面底部の指頭圧痕は確認できる。18は上げ底状の底部を持つ壺で、口縁部を欠損する。外面胴部に縦方向のハケメが残る。胴上位にススが附着する。使用痕跡は見出しなかったが、表面が一部剥離している。

無頸壺 (19、20) 19は口縁部が上方に立ち上がり、内面の屈曲が強い無頸壺である。内外面胴上位のハケメは細かいが、胴下位のハケメは粗いハケメを使用する。弥生時代後期後葉。20は口縁上面から胴部まで丹塗りが施される無頸壺で、内面には丹が斑点状に附着する。逆L字状口縁は強く内傾している。外面の横ミガキが部分的に残っている。弥生後期前葉。

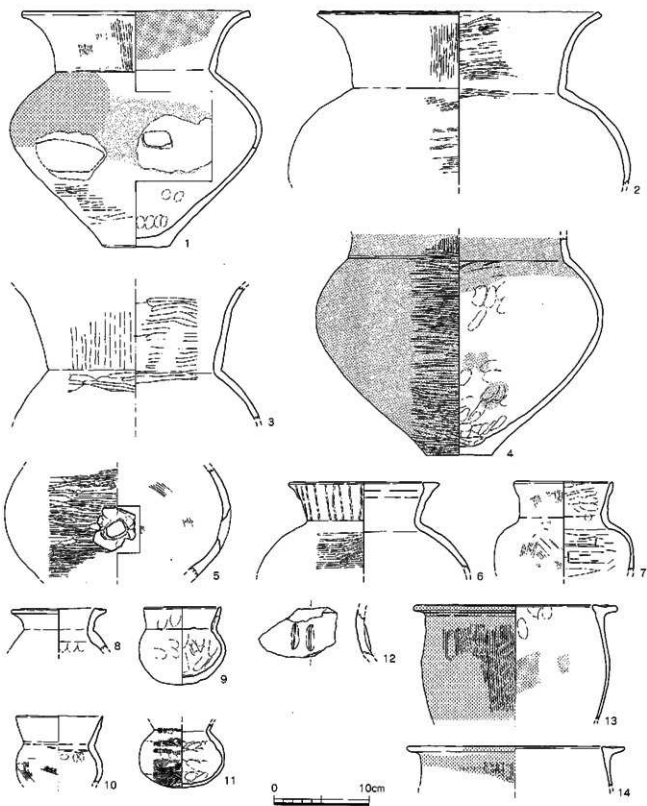
鉢 (21～25) 21は外傾する鋤先口縁を持つ鉢形土器で、底部外面を除き、全面丹塗りが施されている。風化によりミガキの痕跡が不明瞭である。22～25は素口縁の鉢形土器で、22は胴中位から口縁にかけて厚みが増していく。弥生中期末。23は丹塗り磨研の鉢で、内外面ともに横ミガキを施す。胎土は精良。24は口径23.6cmで、内外面ともにヨコナデ。25は外面に大きく黒斑が見られ、内面は指頭圧痕が残る。弥生後期初葉。

壺 (26～29) 26は丸底の壺で、胴部穿孔が見られる。器面調整は外面縦方向のハケメ、内面にはナデの跡が明瞭に残る。27は口縁が内傾し、丸底の壺で、外面にススが強く残る。5世紀後半～末。28は底部をわずかに欠損する壺で、外面のハケメは、胴上位～胴中位にかけて1回、胴下位に1回の2回に分けてハケメを施す。5世紀前半。29は丸みを帯びた平底から斜めに立ち上がる壺。内面には板状工具によるナデで器面調整を行う。時期は5世紀前半。

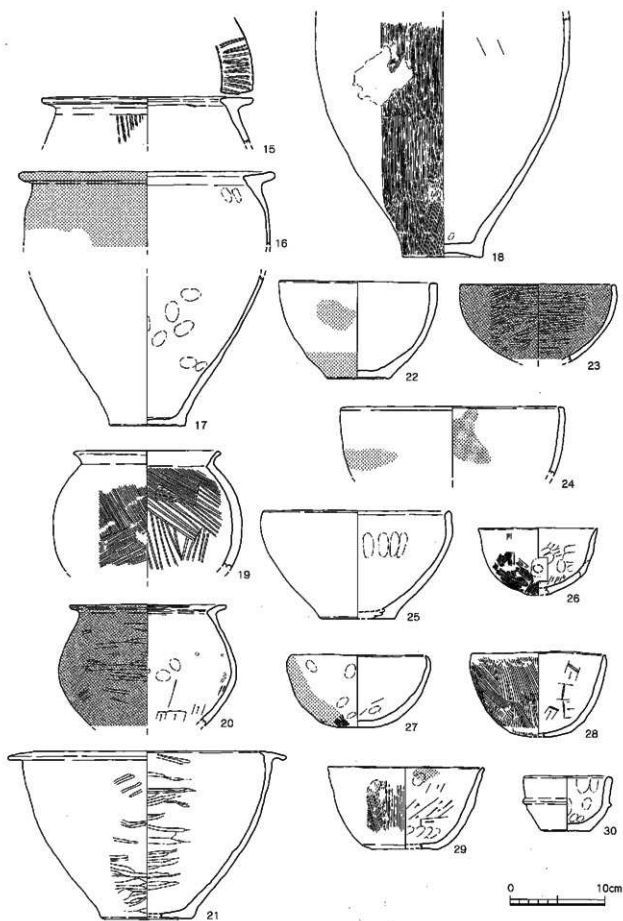
小型鉢 (30) 胴中に三角突帯を巡らす。外外面ともにナデ調整。

高坏 (31～32) 31は外傾する鋤先口縁を持つ高坏で、脚部を欠損する。坏部内面に横ミガキがあり、脚部外面にも縦ミガキが確認されることから、外面も本来ミガキがあったと考えられるが、風化のためその痕跡を確認することができない。口縁端部に黒斑がある。32は坏部片で内外面にハケメ調整を行う。屈曲部の具合から5世紀代か。

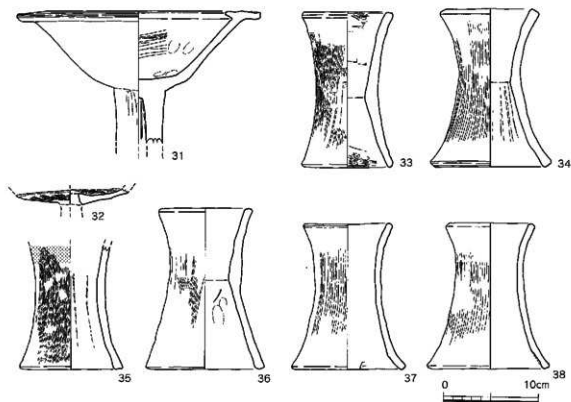
器台 (33～38) 35、37、38は9層から出土したもの。33は口径と底径がほぼ同じ大きさの器台。器面調整は外面を縦方向のハケメ、内面をナデ。34は口径よりも底径が大きくなるタイプの器台。外面の縦



第10圖 大溝出土土器實測圖① (1/4)



第11图 大冢出土土器実測図② (1/4)



第12図 大溝出土土器実測図③ (1/4)

方向のハケメが明瞭に残る。35は胴上位～底部の一部にススが附着する。内面にシボリ痕跡が薄らと残る。36は34と同様に底径が広い器台で、完形である。外面は縦方向のハケメの後、強いナデによってハケメが消されている。37、38は34や36に比べて、器高が低くなり、底部が口径よりもさらに大きくなる器台である。37はほぼ完形。外面は風化のため、ハケメ調整が不明瞭である。38は37と同様風化のため、調整不明瞭。裾部の一部が欠損している。

上層には古墳時代前・中期の土器が混入しており、それを除けば、弥生時代中期前葉～後期前葉の土器である。しかしながら、その主体はⅢ区の調査でも明らかかなように、その主体は弥生時代中期前葉～後葉にかけてであり、この時点で、大溝のほとんどは埋まっていると考えられる。中期末～後期の土器は、前代に比べて僅かであり、廃棄行為はこの時期まで緩々と行われていたのであろう。

C. 落ち込み

北西側落ち込み (第13~15図)

大溝が穿ける調査は北西側の落ち込みである。落ち込みは北西へと延びており、南側へは続かない。湧水は著しいものの、最下層には腐植土層が20cm程度堆積し、明確な掘り込みを持たないことから、沼地化していたと考えられる。落ち込みの規模は、検出長37.4m、幅23.8m、深さ1.14mを測り、東西断面では逆台形状となる。底面の標高は2.800mである。落ち込みの断面観察では、最下層の茶褐色土層(9層)は腐植土層で、その上層には明青色砂層が堆積している。大溝はこの9層から切り込んで造られており、大溝の底面に堆積する腐植土層も谷の腐植土層が元になっていると考えられる。Aトレンチ10層、9層から上位の落ち込み土層、大溝土層との対応は以下のとおり。Aトレンチ5層=落ち込み7,8層=大溝12~15層
Aトレンチ3層=落ち込み5,6層=大溝9~11層
Aトレンチ1,2層=落ち込み1~4層=大溝8層
大溝埋土=6層
大溝同様3回の堆積によって埋没しており、1~4層の土器量は少なく、上位に行くにしたがって土器量自体が増えていく状況は大溝のそれと変わらない。

調査については、工事の計画上調査地点が運動場になる予定であったので、全て調査を行わず、遺構の保全を優先して、土器の堆積が薄い落ち込みと大溝が接続する部分を対象に調査を行った。まず、落ち込みに直行する形でAトレンチを設定し、調査を行ったが、土器の堆積が40cm以上もあり、調査期間の都合上、現地における検出土器の実測・取上げは不可能であると判断した。その代わりに調査グリッドを設定し、遺物の取上げを行うことで、土器の出土地点の把握に努めた。調査グリッドは、平面直角座標Ⅱ系に準拠し、東西軸を西からA~J、南北軸を1~16まで設定、その組合せで取上げを行っている。

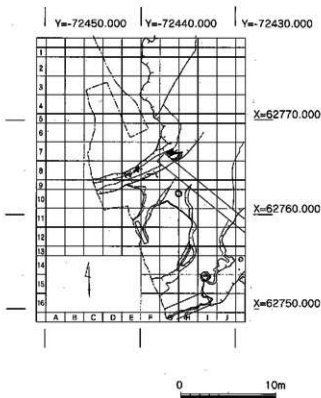
落ち込み全体の土器の出土傾向として、大溝と落ち込みの接続部分に最も多く見られ、そこから離れるにしたがって、出土量が減少している傾向にあり、意図的にこの場所に廃棄していることが分かる。出土遺物としては、各種の土器群から祭祀用の丹塗り磨研土器、石器は石包丁、石斧、砥石などが出土している。また、出土土器群の中に完形の上器が逆さに置かれた状態で発見され、丹塗り磨研土器や胴部穿孔土器、底部穿孔土器が多く見られることから、水辺の祭祀もしくは湧水点祭祀が考えられるが、それについては、総括において、詳しく検討してみたい。

南東側落ち込み

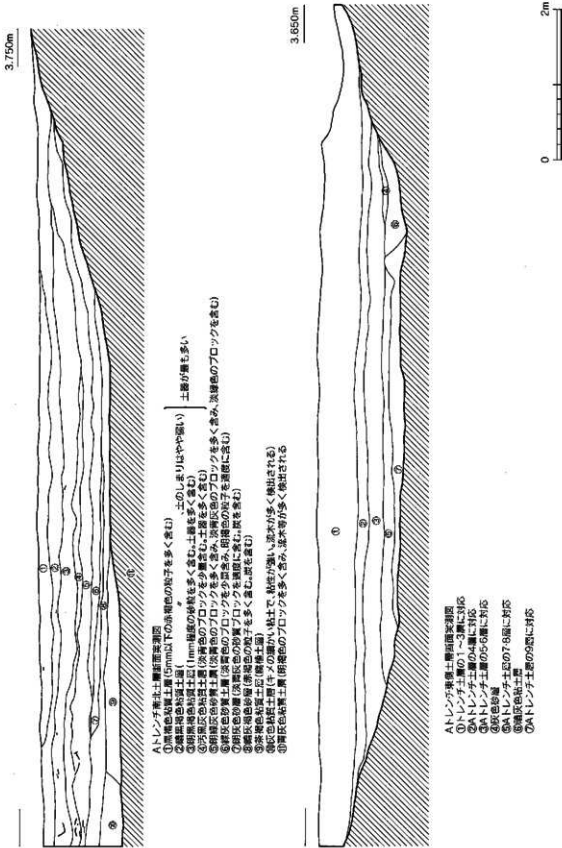
南東側で確認した落ち込みで、南北方向に延びるものである。最下層は黒褐色粘質土層(腐植土層)で、その上層には砂層が堆積する。底面は逆台形であるが、北西側と比べ、底面の幅が短い。最下層には流木・木片が出土しており、北西側落ち込みと同様、沼地化していたと考えられる。

Aトレンチ1,2層出土遺物 (第16図)

- 壺 (1~3) 1は広口口縁壺で、頸部が一凹内傾に立ち上がり、上位で外方へ大きく開く。外面及び胴上位内面まで丹塗りで、ミガキを施す。弥生中期末。
- 2は鋤先口縁壺の口縁部片。口縁部に刻み目がある。
- 3は袋状口縁壺で、M字突帯が欠損し、その痕跡のみ残る。外面丹塗りで、横ミガキを施す。
- 複合口縁壺 (4) 胴上位に最大径をもち、頸部と胴部の境に刻み目のある三角状突帯を1条巡らす。胴内外は縦方向のハケメを施す。後期後半。
- 蓋 (5) 裾部を欠損し、外面にハケメが施される。
- 小型埴 (6) 底部が上げ底状の小型埴で、外面には横ミガキがわずかに残る。胎土は精良。
- 小型鉢 (7) 丸底を欠損する小型鉢で、内面はヘラ状

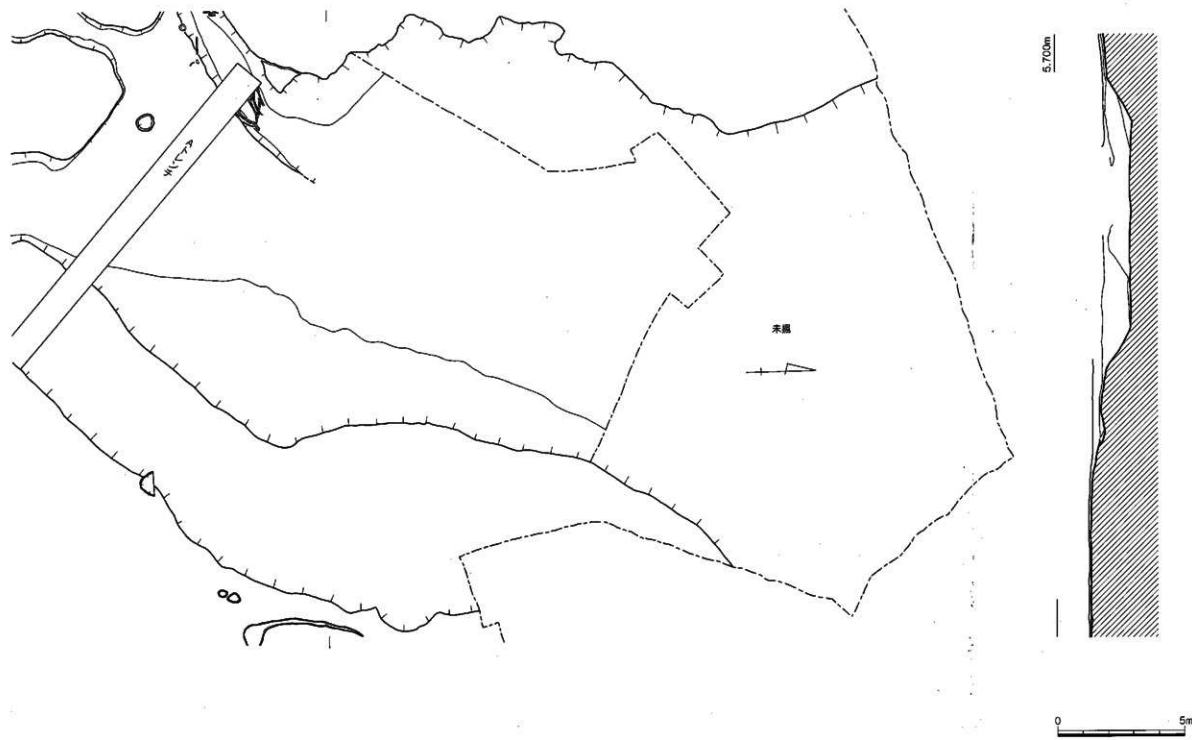


第13図 大溝・落ち込み調査グリッド平面図 (1/400)

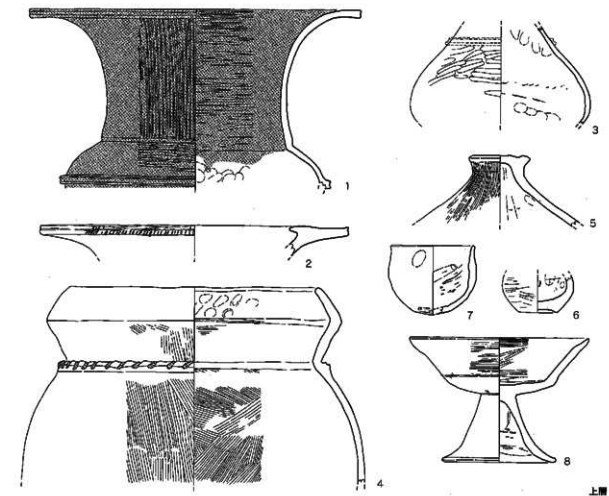


- Aトレンチ帯土層断面図
- ①黄褐色粘質土層 (5mm以下の赤褐色の粒子を多く含む)
 - ②黄褐色粘質土層 (1mm程度の粒を多く含む。土層を多く含む)
 - ③黄褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ④赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑤赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑥赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑦赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑧赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑨赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
 - ⑩赤褐色粘質土層 (赤褐色の粒子を多く含む)
- Aトレンチ帯土層断面図
- ①トレンチ帯土層の1~3層に相当
 - ②Aトレンチ帯土層の4層に相当
 - ③Aトレンチ帯土層の5-6層に相当
 - ④赤褐色粘質土層
 - ⑤Aトレンチ帯土層の7-9層に相当
 - ⑥赤褐色粘質土層
 - ⑦Aトレンチ帯土層の9層に相当

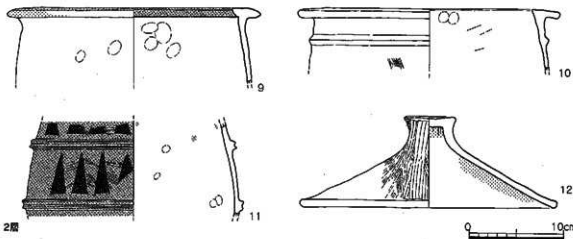
第14図 落ち込み及びAトレンチ帯土層断面図 (1/50)



第15図 落ち込み全体実測図 (1/150)



上層



1・2層

第16図 Aトレンチ上層、1・2層出土土器夷削図 (1/4)

工具によるナアを施す。

高坏 (8) 短脚の高坏で、坏部内外面ともに横方向のハケメが残る。

Aトレンチ1・2層出土物 (第16図)

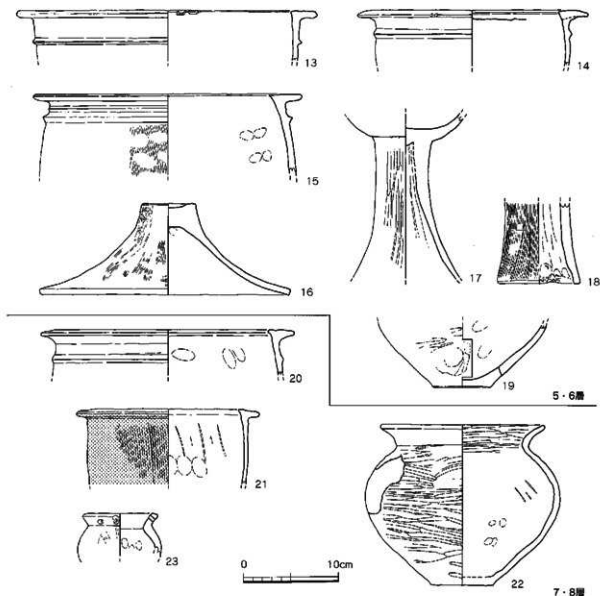
甕 (9~11) 9は肥大し外傾する鋤先口縁を持つ甕で、外面に二次焼成痕がある。10は外傾する逆L字状口縁を持つ甕で、口縁下に三角突帯を1条巡らす。11は

外面丹塗りの樽形甕で、胴上位部分である。M字突帯を2条巡らし、その間に細かいミガキを放射状に施し、暗文風としている。内面は丹が斑点状に付着する。

蓋 (12) 頂部が若干へこむ蓋で、外面に粗いハケメを施す。

Aトレンチ5・6層出土物 (第17図)

甕 (13~15) 13は水平な逆L字状口縁を持つ甕口縁



第17図 Aトレンチ5・6層、7・8層出土土器実測図 (1/4)

の一部に打ち欠きがある。14は口縁部に刻み目のある甕。15は外へ発達した逆し字状口縁を持つ甕で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。

蓋 (16) 頂部が強くへこむタイプの蓋で外面には細かいハケメを行う。

高坏 (17) 長脚の高坏で、脚部には縦ミガキを行う。

器台 (18) 胴から上位を欠損する器台で、器面割痕は、外面が縦方向のハケメ、内面がシボリ調整を行う。

鉢 (19) 胴下位に内から外へ穿孔を行う鉢で、外面に横ミガキがわずかに残る。

Aトレンチ7・8層出土遺物 (第17図)

甕 (20、21) 20は若干内傾する鋤先口縁を持つ甕。

口縁下に弱い三角突帯を持つ。21は胴下半を欠損する甕。胴部外面にススが濃く付着する。煮炊きで使用されたか。

甕 (22) 精良な胎土を使用した短頸甕で、灰黄色である。胴部外面、頸部まで横ミガキが施される。胴部の一部において器面が剥落しているほか、口縁部も打ち欠きしている可能性がある。弥生時代後期前葉。小型鉢 (23) 底部を欠損する小型鉢で、頸部に焼成前穿孔が2つある。

落ち込みからの出土土器は弥生時代中期前葉～末が主体である。大溝とほぼ同時期に埋没しており、谷の機能が停滞したとき、大溝も廃棄されたのであろう。

大溝・落ち込み出土遺物

同示した十器の大部分が上層に属している。

E-8 (第18~20壺)

壺 (1~5、10、25) 1は鋤先口縁蓋で胴部を1/3程度欠損する。頸部は緩やかに外方へ立ち上がり、口縁は外傾する。頸部外面は縦ミガキによって暗文を表し、胴部は横ミガキを行う。胴部の最大径及びその上位に2条のM字突帯を巡らす。頸部と胴部の境は細かな打撃による切り離しがなされ、突帯にも打ち欠きが認められる。2は胴上位に最大径を持つ蓋で、その上位に三角突帯を1条巡らす。胴部外面は横ミガキ、底部は縦ミガキ、内面は頸部~胴上位まで横ミガキが施される。3は素口縁の広口口縁蓋で、口径が胴部最大径を超える。器面調整は外面頸部が暗文風の縦ミガキ、胴部~底部が横ミガキで、内面は口縁~胴上位まで横ミガキ、胴中位以下は指押さえが行われている。4は蓋の底部片。外面底部付近は横ミガキ、内面は板状工具によるナデが明瞭に残る。5はわずかに口縁が外方に発達する小蓋で、形態に前期の名残がある。底部は平底で、胴があまり張らない。器面は風化のため、調整不明瞭。外面に二次焼成痕あり。10は短頸蓋で1/2程度残存する。胎土はやや精良で、器面調整は、外面胴部が横ミガキ、内面屈曲部に横ミガキが残る。25も短頸蓋。10に比べ胴の最大径がやや下がり、口縁も直立気味である。胴部外面に横ミガキを施す。

壺 (6~8) 6は内傾する逆L字状口縁を持つ蓋で、底部がわずかに上げ底状となる。外面は縦方向のハケメ、内面はへら状工具によるナデ調整。7は鋤先口縁を持つ蓋で、口縁下に割い三角突帯を1条巡らす。胴下半にススが附着する。

8は外傾する逆L字状口縁を持つ蓋で、3/4程度残存する。胴中位に外から内への穿孔。胴下位に内から外の穿孔が行われ、外面剥離が著しい。

鉢 (9、11) 9は外傾する鋤先口縁を持つ鉢で、口縁下に三角突帯を1条巡らす。胴下位に二次焼成痕、口縁の打ち欠きが認められる。11は口縁がわずかにL字になる鉢形土器で、底部が薄い。外面は縦方向のハケメ、内面はへら状工具によるナデ調整を施す。

蓋 (12、13) 12はつまみを持つ蓋で、頂部上面を強くへこませる。ほぼ完形に近い。13はつまみを持たない小形の蓋で、外面にわずかにハケメが残る。

高環 (14~17) 14はやや外傾する鋤先状口縁を持つ高環で、環部の傾が深く、やや長脚である。環部内面~脚部外面まで丹塗りが施され、ミガキ調整が行われる。口縁部の打ち欠きあり。15は14に比べ、口縁

内側の突出が大きくなり、環部高も低くなる。脚部もより長くなる。環部内外面、脚部外面にミガキが行われる。16は高環の環部のみである。15に比べさらに杯部高が低くなり、より長脚化するものである。口縁部上面は風化により器面が剥離している。17は高環の脚部片で短脚である。環部内面及び脚部外面に縦ミガキを施す。裾部の穿孔が1箇所確認できる。

器台 (18~24) 18、19は口径が底径よりも小さい器台で、上位にくびれ最小径があるもの。20は18、19に比べて、くびれ部が幅広となる。21はさらにくびれ部が幅広となり、器高も低くなる。22~24は器台片で、外面縦方向のハケメ、内面はナデ調整を施す。

E-9 (第20、21壺)

壺 (26、27) 26は素口縁の広口口縁蓋で、頸部が外方に開いていくが、胴部最大径が口径を上回る。胴部は風化が著しい調整不明瞭であるが、頸部内外面にミガキを施す。27は口縁部を打ち欠いている蓋で、胴部にミガキがわずかに残る。

壺 (28~34) 28は逆L字状口縁の蓋で、口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面に二次焼成痕、薄いススが附着する。29は、内傾する逆L字状口縁を持つ蓋で、胴部の張り出しがわずかに強い。30は口縁部上面に丹塗りが残る蓋。胴部外面にはススが帯状又は斑点状に附着するが、これは吹きこぼれの影響であろうか。31は底部が欠損し、内側にやや突出する鋤先状口縁を呈する。外面胴部の細かい縦方向のハケメが残る。32はやや外傾する鋤先状口縁を持ち、口縁下に三角突帯が1条巡る。外面胴部表面の剥落が著しい。33、34は甕底部片。33は底部付近に二次焼成痕、外面胴下位および内底面にススが附着する。

鉢 (35) 35は外傾する逆L字状口縁を持つ鉢で、内面にコゲが確認される。

蓋 (36) 36は頂部から裾部にかけて縦方向のハケメが施されている。裾部径26.1cm。

高環 (37~39) 37は外傾する鋤先状口縁を持つ高環で、環部の器高が低くなっている。環部の内外面は横ミガキ、脚部は縦ミガキを施す。38も鋤先状口縁が外傾するが、内への突出がまだ小さく、環部の器高も高い。内外面にミガキを施す。39は37と同様の型式で、内外面にミガキが施される。

器台 (40、41) 40は中位よりやや下がったところにくびれの最小径がある器台。41は中位以下が欠損するもので、外面縦方向のハケメは明瞭に残る。

ミニチュア土器 (42) 42は底部が一部欠損し、内面に横くススが附着する手捏ね土器。

E-12 (第21図)

脚台付壺 (43) 43は台付になる脚台部片。弥生時代終末期。

F-7 (第22図)

器台 (44、45) 44は全体的に幅広く、口径が広くなり、底径とあまり変わらない器台。45は指押さえによって成形される器台で、上位を欠損する。

小形鉢 (46) 46は胴部～底部にかけて残存。外面は細かなハケメを施す。

F-8 (第22～31図)

壺 (47～58、62、63、66～69) 47～56は広口径線壺。47は頸部が大きく開き、口径と胴部最大径がほぼ同じとなる。底部はやや安定を欠く平底で、底部を除く外面及び内面胴上位まで、丹塗りが施される。頸部外面には暗文風の縦ミガキを行う。48は頸部外面に12～13条1単位の暗文風縦ミガキが5箇所確認される。外面は、痕跡は少ないが丹塗りが施されていた可能性が高い。49は外面に灰化物が付着する。頸部外面には5mm間隔で暗文風の縦ミガキが施される。胴部は横ミガキ、底部付近で縦ミガキ調整を行う。50は丹塗りの広口径線壺で丸窓がある。焼成後細かな敲打によって丸窓は形成されており、内から外への敲打後、外から内への補助的な敲打によって外見を整えている。また、口縁部の打ち欠きも行われている。祭祀土器としての性格を備える。51は底部を欠損する。丹塗りは外面～頸部内面まで施され、ミガキ調整を行う。1/3程度の残存。52は口縁に薄らと丹塗りが残る。全体的に風化が著しいが、頸部には暗文風の縦ミガキが観察できる。53は頸部が短く、肩もあまり強くない。頸部には暗文風の縦ミガキが薄らと観察できる。54は底部を含む1/3程度欠損する丹塗りの広口径線壺。頸部が長く、その頸部外面に10条1単位の暗文風縦ミガキを7箇所施す。胎土は精良である。55は口縁～胴上位まで1/2程度残存する。内面に比べ、外面は風化の為、薄くミガキが残る。56は胴部に対して頸部が大きく開く丹塗りの広口径線壺で、口径が胴部最大径を上回る。底部付近は被熱によって器面が剥落している。胴部内面にはナデ調整の際の爪痕が観察できる。57は胴上位に外から内への胴部穿孔がある。全体的に風化が著しいが、外面胴下半～頸部内面までミガキが確認できる。丹塗りは底部を除く外面から頸部内面まで施される。58は胴部のみが残存する広口径線壺。胴部最大径にM字突帯を1条巡らし、幅1.5cm程度の突帯の打ち欠きが行われている。62は肩が張らず、胴部最大径にM字突帯を1条巡らす大型壺の脚

部片。63は胴中位以下が残存する壺で、胴部最大径にM字突帯を1条巡らす。66は外傾する鋤先口縁を持つ壺で、胴下位を欠損する。外面にススが附着している。弥生時代中期中葉。67は袋状口縁壺の胴部片。外面胴上位は暗文風の縦ミガキ、胴中位からは横ミガキ調整を行う。丹塗りは外面～内面胴上位までに至り、底部付近に斑点状に附着する。68は胴中位～底部にかけて黒斑が大きく付着。胴部最大径に弱い三角突帯を1条巡らせる。69は在地系の複合口縁壺から発展する土器で、3世紀末ごろか。

大型壺 (59～61、64、65) 59は頸部を打ち欠きによって欠けているもので、胴部最大径に三角突帯を1条、その上位にM字突帯を1条巡らせる。胴中位に幅3.1cmの焼成後穿孔が行われるほか、胴部全体に大きく二次焼成痕が認められる。60は59に比べやや肩が張る大型壺で、やはり頸部を打ち欠きによって欠けている。胴部最大径とその上位にM字突帯を2条巡らせ、その突帯に打ち欠きが行われている。内外面ともにナデ調整。61も頸部を打ち欠きによって失う。器面調整は外面ナデ調整、内面へう状工具によるナデ調整が行われる。64は大型の鋤先口縁壺で、頸部が大きく開きそして長く発達し、鋤先口縁へと繋がる。口縁は内側に強く突出し、外傾している。頸下位および胴上位に内から外へ焼成後穿孔があるほか、胴部最大径の上下位にそれぞれ貼付されたM字突帯が打ち欠きが認められる。65は打ち欠きによって頸部を欠損する大型壺で、器面調整は外面ハケメの後ナデ消し、内面へう状工具によるナデ、指押さえ調整を行う。

壺 (70～87) 70は胴部に丸みを帯びる壺の口縁部片。口縁上面～外面にかけて丹塗りを施す。71、72は鋤先口縁の内側が若干突出する壺で、73～81は鋤先口縁の内側が突出する壺で、底部の厚みも71に比べて小さくなる。71は外から内への胴部穿孔が行われている。底部内面付近にススが附着する。72は外傾する口縁下に三角突帯が1条巡る。胴部外面の縦方向のハケメがわずかに観察できる。73は口縁下の突帯が剥落している。口縁上面のみ丹塗りの痕跡が認められる。74はほぼ完形。外面胴下位に帯状の二次焼成痕があり、胴上～中位にかけてススが附着する。煮炊きに使用された後に廃棄されたものか。75は砲弾型の壺で底部を欠損する。外面胴下位に二次焼成痕、胴中位にススが附着する。内面胴下位にコゲが観察できることから、一度使用されたものが廃棄されている。76は内傾する口縁下に三角突帯を1条付す。77は口径が43.1cmの大型壺で、胴部外面に荒い縦方向のハ

ケメを施し、黒斑が大きく残る。78は外面全体にススが薄く付着し、内面にもコゲが見られる。胴部穿孔の破断面にススが付着していないことから、使用後穿孔されたと考えられる。口縁部打ち欠きあり。79、80は胴中位～底部まで残存。79は底部外面に二次焼成痕あり、その上位にはススが濃く付着する。80も79同様使用痕跡があり、外面胴中位にススの付着、内面にはコゲが観察できる。81は口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面の縦方向のハケメが明瞭に残る。82は内から外への胴部穿孔がある。底部の作りは粗い。83は胴部～底部にかけて残存。外面胴上位にスス、内面胴下位にコゲが付着する。84は口縁～胴中位まで残存。外面は8本1単位の縞風縦ミガキを施す。丹塗りは口縁上面～外面、内面は丹が垂れた状態である。85～87は樽形の甕。85は逆L字状口縁の打ち欠きが行われている甕で、この打ち欠きによって、口縁上面の2つの穿孔は壊されている。胴下位には内から外への胴部穿孔が行われている。86は口縁内側の突出があまり発達しない甕で、口縁下に三角突帯を1条巡らす。外面に薄らミガキが残る。87は胴中位～底部まで残存で、外面横ミガキ。

鉢 (88～99) 88は逆L字状口縁を持つ鉢で、胴部に大きく穿孔を行う。外面に薄くススが付着する。89も胴下位に穿孔を行う。外側の器面が剥離していることから、内から外の穿孔。90は外傾する鋤先状口縁を持つ鉢で、口縁下の三角突帯は部分的に垂れている。器面調整は外面胴上～中位まで横ミガキ、胴下位は縦ミガキを行う。外面胴部及び内面胴下半に黒斑がある。91は底部以外全面丹塗りで磨研の鉢。ミガキがきれいに残る。外面底部に黒斑があり、直立状態で焼成されたことがわかる。92は鋤先状口縁がやや外傾する。使用痕跡があり胴部に強い二次焼成を受け、器面が赤変、部分的に剥落する。また、ススが胴下半に縦帯状に付着し、内面はコゲが観察される。93は小形で鋤先状口縁を持つ鉢。外面胴中位に帯状のススが付着する。94は外傾する鋤先状口縁を持つ鉢で、底部がやや厚い。95はやや外傾する逆L字状口縁を持つ鉢で、口縁に2箇所の穿孔(上一下)と対角上に1箇所が確認できるが、うち2箇所が口縁部の打ち欠きによって壊されている。外面胴部は明らかに被熱しており、一部器面が赤変、全体的にススが濃く付着している。内面胴部は胴上位～底部までコゲが付着し、胴上位の噴水線が明瞭である。96、97は糸口縁の小型鉢。97は底部以外全面丹塗りで、外面の横ミガキが明瞭に観察できる。98は口縁が欠損しているため、

口縁形態が不明であるが、胴部が屈曲し、くの字口縁となるのか。外面丹塗りで、横ミガキを行う。内面底部付近にも斑点状の丹塗りが認められる。99は鉢の底部片。

蓋 (100、101) 100は裾部に向かってきれいに延びる蓋で、外面縦方向のハケメが残る。101は小形の蓋で、外面に丹塗りが施される。

高坏 (102～111) 102は水平な鋤先状口縁を持つ高坏で、坏部の懐が深い。坏部に穿孔が見られ、内から外への打撃によって形成される。内外面ミガキ調整。103は裾部を欠損し、102に比べ坏部高が低くなる。口縁が外へあまり発達していない。104は脚部を欠損する。坏部外面にススが帯状に付着する。105は鋤先状口縁が発達し、外傾する。坏部内面～脚部中位内面まで丹塗りを施す。106は水平にきれいに延びる鋤先状口縁が特徴的。脚部と坏部を敲打により切り離して廃棄している。丹塗りで磨研土器。107は鋤先状口縁がやや外傾する。風化が著しいが、部分的に丹塗りが残る。108は坏部高がかなり低くなり、長脚となる高坏である。鋤先状口縁も大きく外傾する。屈曲部下位にM字突帯が1条走る。109も全面丹塗りで、ミガキの痕跡が不明瞭。110は口縁の内側への突出が大きく、その上面は風化により器面が剥落している。111は小形の高坏で、残存高で9.0cm。丹塗りが施されており、丁寧なミガキが施される。

器台 (112～125) 112、113は口径と底径がほぼ同じ器台で、外面縦方向のハケメ、内面へら状工具によるナデ調整。114は底部が幅広い器台。全体的に風化が著しい。115は幅広い口径が口径を上回る。外面の粗いハケメがよく残っている。底部の一部に打ち欠きが行われる。116は器高が低く、末広がりで、器台。内面中位は器面の剥落である。117～121は上位が欠損するもの。122、123は口縁が逆L字形になる器台で、外面縦方向のハケメ、内面へら状工具によるナデ。124は作りの粗い器台で、指押さえ、ナデ調整を行う。125は弥生時代終末期の器台。ミニチュア土器 (126) 126は完形の小型鉢。指ナデ調整を行う。

F-9 (第31～34図)

大型甕 (127) 127は頸部の破断面における敲打痕が不明瞭であったため、ここでは欠損として取り扱う。胴部最大径とその上位にM字突帯を2条巡らす。外面胴上～中位にかけて、丹塗り、横ミガキが観察される。甕 (128、129、141、142) 128は口縁部を欠損する。全面丹塗りで、風化の為、ミガキがあま

り残っていない。129は頸部より上位が打ち欠きされている蓋で、底部穿孔も行われている。丁寧なナデが施される。141は口縁部上面の焼成前穿孔が2箇所見られる。ナデ調整。142も141と同様。上から下への穿孔。

壺 (130~140) 130は胴上位が張り出し、底部に向かって大きく窄まる。131は底部が若干上げ底気味で、外から内への胴部穿孔が一部確認できる。132は外面胴中位に二次焼成痕(10.5×8.5cm)がある。内面にはコゲの痕跡は見当たらない。133は鋤先状口縁が内傾する甕で、1/2程度残存。胴部最大径が胴中位にある。134は水平な鋤先状口縁を持ち、胴上位に最大径がくる甕。外面縦方向のハケメが明瞭に残る。135は2箇所口縁部打ち欠きが行われる。内外面使用痕跡なし。136は胴部最大径が上位にくる甕で、外面胴中～底部付近までススが濃く付着する。内面は胴上位、胴中位～底部にかけてコゲの痕跡があり、数回の煮炊きで使用されたのであろう。137は刻み目のある口縁部に打ち欠きを行う。外面は細かな縦方向のハケメが残る。138は胴下位の焼成後穿孔が行われる甕で、M字突帯は中位より下がった位置にある。外面丹塗り。139は胎土が精良な甕で、口縁上面～胴部にかけて丹塗り、ミガキを行う。三角突帯は胴部最大径からやや下がったところにある。祭祀土器。140は鋤先状口縁が大きく内傾する甕で、口縁下に三角突帯を1条巡らす。胴中位以下敲打による打ち欠きが行われている。

蓋 (143, 144) 143は2/3程度残存する蓋。内面唇部にはススが付着しており、セットとなる土器は口径が20cm程度の小形蓋か。144はつまみ高の低い蓋で、風化の為、調整不明瞭。

高環 (145, 146) 145はミガキのよく残るに塗りの高環で、鋤先状口縁は外傾する。坯部外面は4回に分割してヘラミガキを1周行っている。146は口縁が内外ともに発達する高環。脚部を欠損する。

F-10 (第34~37図)

壺 (147~152) 147~152まで素口縁の広口壺。147は頸部内面～外面胴下位まで丹塗りを施す。胎土は精良である。148は内面の丹塗りが明瞭に残るもので、頸部外面には暗文風縦ミガキが行われる。149は口縁～胴上位まで残存。内面のミガキが明瞭に残る。丹塗りは頸部内面～外面胴部まで確認できる。150は本来頸部内面～胴部外面にかけて丹塗りが施されていたものが、風化して帯状に残存しているもの。151は頸部が一旦上方へ延び、中位から外方へ開く甕で、そ

の外面には暗文風縦ミガキが施される。口縁部は2箇所打ち欠きが観察できる。152は胴部に比べ、頸部が大きく発達する甕。頸部には暗文風の縦ミガキが施される。弥生時代中期末。

甕 (153~162) 153は口縁部を打ち欠いている甕で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。胴上位にススが付着、内面胴中位付近にはコゲが付着する。154はG-9、F-8の破片と接合する甕で、胴下位に二次焼成痕がある。155は外面胴上位にススが付着、内面胴中位にコゲが確認できる。胴下位欠損。156は風化が著しく、調整不明瞭。水平な鋤先状口縁を持つ。157は底部を欠損し、3/4程度残存する甕。口縁は強いナデによって外傾させる。158はF-7の破片と接合する中型甕。外面胴部には粗い縦方向のハケメを施し、口縁部の打ち欠きを行う。外面胴上位にススが付着する。159は使用痕跡が認められた甕。胴下位に二次焼成痕、胴上位～底部にかけてコゲが付着する。160は風化の為、調整不明瞭。胴部に黒斑あり。161は1/3程度残存する樽形甕で、口縁部の打ち欠きが行われる。口縁上面から胴部外面まで丹塗り、ミガキを施すが、特に濃く丹塗りが施されている部分を網掛けしている。M字突帯間に縦線状の暗文を1cm間隔で表現し、底部に近い部分では施していない。また、口縁上面には焼成前穿孔が1箇所確認されるため、蓋付であったのであろう。162は丸みを帯びた甕で、底部を欠損する。口縁端部には刻み目が施される。

鉢 (163) 163は口縁部の打ち欠きが行われる鉢で、胴上位～胴下位にかけて丹塗りが残る。外面の器面調整は粗い縦方向のハケメ。

蓋 (164) 164は唇部に帯状のススが付着する蓋。外面縦方向の細かいハケメ。

高環 (165, 166) 165は外傾する鋤先状口縁を持つ高環で、内外面丹塗りが施される。166はやや外傾する鋤先状口縁で、坯部が扁平となる高環。

器台 (167~170) 167は細身の器台で、F-11、F-12の破片と接合する。168、169は裾が広がり、口径を上回るもの。外面縦方向のハケメ。170は底部のみ残存。作りがやや粗い。

F-11 (第37図)

蓋 (171, 172) 171は蓋のつまみ部のみ残存。172はつまみがかなり厚い。

鉢 (173) 水平な鋤先状口縁を持つ鉢で、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。底部に黒斑あり。

高環 (174) 口縁上面に14~16条1単位のミガキによる暗文を施す高環で、全面丹塗り。

F-12 (第37図)

臺 (175) 175は約5mm幅で暗文風縦ミガキを施す素口線の広口壺で、胴中位以下欠損する。

G-7 (第38図)

器台 (176、177) 176は4/5程度残存する器台で、全体として細身である。177は指ナデによって成形する器台で、胎土は粗い。

ミニチュア土器 (178) 178は鉢形で、外面は細かな縦方向のハケメ調整。3/5程度残存。

G-8 (第38~40図)

臺 (179~185) 179~182まで素口線の広口口縁壺で、胴部の肩が張り、頸部が外方へ延びる。頸部外面には暗文風縦ミガキが得らと観察される。180は口縁~頸部が残存。頸部外面に暗文風縦ミガキが施される。181,182は胴部が低くなり頸部が発達する壺。181は外面~頸部まで丹塗り、ミガキを施す。胴部内面は丹塗りの垂れた痕跡がある。頸部外面には横ミガキの後、暗文風縦ミガキが行われる。182は口縁~頸部上位を欠損する。胴部内面には丹塗りが斑点状に残る。183, 184は鋤先口縁壺。183は頸部から胴部にかけてなだらかに下がり、その境がはっきりとしない。頸部外面に暗文風縦ミガキを施す。外面~内面頸部上位まで丹塗り。184は口縁部の打ち欠きが行われる。打ち欠きは口縁の約半周に及び、上から下へ打撃が加えられている。185は頸部の敲打による切り離しが行われる大形壺で、胴下半の横ミガキが明瞭に残る。胴部最大径とその下位に2条の三角突帯が巡る。

臺 (186~188) 186は鋤先状口縁が大きく内傾し、口縁下に1条の三角突帯を巡らす。外面胴部に縦方向の粗いハケメが確認できる。187はくの字形の口縁を持つ壺で、胴上位以下を欠損する。188は胴部に焼成前丸窓のある壺で、脚台付か。くの字口縁で、内側の突出がわずかに残る。

鉢 (189) 189は底部片。外面丹塗り磨研である。

臺 (190~192) 190は裾部を欠損する。外面縦方向のハケメ調整。191は裾部内面に帯状のスガが付く。192はつまみを欠損し、裾部内面に帯状のスガが付着する。

高坏 (193~195) 193は脚部を欠損する高坏で、坏部内外丹塗り。鋤先状口縁は外傾し、口縁下に三角突帯を1条巡らす。194は全体的に風化が著しく、脚部にミガキをわずかに確認できる。195は鋤先状口縁がきれいに延びる高坏で、口縁上面に暗文風の縦ミガキを施す。内外共に丹塗り。

G-9 (第40、41図)

臺 (196~198、218) 196は口縁~胴中位にかけて残存する壺で、頸部が狭く、短く立ち上がり外方する。197は胴が張る大形の鋤先口縁壺で、胴部を1/4程度欠損する。頸部外面には8~9条を1単位とする暗文風縦ミガキが9ヶ所確認できる。外面胴上位に行われる横ミガキは胴下半ではヘラ状工具によってナデ消されている。口縁内外端部は打撃による打ち欠きが見られる。198は壺の胴下位~底部まで残存する。内外面に斑点状の丹が付着する。胴部に黒斑がある。218は胴中位~底部にかけて残存。外面及び内面斑点状に丹塗りが残る。

臺 (199~201) 199は上げ底状の底部片で、内面にコゲが付着する。200は大きく内傾する鋤先状口縁を持つ壺で、胴下半を欠損する。口縁下に三角突帯を1条巡らす。201はくの字口縁の壺。内外共にナデ調整。
蓋 (202、203、209) 202は裾部を欠損し、外面の縦方向のハケメが明瞭に残る。203は平坦な裾部を持つ壺で、つまみ部に向けて立ち上がりが急である。細かな縦方向のハケメを外面に施す。209は内面に薄くスガが付着する。外面のハケメは粗い。

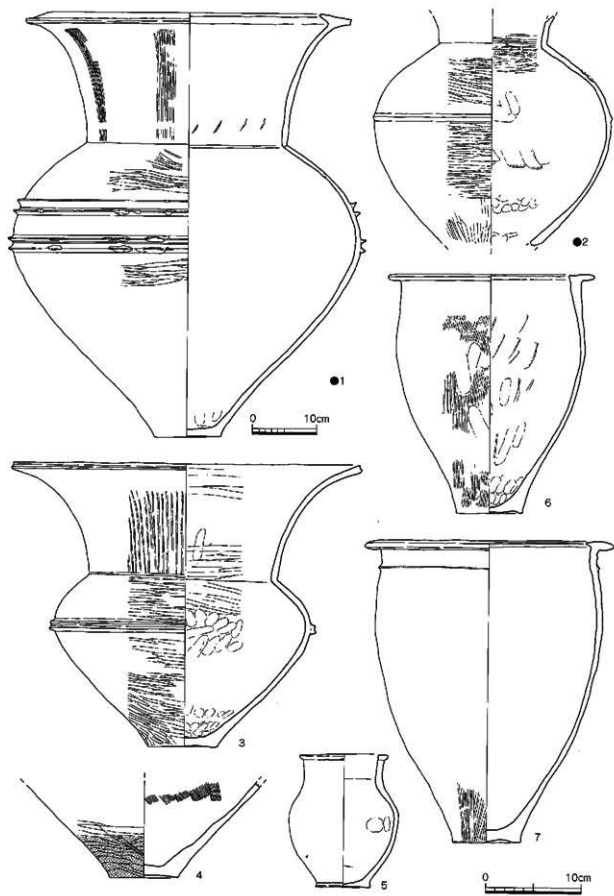
脚台付鉢 (204) 204は内外共に風化が著しく、器面が剥落している部分が多い。口縁部は敲打による打ち欠きを1周行う。口縁上面には焼成前穿孔が対になって見られる。内面には僅かに丹塗りが観察できることから、元は内外面丹塗りであったのであろう。

高坏 (205~208) 205は坏部のみ残存し、内外面に丹塗り磨研を行う。206は脚部の裾を打撃により打ち欠く高坏で、外面は縦ミガキ、内面はシボリ痕が観察できる。207も脚部のみ残存。外面の縦ミガキが明瞭に残る。208は脚部の裾を打ち欠く高坏で、外面は風化により調整不明瞭。

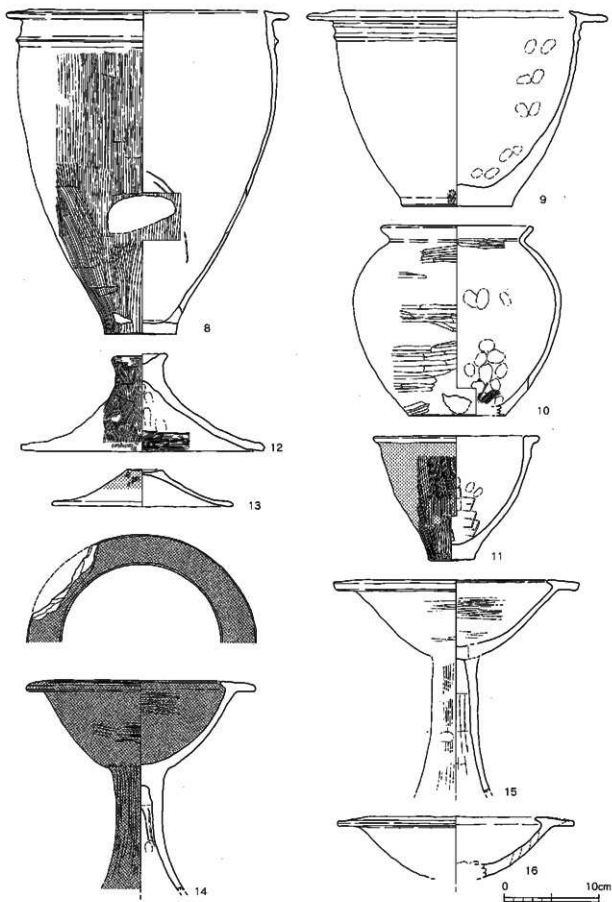
器台 (210~217) 210~215は外面縦方向のハケメ、内面シボリ、ナデ調整。210,211, 213は細身のもの。212,214,215は底部が広がり、幅広となるもの。216は指押さえて仕上げる粗製の器台。217は筒形器台で、脚部の一部が欠損する。器高51.9cm、底径で33.7cmを測る。鈎から脚中位で一戸窄まり、裾部で大きく開く脚部で、5ヶ所の透かしが入る。鈎部は増部に刻み目を施し、一部上から下へ打ち欠いている。裾を除いた外面~脚部上位内面まで丹塗りの痕跡が確認できる。

G-10 (第42図)

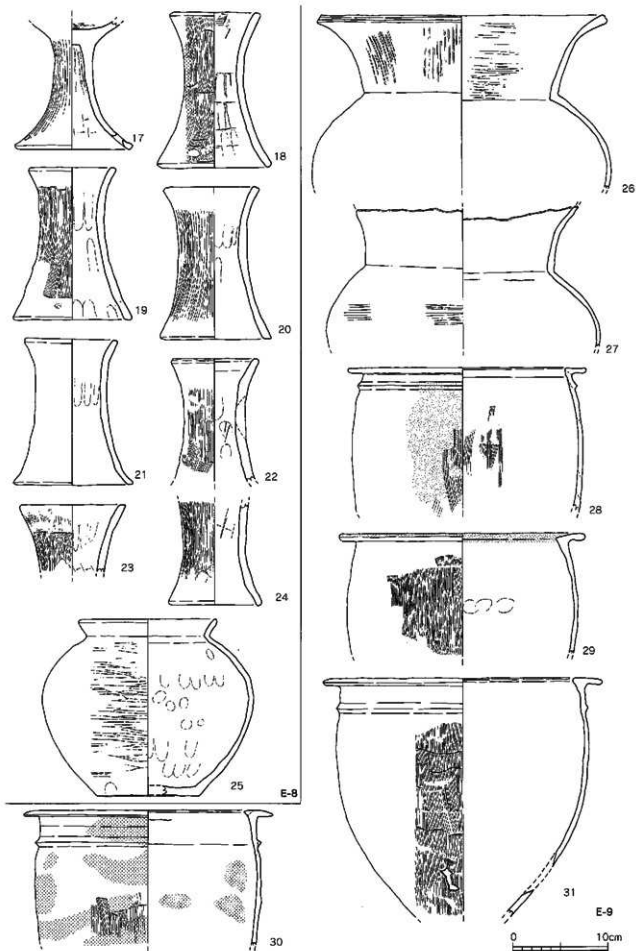
臺 (219~222) 219, 220は素口線の広口壺。219は内外面丹塗りで、頸部外面に暗文風の縦ミガキ



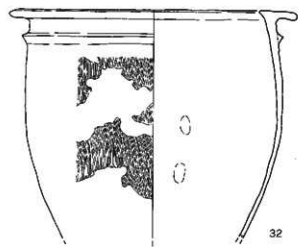
第18圖 E-8出土土器実測図① (1/4、●は1/6)



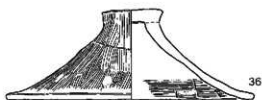
第19图 E-8出土土器実測图② (1/4)



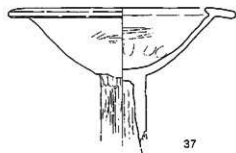
第20图 E-8、E-9出土土器実測图 (1/4)



32



36



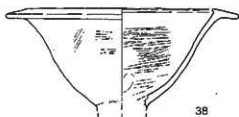
37



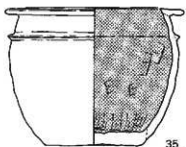
33



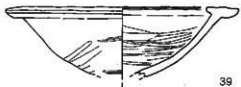
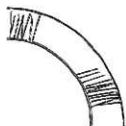
34



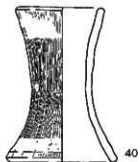
38



35



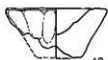
39



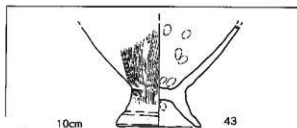
40



41



42

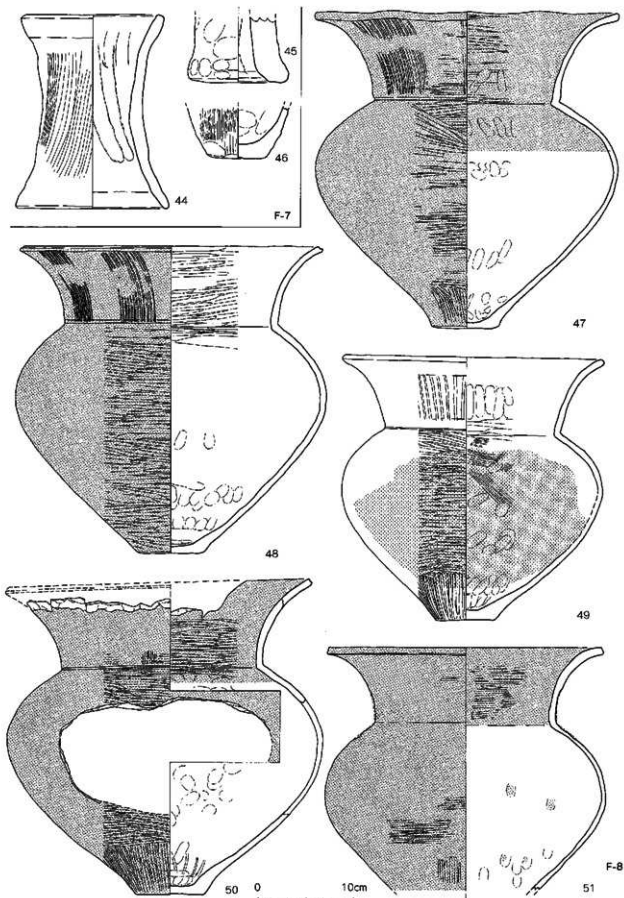


43

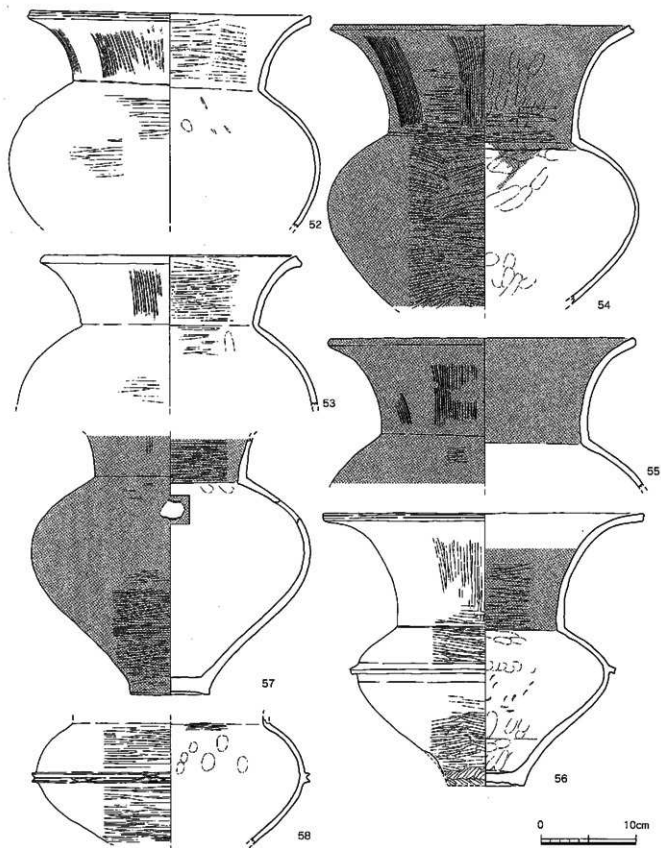
E-9

E-12

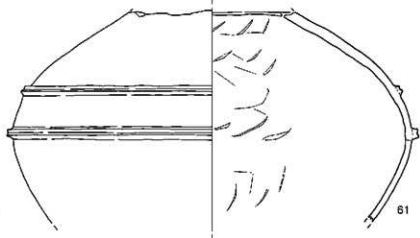
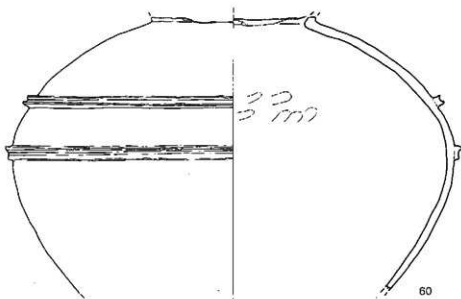
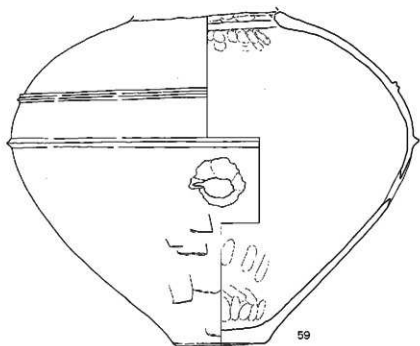
第21图 E-9、E-12出土土器実測图 (1/4)



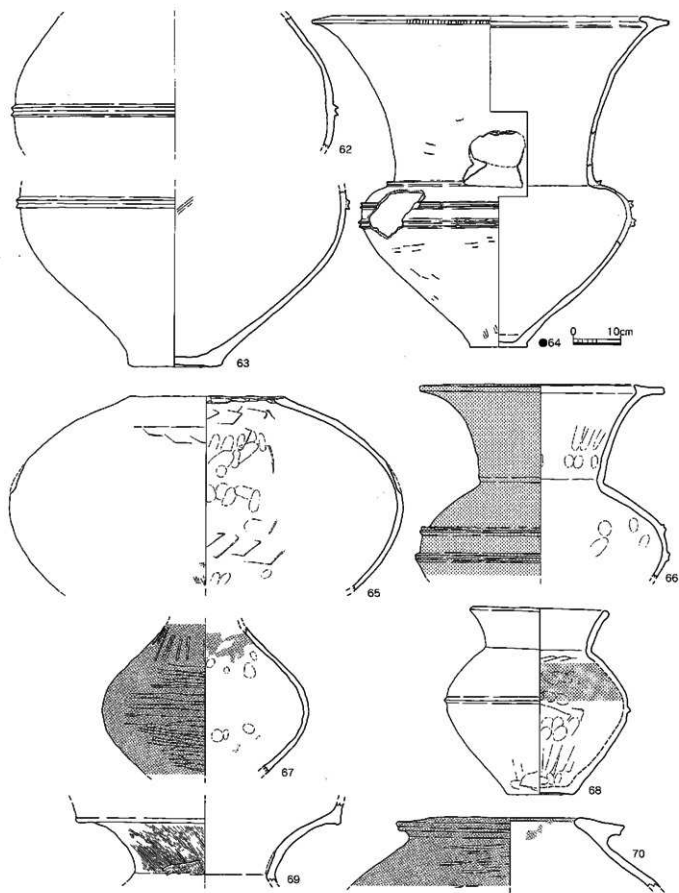
第22图 F-7、F-8出土土器実測图 (1/4)



第23图 F-8出土土器実測図① (1/4)

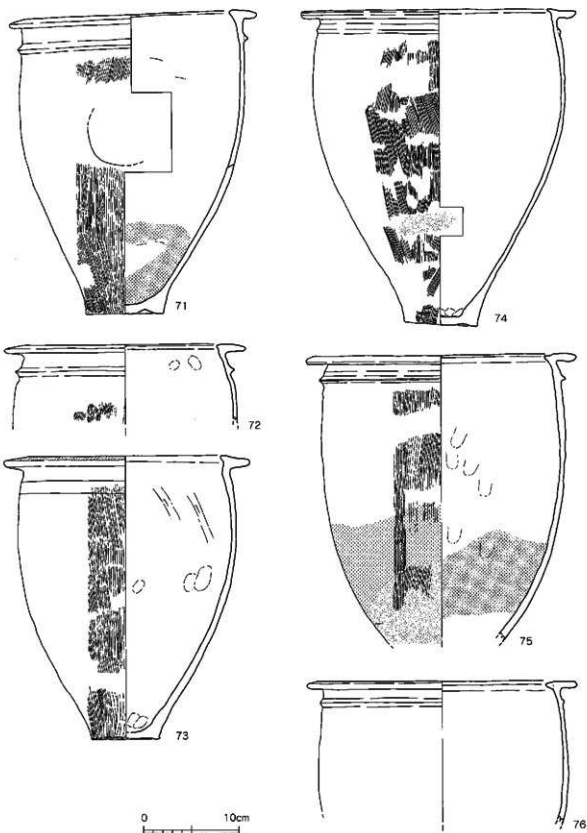


第24圖 F-8出土土器実測圖② (1/4)

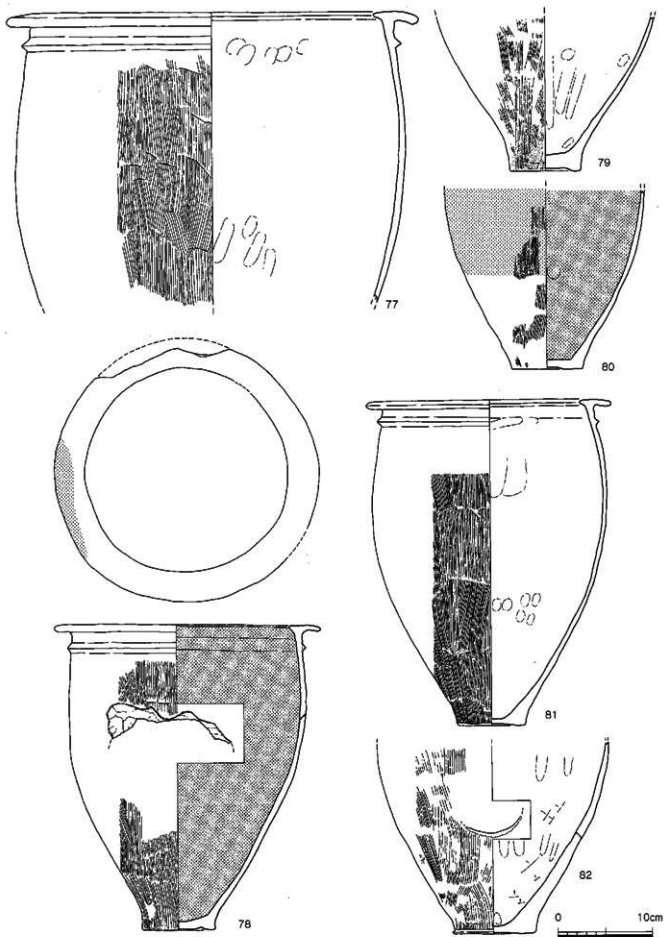


第25図 F-8出土土器実測図③ (1/4、●は1/8)

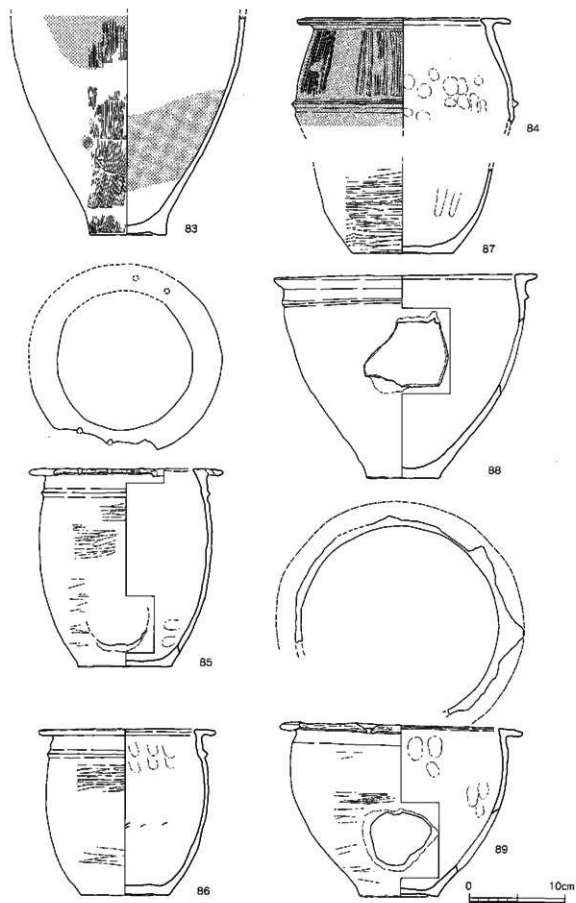
0 10cm



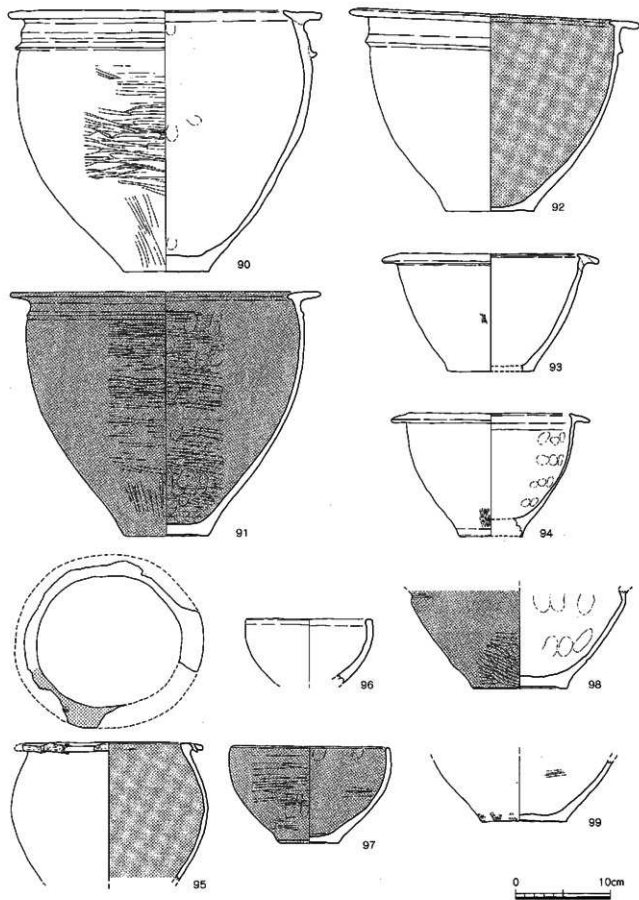
第26图 F-8出土土器実測图④ (1/4)



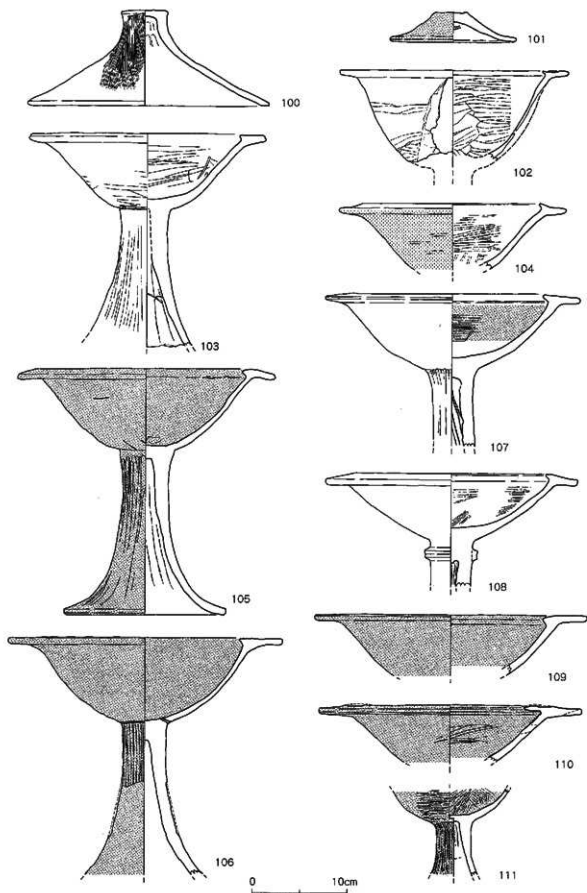
第27图 F-8出土土器実測图⑤ (1/4)



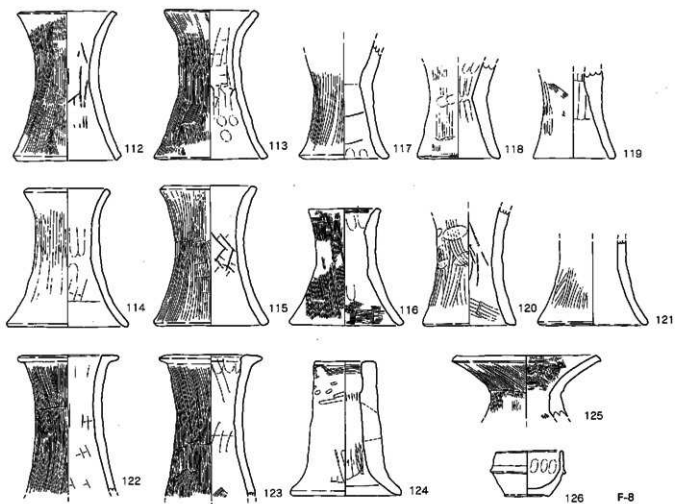
第28图 F-8出土土器実測図⑥ (1/4)



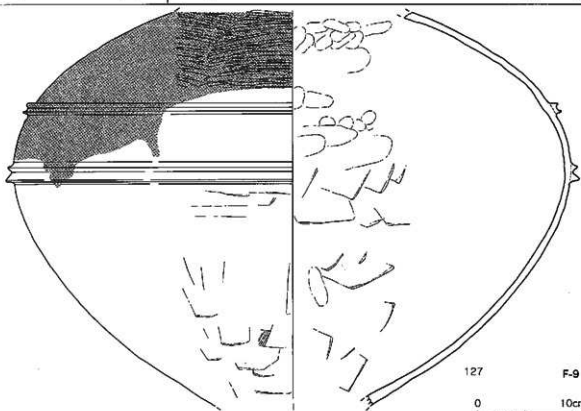
第29圖 F-8出土土器実測圖⑦(1/4)



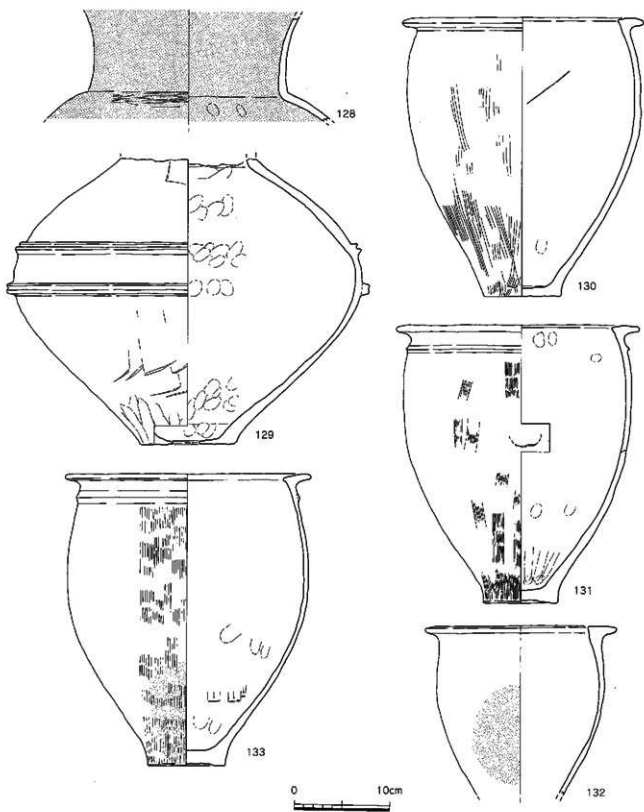
第30图 F-8出土土器実測图⑧ (1/4)



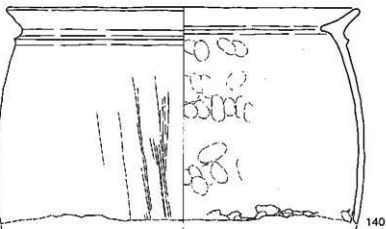
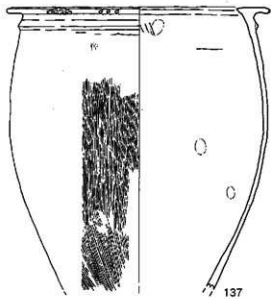
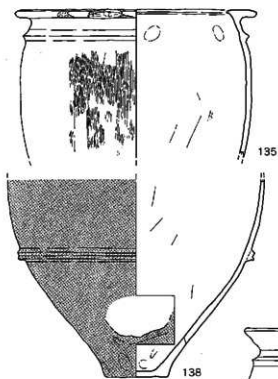
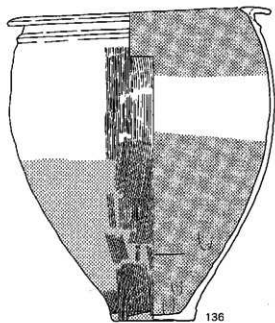
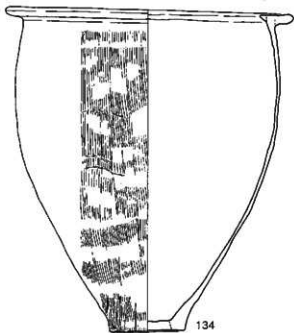
F-8



第31图 F-8、F-9出土土器实测图 (1/4)

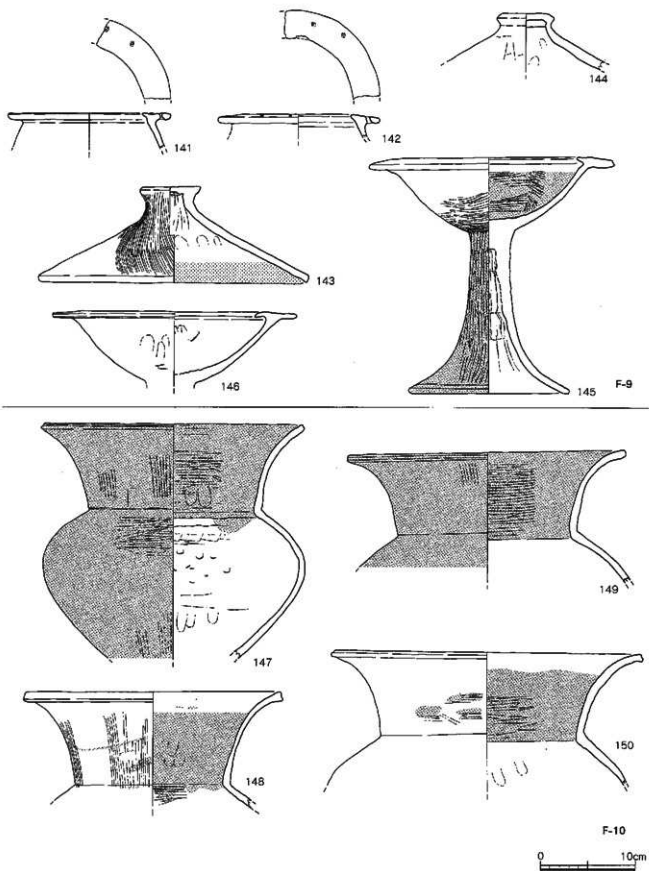


第32图 F-9出土土器実測图①(1/4)

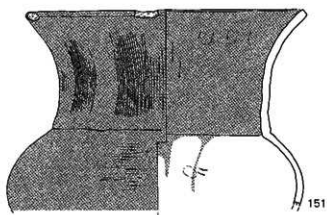


第33圖 F-9出土土器実測図② (1/4)

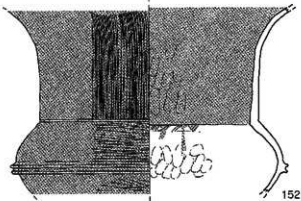




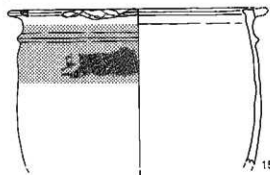
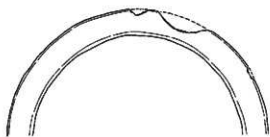
第34图 F-9、F-10出土土器实测图 (1/4)



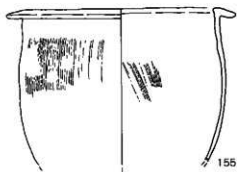
151



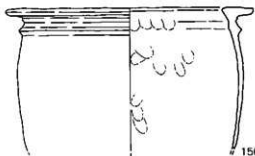
152



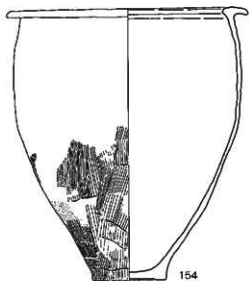
153



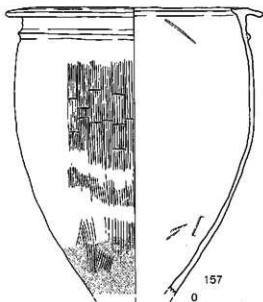
155



156



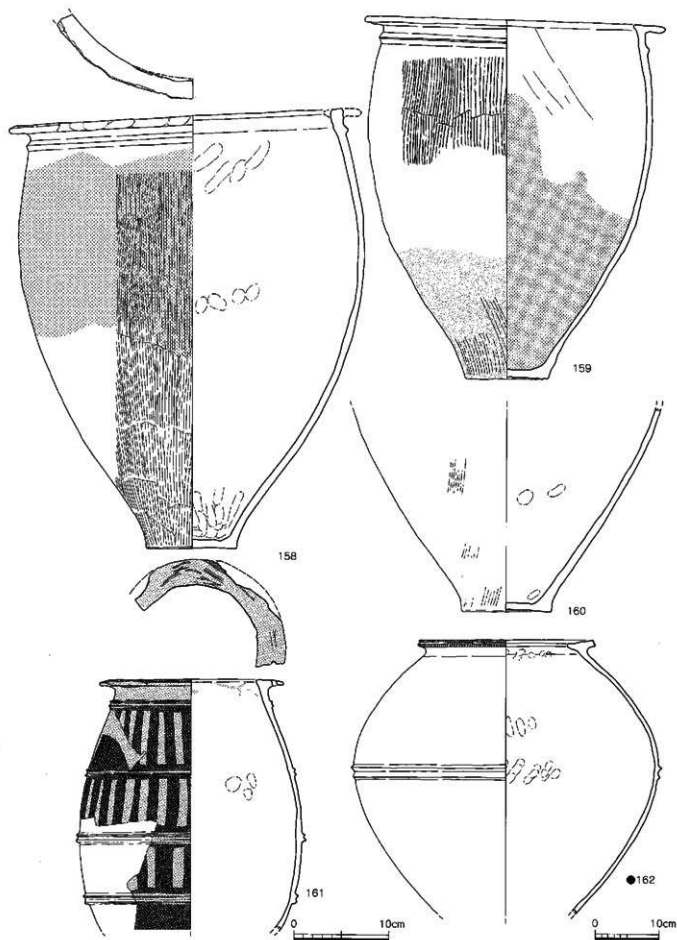
154



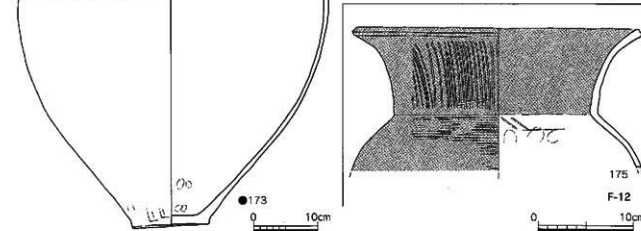
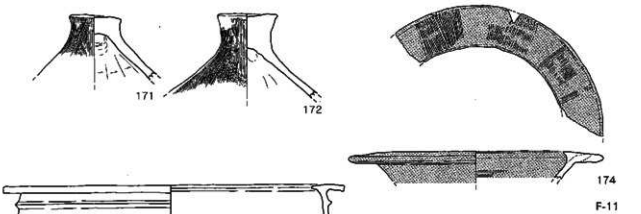
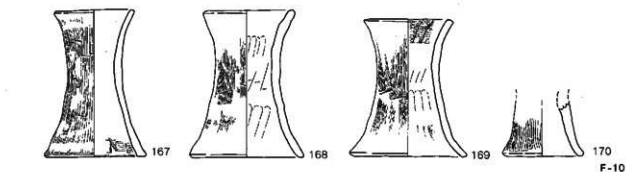
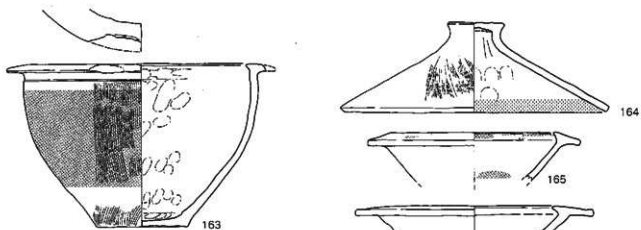
157



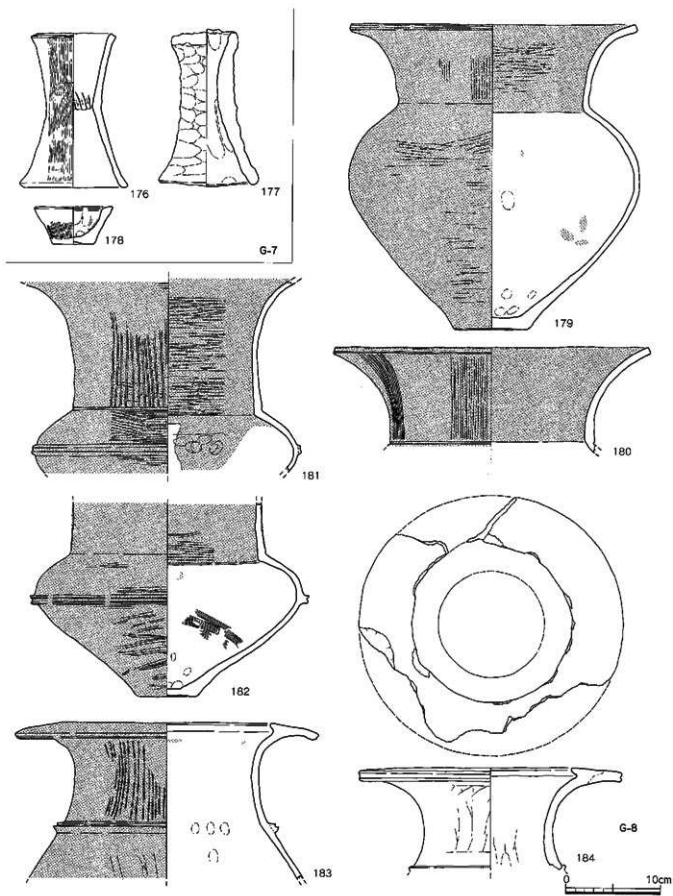
第35图 F-10出土土器实测图① (1/4)



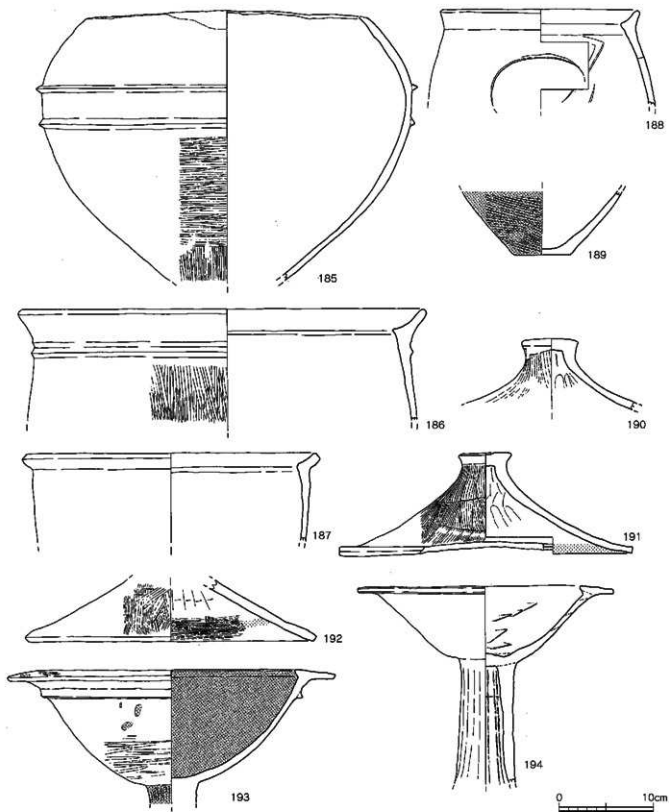
第36圖 F-10出土土器実測図② (1/4、●は1/6)



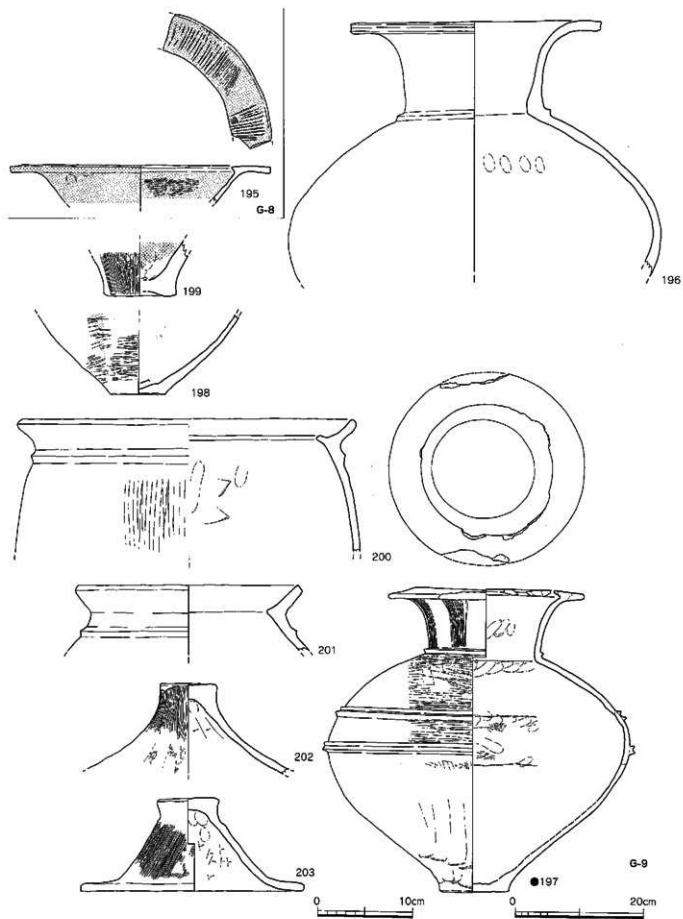
第37图 F-10、F-11、F-12出土土器実測図 (1/4。●は1/6)



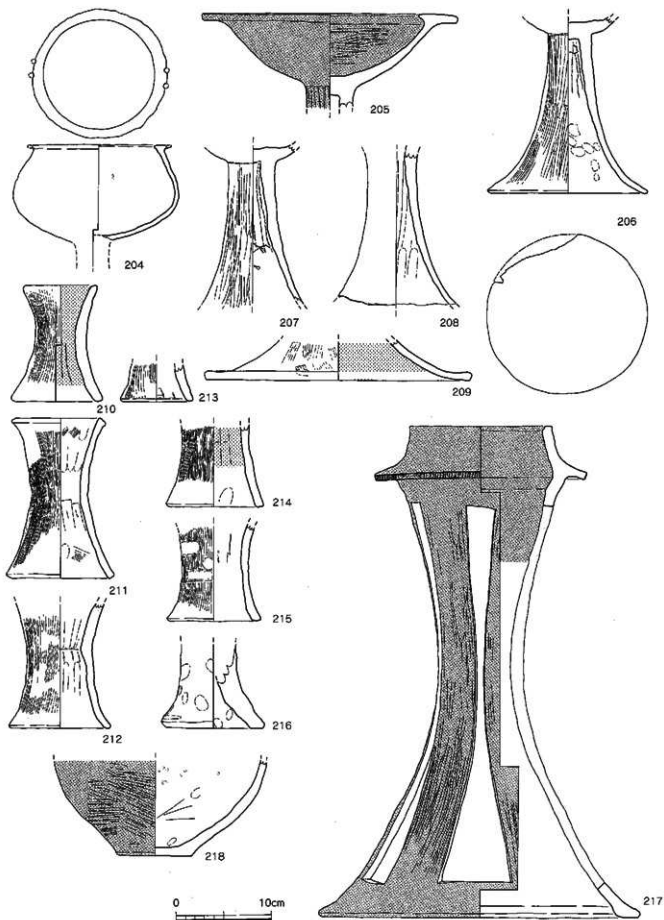
第38图 G-7、G-8出土土器实例图 (1/4)



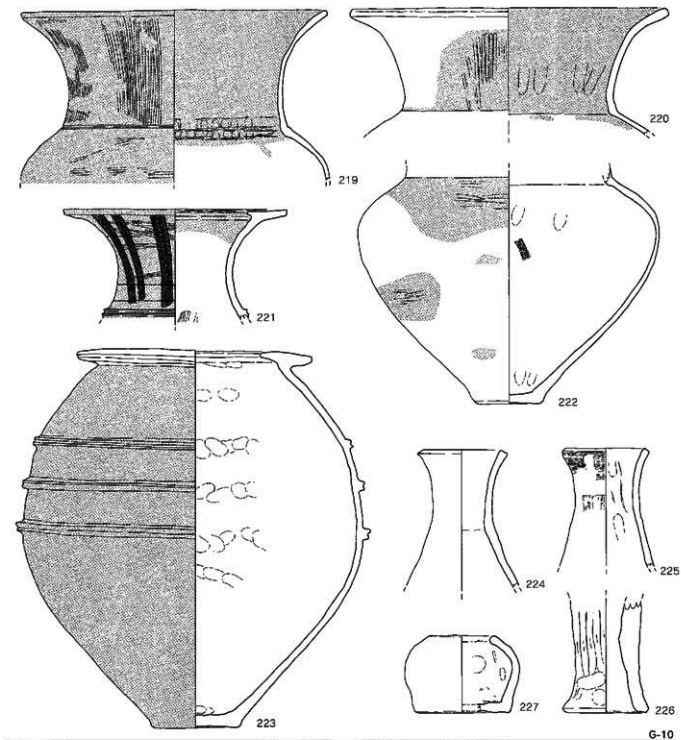
第39圖 G-8出土遺物実測図 (1/4)



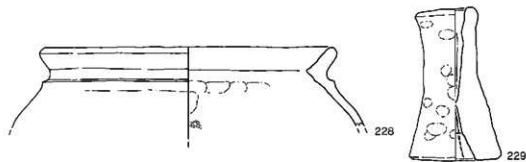
第40图 G-8、G-9出土土器実測図 (1/4、●は1/6)



第41图 G-9出土土器实物图 (1/4)



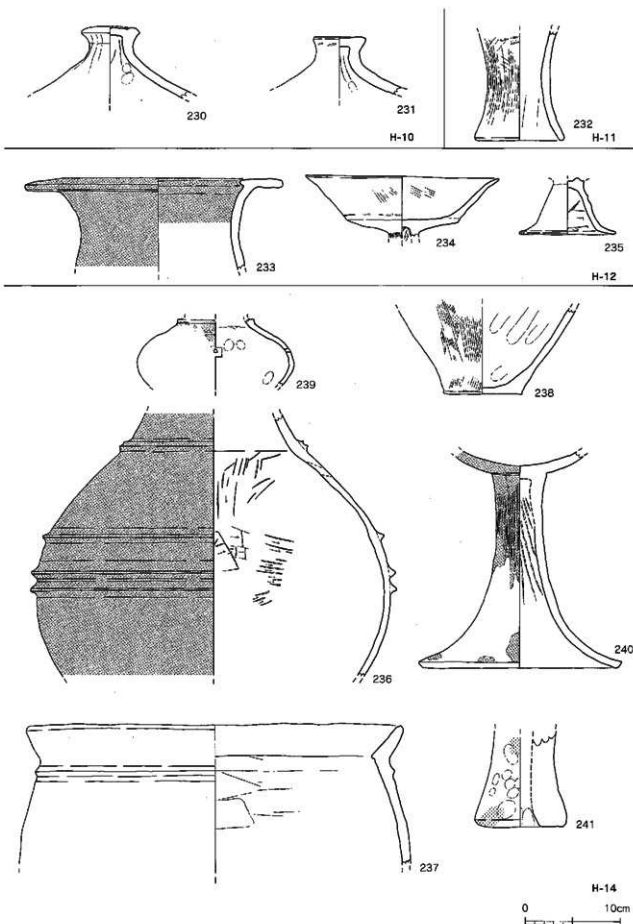
G-10



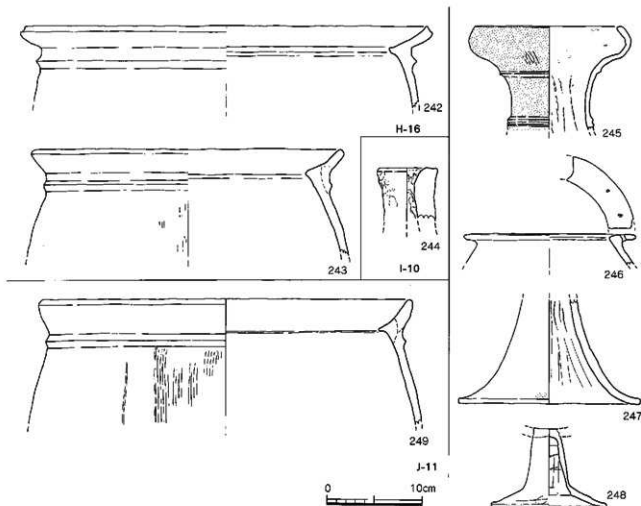
G-15

第42图 G-10、G-15出土土器実測图 (1/4)

0 10cm



第43图 H-10、H-11、H-12、H-14出土土器实测图 (1/4)



第44図 H-16、I-10、I-14、J-11出土土器実測図 (1/4)

が施される。内面の頸部と胴部との境に強い指押さえを行う。220は全体的に風化を受け、外面の一部及び内面には帯状に丹塗りが観察できる。221は鋤先口縁壺で、口縁～頸部まで残存する。頸部外面には6～7条1単位の暗文風縦ミガキが3箇所確認できる。丹塗りは外面及び内面上位までである。222は胴部最大径が上位にくる壺で、外面に丹塗りを施す。風化のため、外面の横ミガキが不明瞭である。

壺 (223) 223は丸味を帯びた中型壺で、胴部最大径は下位にある。その最大径から上位に3条のM字突帯が巡り、外面には丹塗りが部分的に残る。

器台 (224～226) 224は風化が著しく調整不明瞭。225は外面上位に横方向のハケメ、それ以下は縦方向のハケメを施した後、それをナデ滑している。226は指ナデで成形する器台。

ミニチュア土器 (227) 227は鉢形のでづくね土器で、平底を呈する。底面に黒灰がある。

G-15 (第42図)

壺 (228) 228はくの字口縁を持つ壺で、口縁が既厚する。口縁下に三角突帯を1条巡らす。

器台 (229) 229は器壁が厚く、粗雑な作りの器台で、完形である。

H-10 (第43図)

蓋 (230、231) 230、231は裾部を欠損するつまみを持つ蓋で、2/3程度残存する。

H-11 (第43図)

器台 (232) 232は上位を欠損する器台で、内面はヘラ状工具によるナデ調整で、外面は縦方向のハケメが明瞭に残る。

H-12 (第43図)

壺 (233) 233は頸部内面～外面にかけて丹塗りを施す鋤先口縁壺。口縁上面にミガキが僅かに残る。

高坏 (234、235) 234は坏部のみ、235は脚部のみ残存しており、接合しない。

H-14 (第43図)

壺 (236、239) 236は頸部～胴下位まで残存する

袋状口縁壺で、胴部最大径に2条の三角突帯、その上位に1条の三角突帯、頸部と胴部の境にも1条、計4条通らす。外面に丹塗りが斑点状に残る。239は胴部に2mm程の穿孔がある袋状口縁壺片で、外面に丹塗り磨研がわずかに残る。

壺 (237、238) 237はくの字口縁の甕で、口縁下に三角突帯を1条通らす。内外面ナデ調整。238は底部片で底径7.2cmを測る。

高坏 (240) 240は坏部～脚部まで残存し、内外面丹塗りを施す。裾部の器面の剥落が著しい。

器台 (241) 241は指押さえて成形する器台で、器壁が厚い。上位を欠損する。

H-16 (第44図)

壺 (242、243) 242、243はくの字口縁を持ち、口縁下に三角突帯を付す。口縁～胴上位まで残存。

I-10 (第44図)

器台 (244) 244は下位を欠損する器台で、指ナデ調整。

I-14 (第44図)

壺 (245、246) 245は口縁～頸部まで残存する袋状口縁壺で、内外面丹塗りを施す。器面調整は外面縦ミガキ、内面シボリ調整。246は口縁のみ残存する無頸壺で、口縁上面に焼成前穿孔が2つある。

高坏 (247、248) 247は脚部片で、外面丹塗りが裾部にわずかに残る。内面シボリ痕が残る。248も脚部片で、短脚である。4世紀後半。

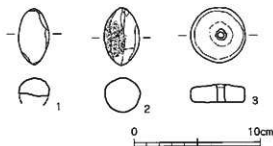
J-11 (第44図)

壺 (249) 249はくの字口縁を持つ甕で、口縁～胴部にかけて残存。外面胴部に粗いハケメが部分的に観察できる。

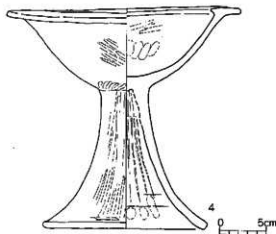
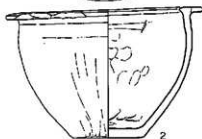
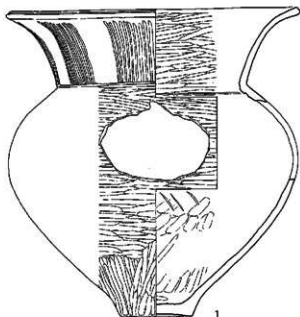
落ち込み北側出土遺物 (第45図)

落ち込み北側のH-5、I-5から出土した土器で、出土量が少なかったが、形になるものを図示している。

壺 (1) 1は素口縁の広口口縁壺で、完形である。胴部には細かな敲打による穿孔が行われており、長さ



第46図 大溝・落ち込み出土土製品実測図 (1/3)



第45図 落ち込み出土土器実測図 (1/4)

7.2cm、幅11.4cmの楕円形を呈している。頭部外面には10条1単位の間文風縦ミガキを10箇所（1周分）確認できる。器面調整は外面胴上～下位にかけて横ミガキ、底部付近を縦ミガキ、頭部内面は横ミガキを丁寧に施すが、丹塗りではない。

鉢（2） 2はほぼ完形で、11縁部の打ち欠きが行われる鉢。打ち欠きは上から下への打撃によって形成され、左右対称に2箇所認められる。内外面ともにナデ調整である。

蓋（3） 3は完形の蓋で、裾部に焼成前穿孔が行われている。器面調整は外面が横ナデの後、放射状の間文風縦ミガキを施す。

高坏（4） 4は、若干内傾する鋤先口縁を持つ高坏である。外面坏部は、横ミガキが端らと残り、脚部には縦ミガキが明確に残る。

大溝・落ち込み出土土製品（第46図）

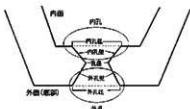
投彈（1、2） 1、2は手づねの後、ナデ調整を行い、両端部は尖る。1は完形で、長さ4.6cm、幅2.3cm、重さ32.6g。2は横半分を失っている。長さ4.4cm、幅2.4cm、重さ17.25g。

土製紡錘車（3） 3は落ち込み北側から出土した土製の紡錘車で、長さ4.4cm、幅4.3cm、厚さ1.5cm、孔径0.5cmを測る。完形で重さは30.24g。

底部穿孔土器（第47～65図）

今回、大溝・落ち込みからは多量の底部穿孔土器が出土した。詳細データは表にして掲載した。また観察で穿孔方法が数種分類される可能性が出てきたが、それについては考察に譲る。

表で挙げた項目は孔径、内(外)孔径、孔の形、内外孔の縁相、孔断面形、孔壁について、穿孔方向、穿孔方法である。この表で孔とは穿孔部分で物質が通過する部分のことである。内(外)孔は内(外)面の穿孔が始まる部分(剝離や吸打が開始する部分)のことである。



孔断面とは、文字通り孔の断面を表すもので、横口清之氏が用いたものを踏襲するが（樋口1929）、X(外孔径>孔径<内孔径)、V(外孔径>孔径≒内孔径)、逆V(外孔径≒孔径<内孔径)、平行(外孔径≒孔径

≒内孔径)を使用する。

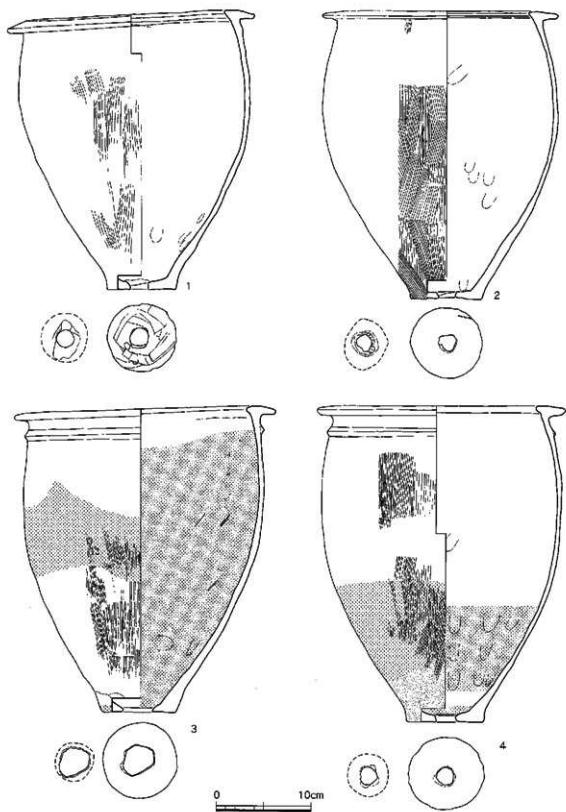
1～16は口縁～底部まで残存する。1は逆L字口縁で外傾している。全体的にやや傾く。縦方向のハケメで、口縁の内面に工具によるヨコナデ痕が残る。2も逆L字口縁で若干外傾している。外面胴中位～下位に黒斑が付着している。3は逆L字口縁で平坦、口縁内面の所々に接合痕が残る。三角突帯がめぐる。外面の胴中位には帯状にススが付着し、内面は胴上位～底部までコゲが付着している。調整は縦方向のハケメ、内面は工具と指によるナデである。4は逆L字口縁で、平坦をなし、内面にやや発達している。口縁下に稜が低い突帯があり、棒状工具痕が残る。外面胴下位にスス、底部付近は二次焼成で赤く焼けている。内面は胴下位と底部にコゲが付着している。5は反転復元である。逆L字口縁で内傾している。外面は縦方向のハケメ、内面はナデしているが、底部付近はヨコナデされている。外面胴下位～底部から2cm上あたりまでにススが、内面胴口縁部付近～底部にかけてコゲが付着する。6は逆L字口縁、口縁下に三角突帯を施す。胴上位に内から外への焼成後穿孔(7.7×7.6cm)があり、その孔の真上の口縁部に工具で削った痕(0.7cmほど)が二箇所ある。7は逆L字口縁で内面にやや発達している。外面は縦～斜め方向のハケメ、内面は口縁付近は板状工具によるヨコナデ、胴部は指ナデと板状工具痕が一部残る。胴上位～中位は二次焼成のため赤化し、破綻痕がみられる。8は逆L字口縁で内傾する。外面上位に丸くススが付着し、二次焼成により赤く焼けている箇所がある。外面は縦方向のハケメ、内面はナデ調整で底部付近は指頸頂痕が残る。9は鋤先口縁で内傾、口縁下になだらかな突帯を有する。若干上げ底である。胴上位に外面からの焼成後穿孔(1.4×2.3cm)がある。外面の胴上位～底部に黒斑が付着する。外面は縦方向のハケメ、内面の口縁部はヨコナデ後に爪でおきた痕がある。10は反転復元である。鋤先口縁で内傾する。胴が張り、胴部最大径と口径がほぼ同じ。若干上げ底。外面の胴上位～中位にススが部分的に付着する。11は鋤先口縁で若干外傾する。内面口縁下で接合箇所が確認できる。外面は縦～斜め方向のハケメ、内面は胴上位にへら状工具によるナデがされている。12は逆L字状の口縁を持つ。胴中位にも穿孔があるが、一部欠損している。外面胴中位に黒斑が付着している。若干上げ底。13は鋤先口縁で平坦。口縁下に三角突帯がめぐる外面胴中位に帯状にススが付着、胴下位は二次焼成により赤く焼けている。外面は縦方向のハケメ、内面は指ナデが残る。14は口縁が大きく傾く。

鑄先口縁で三角突帯がめぐり、一部接痕が見える。口縁外面には黒斑が底部外面にはススが付着している。底部を穿孔した際、孔の一部が欠損した可能性あり。15は鑄先口縁で口縁下に三角突帯が廻る。外面胴下位～底部が二次焼成で赤く焼けており、それに対応するように内面胴中位～底部にコゲが付着している。内面の指頭痕が明瞭に残る。穿孔の際に底部が抜けた可能性がある。16は鑄先口縁で全体的に歪んでいる。胴部に内面から外面の焼成後穿孔(9.7×8.7cm)が施されているが、一部欠損している。外面底部に黒斑が付着する。

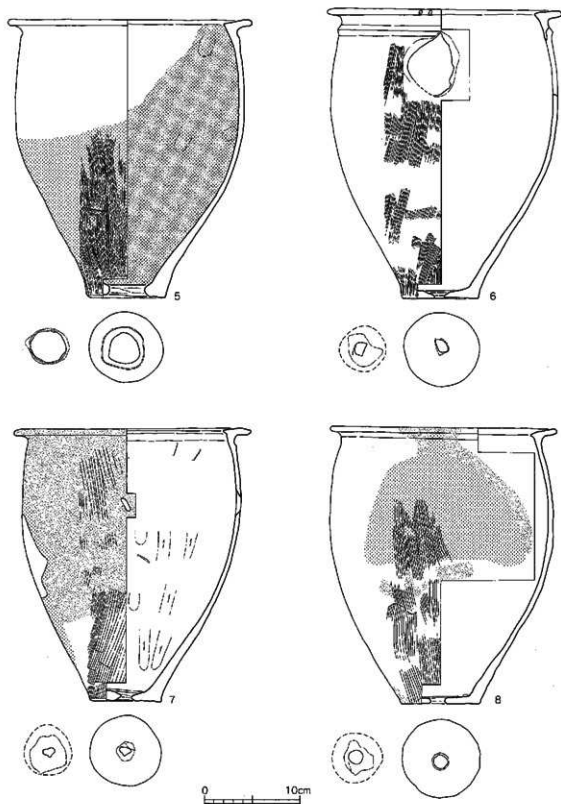
17～52は口縁以下の残存である。17は低い三角突帯が廻り、その接合状況が分かる。外面調整は縦～斜め方向のハケメ、内面はナデ。やや上げ底で外面底部には黒斑が付着している。18の外面調整のハケメは底部にまで及んでいる。胴中位の内外にコゲ・ススがパッチ状に付着する。19は胎土が細かい。外面の風化が著しく、調整不明である。底部には土器成形時に敷いた葉の茎の痕が残り、黒斑が付着。20は二次焼成によって外面は著しく剥離している。21の底部は強く撫でられ、やや上げ底。外面胴下位～底部にかけて黒斑が、内面の胴中位～下位にかけてコゲが付着している。22はやや上げ底で、外面はハケメ、内面はナデられている。外面胴中位にうすすらとススが付着し、内面底部にコゲが付着。23は外面ハケメ、内面ナデ。内面胴中位～底部にコゲが部分的に付着する。24はやや上げ底で外面はハケメ、内面ナデ。内面胴下位～底部にコゲが付着している。25はやや上げ底。外面底部にススが付着し、その上の化粧土が帯状に剥けている。底部には黒斑が付着する。26はやや上げ底。外面はハケメ、内面はナデている。外面胴中位～下位にスス、内面胴下位～底部の全面にコゲが付着している。27もやや上げ底。外面底部には黒斑が付着している。外面はハケメ、内面はナデられている。28の外面はハケメ、内面は板状工具によってナデられている。29は上げ底で分厚い。外面胴下位～底部にススが付着している。30は特に細かいハケメが施されている。胴下位～底部より1cm上までススが付着。一部反転復元である。31は若干上げ底である。内面は板状工具によって縦方向にナデられ、底部付近にはヨコナデされている。外面中位付近に黒斑が付着する。32は外面は細かいハケメ、内面胴中位にヘラナデが施される。外面胴下位にススが、内面底部にはコゲが付着している。33の底部外面の接合部分が深くへこむ。内面はナデ、底部付近はヨコナデを行なう。外面胴下

位はスス、内面胴下位と底部にはコゲが付着している。34の内面は工具によるナデ。外面胴中位にススが付着する。35は特に細かいハケメが施されている。内面胴下位～底部にかけてコゲが付着している。36は二次焼成による剥離が著しく、外面の調整は不明である。また、内面胴下位にパッチ状の、底部の全面にコゲが付着している。37は底部の接合部分がへこんでいる。ハケメ。内面はナデ。内面胴下位～底部にコゲが付着。38はやや挙げ底である。内外面ともに胴下位の底部に近いところはヨコナデが施される。一部反転復元である。39は外面に特に細かいハケメが施される。内面は胴下位はヨコナデ。外面胴下位～底部より1cmほど上部分までススが付着する。40は一部反転復元である。外面胴下位にはコゲが付着し、内面底部に全面コゲが付着する。41は外面は縦方向にナデられ、内面はヨコナデされた後にさらに縦方向にナデられている。外面胴下位には黒斑が付着している。42は上げ底で縦方向のハケメ、内面はナデられている。43は一部反転復元である。底部中央より外れた位置に穿孔がされている。44は上げ底。外面は縦方向のハケメ、内面はナデられている。接合部分がややくぼむ。外面胴下位にススが付着し、それに対応するように内面の胴下位～底部にかけて全面にコゲが付着している。45は上げ底。外面には特に細かいハケメがなされている。外面胴下位にスス、内面底部の全面にコゲが付着している。46の外面は摩滅が著しく、調整不明である。内面の底部全面にコゲが付着している。47はやや上げ底である。外面に縦方向のハケメ、内面はナデられている。外面胴下位にスス、内面胴下位にはうすすらとコゲが付着している。48はやや上げ底。外面の底部より1cmほど上にスス、内面底部にコゲが付着。50は底部外面に黒斑が、内面胴中位と下位にパッチ状にコゲが付着する。51.52は底部穿孔を中断したものである。ともに底部中央よりややずれた箇所に穿孔されている。52の底部はの外面胴下位～底部にススが付着している。

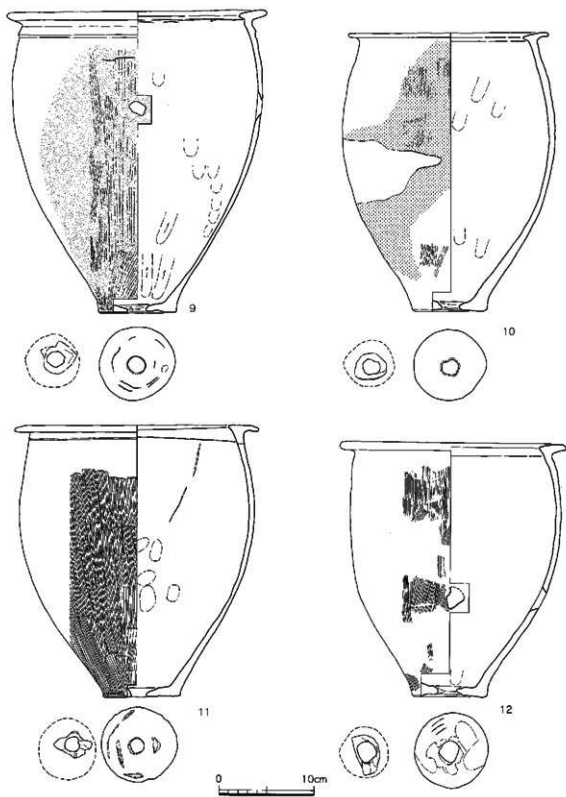
なお底部にコゲやスス、黒斑が付着しているものは全て穿孔に切られている。つまり黒斑が付着した後、か二次焼成によりコゲやススが付着した後に底部穿孔が行なわれていることがわかった。



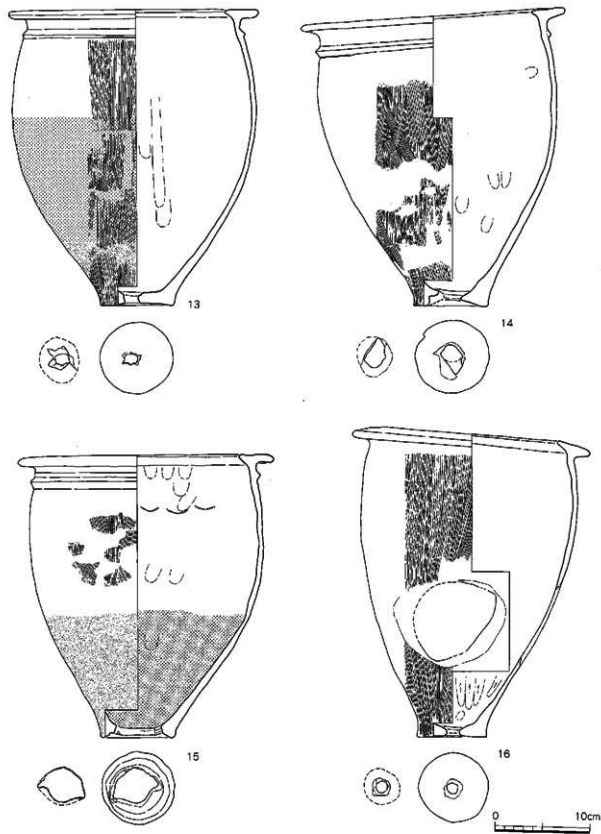
第47図 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図① (1/4)



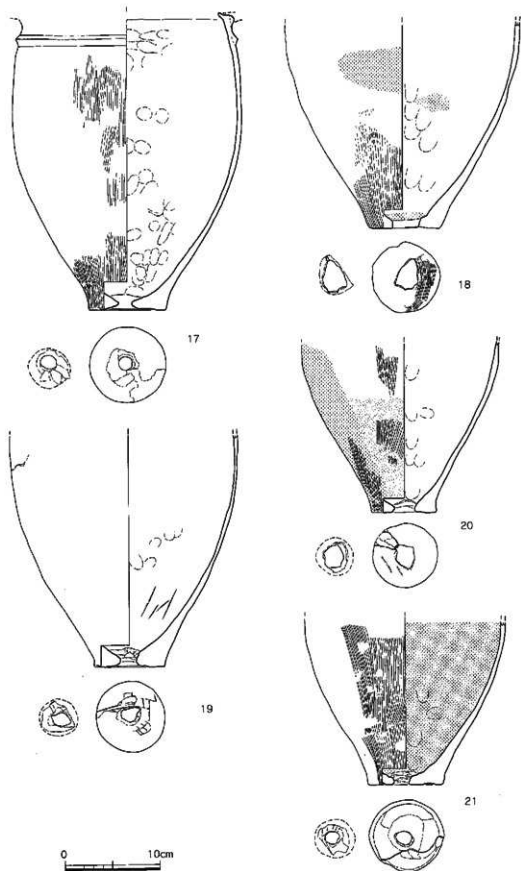
第48図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図② (1/4)



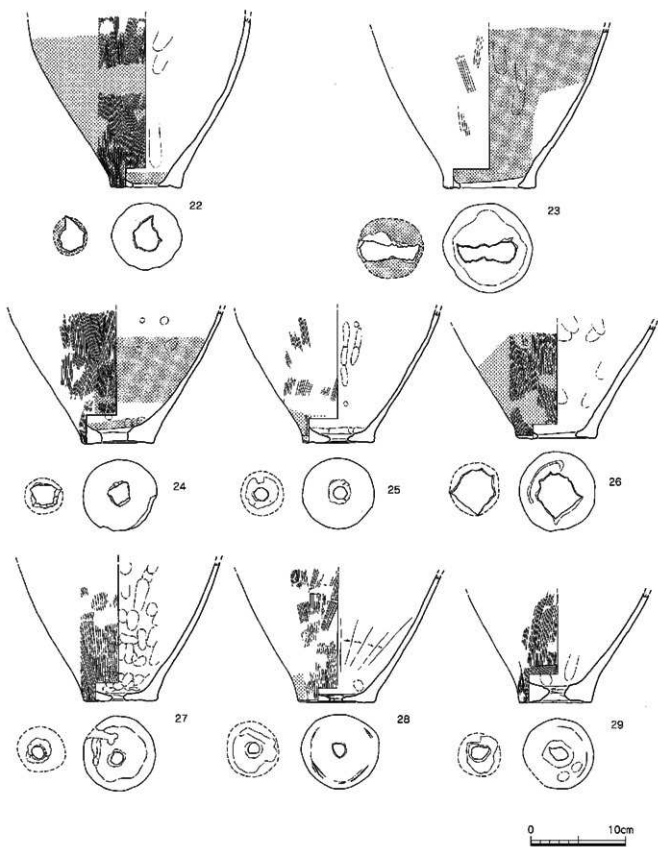
第49图 大冢・落石込み出土底部穿孔土器实测图③ (1/4)



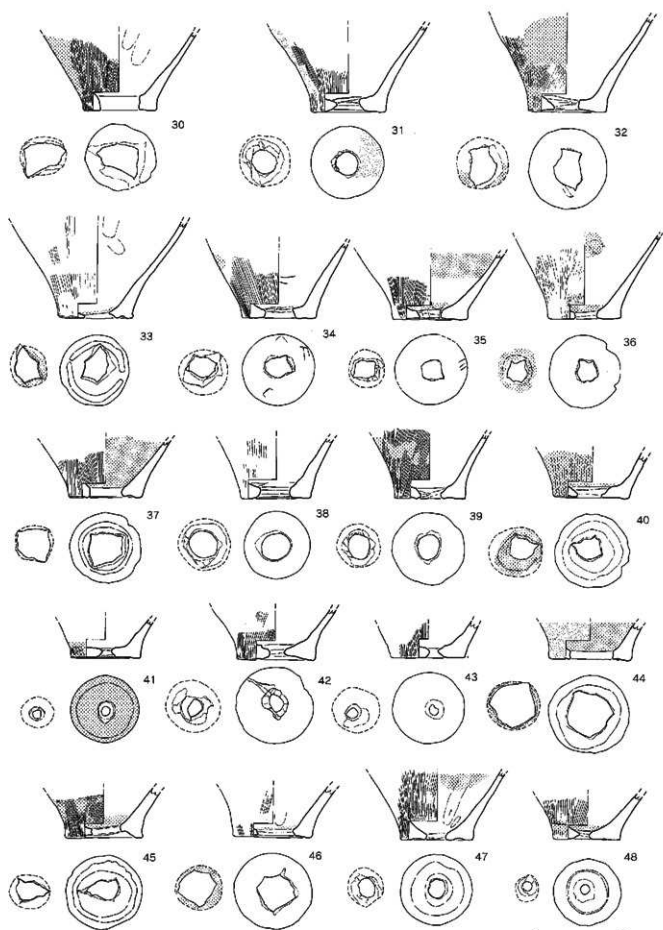
第50図 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図④ (1/4)



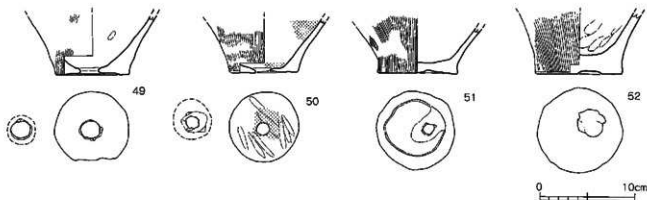
第51図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑤ (1/4)



第52図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑥ (1/4)



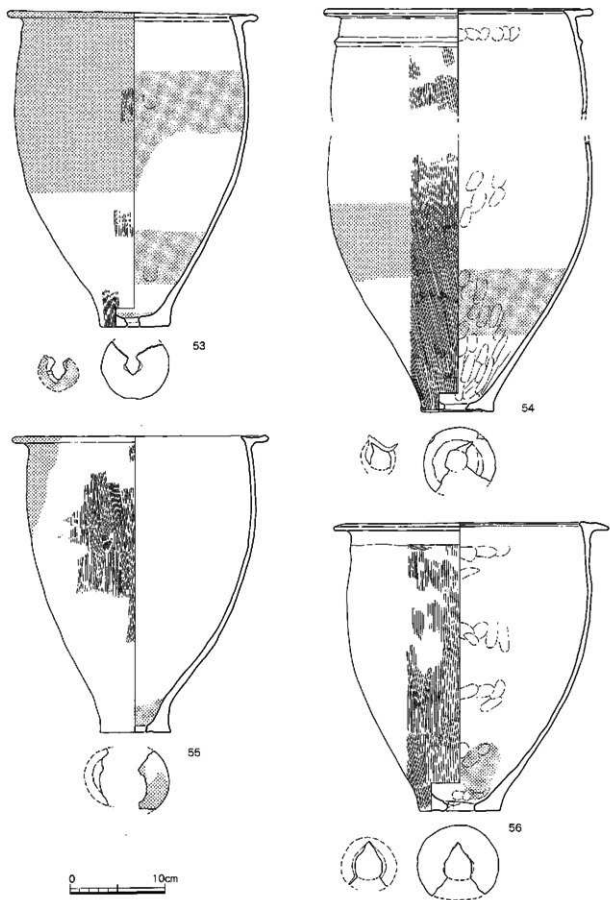
第53图 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑦ (1/4)



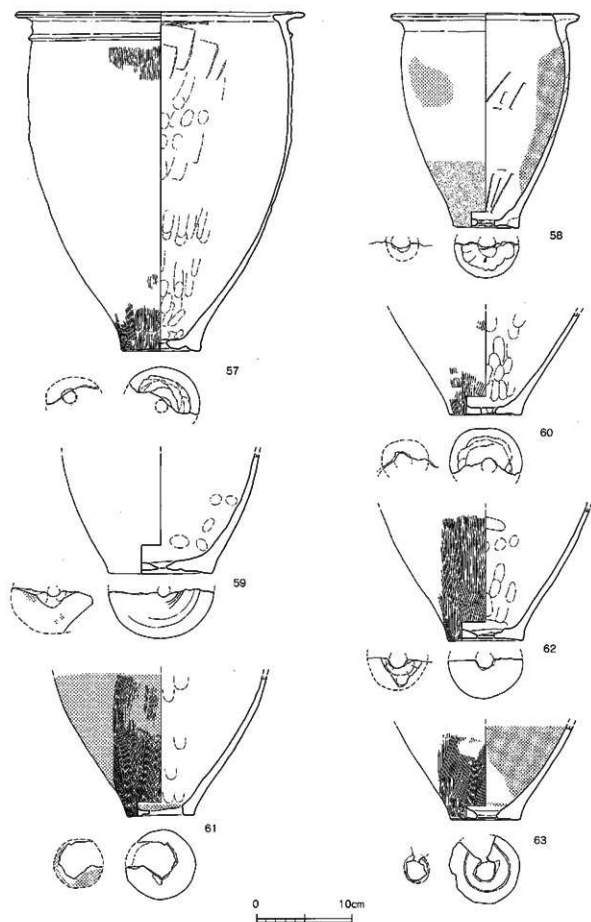
第54図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図③ (1/4)

53-191は底部が破損している。53は逆L字口縁で、平坦である。外面は縦方向のハケメが一部残り、内面はナデである。外面胴下位は二次焼成で赤く焼けており、内面は胴上位と胴中位に帯状、底部全面にコゲが付着している。54は同一個体である。口縁から突帯にかけて風化が著しい。口縁は逆L字で、平坦になっている。調整は外面縦～斜め方向のハケメがされている。外面胴中位にスス、内面は胴中位～下位に薄く、下位～底部に濃くコゲが付着している。55は口縁は逆L字で平坦だが、中央が窪む。底部の立ち上がりが高く、くびれている。外面はハケメ、内面は風化で不明瞭だがヘラナデの可能性もある。外面の口縁～上位にスス、内面胴下位～底部にコゲが付着している。56は口縁が逆L字でやや外傾する。口縁下1cmに明確なヨコナデ痕が残る。外面はハケメ、内面は指押しえ。内面の胴下位の底部に近いところにパッチ状のコゲが残る。57は口縁は逆L字で内傾する。口縁下部に三角突帯を一条巡らす。内面胴上位にはヘラナデ痕が残る。58は器高22.7cmと他の壺に比べると法量小さい。内面には板状工具によるナデが施されている。外面胴下位は二次焼成により赤く焼けている。59は鉢の可能性もある。底部のくびれがなく、内湾しながら立ち上がる。底部内面に赤色顔料が付着する。60はやや上げ底。外側胴中位は器面が剥離している。61は細かいハケメを施している。外面胴中位は濃く、胴下位に薄くスス、内面の底部全面にコゲが付着する。62はやや上げ底。底部外側に黒斑が付着する。64の外面はハケメ調整だが、胴下位は二次焼成により調整が不明瞭で、ススが付着している。65の胴中位に三角突帯が巡る。調整は内外面ともにミガキである。66は内面に縦方向に帯状にコゲが残る。67は内面にコゲが帯状に縦に付着している。68の外面はハケメで内面は板状工具痕が残る。69の底部内面には指頭圧痕

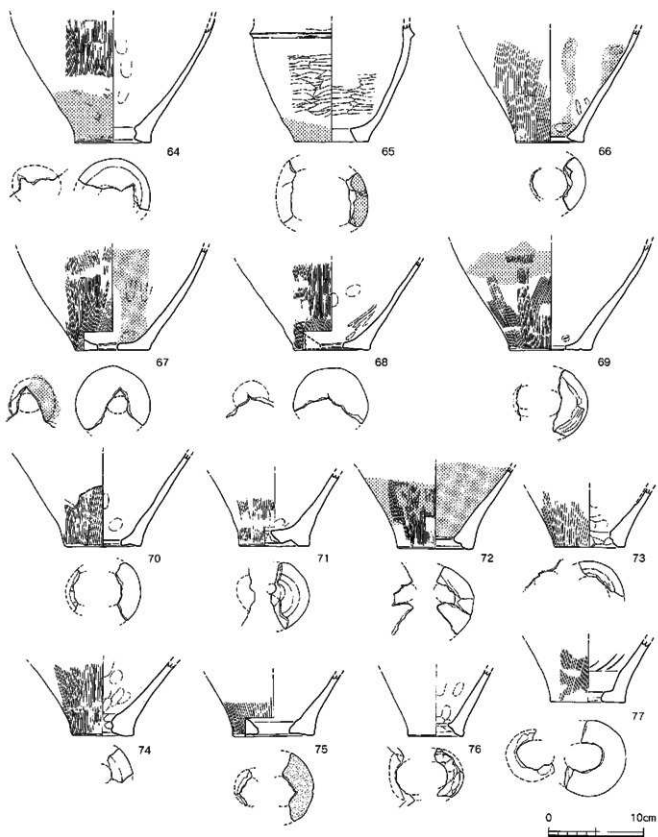
が残る。外面胴中位に帯状にススが付着する。70はやや上げ底である。外面胴中位が剥離している。71は上げ底。底部中央よりややずれた位置に穿孔している。72は被熱痕が著しく、底部も剥離している。外面胴下位には帯状にスス、内面胴中位～下位にはコゲが付着している。73は穿孔の際に底部が抜けた可能性がある。74は底部が分厚く、やや上げ底。調整は縦方向のハケメ、内面はナデられている。75は外面胴下位と底部に二次焼成痕が付着する。76に外面は調整不明だが、内面はナデ。77は内面の底部と胴部の境が強くでられる。外面ハケメ、内面は板状工具によるナデとヨコナデである。78は外面ハケメ、内面板状工具によるナデである。外面胴下位の一部にスス、内面胴下位の一部にもコゲが付着する。79は反転復元である。外面は縦方向の刷毛目、内面はナデである。80はやや上底。外面胴下位～底部にかけて二次焼成により赤く焼けている。内面胴下位にコゲが付着する。81も上げ底である。82は胴中位にススが付着する。外面は縦方向のハケメ、内側に指押し痕が残る。83の外面は縦～斜め方向のハケメ、内面はナデ後にヨコナデがされている。内面底部にコゲが付着する。84は外面胴下位にススが付着する。85は外面胴下位にスス、内面胴下位にコゲが付着する。86は胴下位～底部に黒斑が付着する。87は内面剥離が著しい。88は底部に黒斑が付着する。89はやや上げ底である。90は縦方向のハケメを施す。やや上げ底。内面胴下位にコゲが付着する。91は内面胴下位～底部にコゲが付着する。92、93は胎土が細かく、縦方向のハケメを丁寧に施す。94は内面が磨耗のために調整が不明瞭である。95は外面調整は不明だが、内面はナデ。96の外面胴下位～底部の被熱による剥離が著しい。98は底部中央からずれた位置に穿孔されている。99は内面底部にコゲが付着する。100は胴下位に外側か



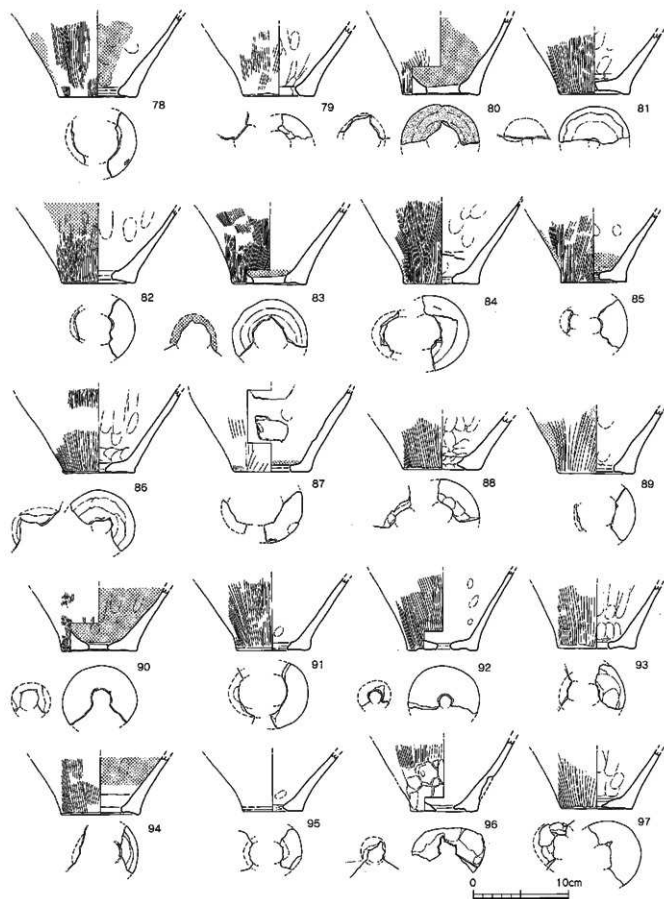
第55図 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図② (1/4)



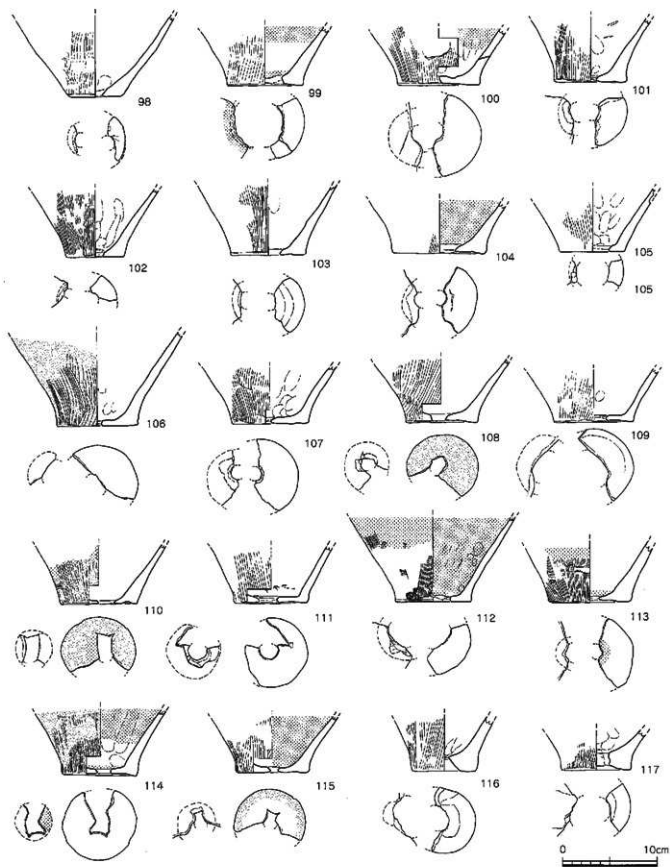
第56图 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑩ (1/4)



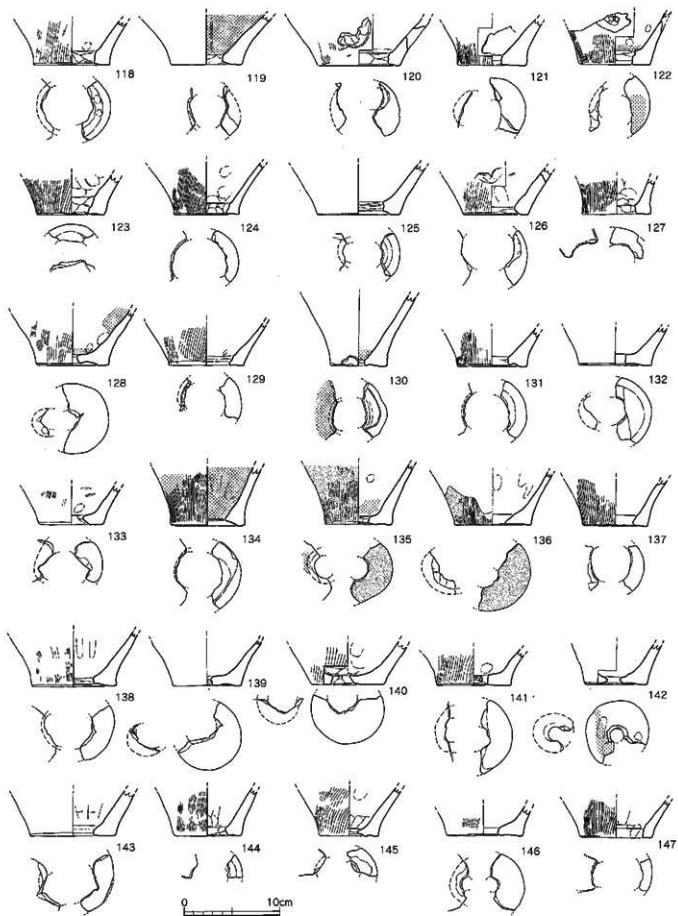
第57图 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図①(1/4)



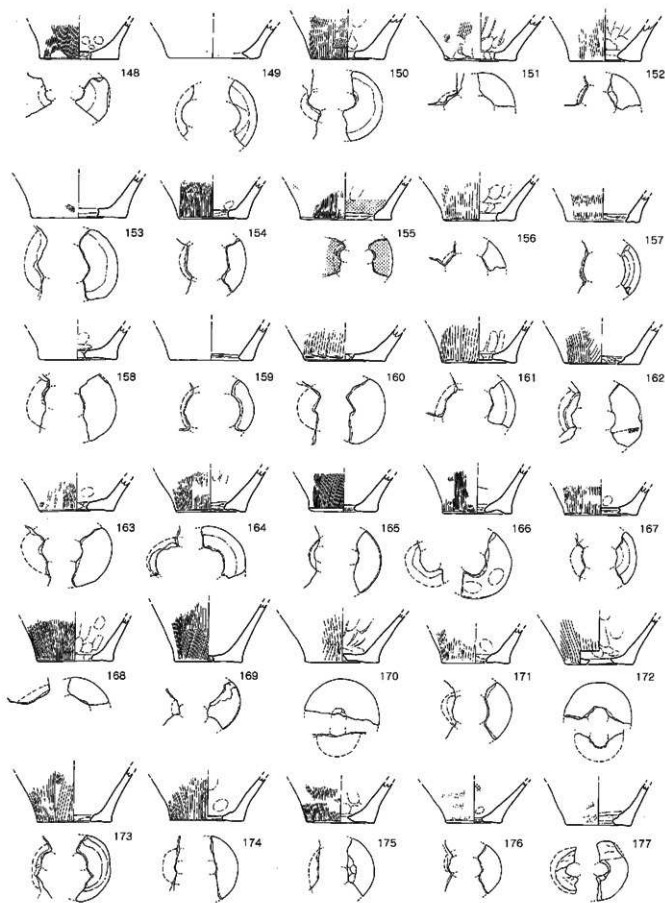
第58図 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図② (1/4)



第59图 大満・落ち込み出土底部穿孔土器実測図③ (1/4)

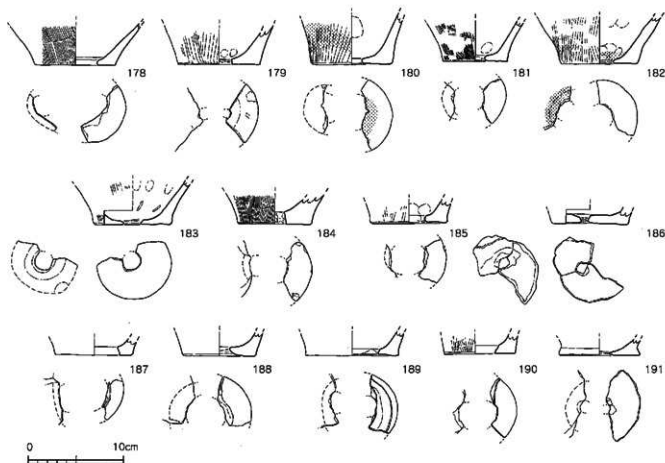


第60图 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑬ (1/4)



第61图 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑨ (1/4)

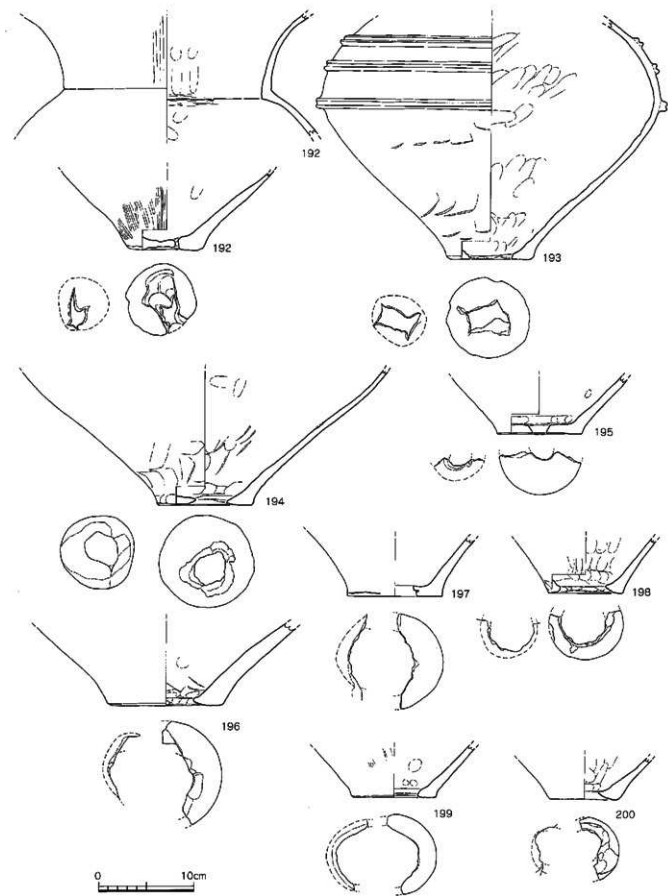
0 10cm



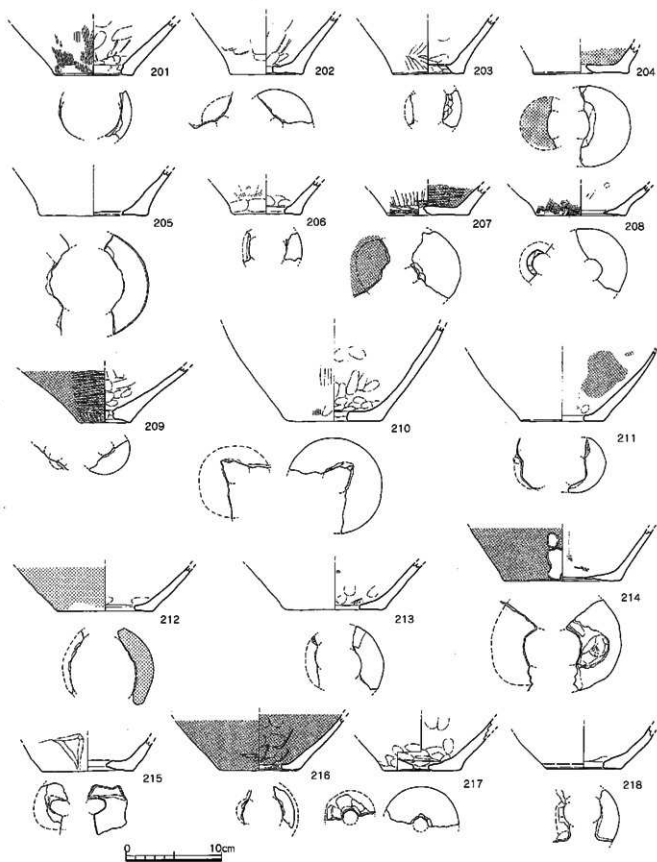
第62図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑩ (1/4)

らの穿孔がある。101は外面ハケメ、内面は板状工具によるナデである。102の外面は縦方向のハケメ、内面は指ナデされる。104はやや上げ底。内面胴下位にコゲが付着する。105は穿孔で底部が抜けた可能性がある。106は外面胴下位にススが付着する。107は底部の粘土の縦ぎ口部分がややへこむ。108は外面胴下位にススが付着する。109は外面ハケメで、内面を板状工具によるナデ後、ヨコナデしている。110は外面胴下位にススが付着する。111は外面胴下位～底部に黒斑が付着。112、113の内面は板状工具によるナデ、ヨコナデがされている。114は外面胴下位にスス、内面胴下位にも帯状にコゲが付着する。115の外面胴下位～底部が二次焼成で赤く焼けている。内面胴下位にコゲが付着する。119は外面調整不明だが、内面は板状工具によりナデられている。120は内側からの胴下位穿孔がある。121は内側の剥離が著しい。122は胴下位に内側からの穿孔がある。123、124、127は穿孔により底部が外れた可能性がある。126は内側からの胴下位穿孔がある。128は上げ底である。内面胴下

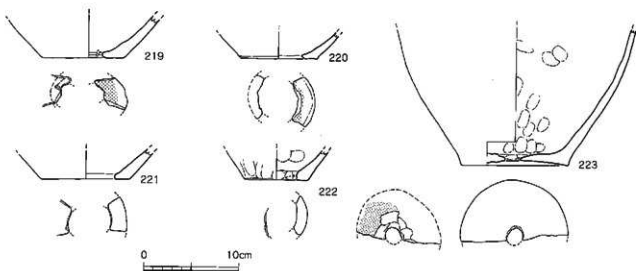
位と底部にコゲが付着する。129は外面胴下位に部分的にスス、内面の底部にコゲが付着する。130は内面底部にコゲが付着する。131は外面ハケメ、内面ナデ後に底部付近だけヨコナデ。132は内外面ナデられている。133は外面は風化のため調整は不明瞭である。内面は工具によるナデが残る。134は胴下位の外面にスス、内面にコゲが付着する。135はやや上げ底。外面の被熱が著しく、内側は部分的にコゲが付着する。136は二次焼成により外側が剥離している。調整は外側ハケメ、内側はナデである。137は内面が剥離しており、調整不明。139は内外面ナデで、やや上げ底。140は底部よりやや外れた位置に穿孔がされる。被熱により器面が剥離している。141は外側胴下位～底部に黒斑が付着している。142はややあげ底で、底部に黒斑が付着する。底部にも指頭圧痕が残る。143の内面は板状工具により横方向にナデられている。146は外面ハケメ、内面ナデ後にヨコナデがされている。149は内外面ともに風化によって調整不明。151はやや上げ底。底部中央よりやや外れた位置に穿孔される。



第63图 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑩ (1/4)



第64図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑧ (1/4)



第65図 大溝・落ち込み出土底部穿孔土器実測図⑨ (1/4)

外面胴下位に黒班が付着する。151の調整は外面はハケメ後に胴下位の底部付近はナテ消され、内面はヘラナテと指押さえがされている。153は外面が板状工具によりナテられている。底部外側に黒班が付着する。155は内面底部にコゲが付着する。158は内面ナテ、外面は調整不明。158～161はやや上げ底である。166はやや上げ底。外面は縦方向のハケメ、内面は板状工具によるナテである。170の調整は外面ヘラミガキ、内面はヘラナテ。176の外面胴下位にススが付着する。177の外面は風化のより調整が不明瞭。182は内面底部にコゲが付着する。

183は内面に板状工具によるナテがなされ、底部付近に工具痕らしきものが残る。184～191は底部のみの残存である。186は底部中央よりやや外れて位置に穿孔される。189の底部外面に黒班が付着する。190は底部内面にコゲが付着する。

壺 (192～222) 192は口縁と底部が接合しないが、同一個体である。内面には黒色磨研が施される。外面底部に黒班が付着。外面調整は風化のため不明瞭だが縦方向のミガキ、内側は頸部の一部にミガキが施される。193頸部以下が残存、胴上～中位にM字突帯が3本巡る。外面胴下位に黒班付着。調整は外面胴下位はヘラナテがなされ、当て具痕が残る。内面は器面剥離のため調整不明瞭だが、指ナテである。194～209は底部からのたちあがりがかくびれる。194は外面はヘラ状工具のようなものでなでられている。内面はナテら

れており、工具痕が残る内面。胴下位あたりは器面が剥離している、内外面ナテ。外面胴下位に黒班付着。195は外面ヘラナテ、内面ナテである。196は内外面ともに摩滅が著しい。内面の底部近くに指刺痕とヘラ状工具痕が残る。197は外面は板状工具によるナテで、底部付近に痕跡が残る。198外面胴下位にススが付着する。199と200は外面底部に黒班が付着する。201は外面はハケメ、内面は指ナテとヘラナテがされている。206は外面全面に丹塗りにされている。207は内外面ともにヘラミガキが施される。内面は全面丹塗り。底部中央より外れた位置に穿孔される。208はやや上げ底である。外面ハケメ、内側はヘラナテと指ナテがされる。209は底部のたちあがりのくびれが特に強く、大きく上方へひらく。外面調整はヘラミガキ、内面調整はナテである。210～222は底部から胴部への立ち上がりがほとんどくびれていない。210は内外面ナテだが、外面はヘラミガキの可能性もある。外面胴下位に黒班付着。211は内面に丹塗りがされている。212内外面ともにナテ。胴下位外面にススが付着する。214は外面全面に丹塗りがなされる。215は被熱による剥離が著しい。216は内外面ともに器面が剥離しているが、赤色顔料が付着していた可能性がある。217は内外面ナテ。外面胴下位に黒班が付着する。218は内外面ナテ。219は外面底部に黒班が付着する。

鉢 (223) 232は1/2のみ残存で、上げ底である。調整は内外面ナテ、底部外面には赤色顔料が付着する。

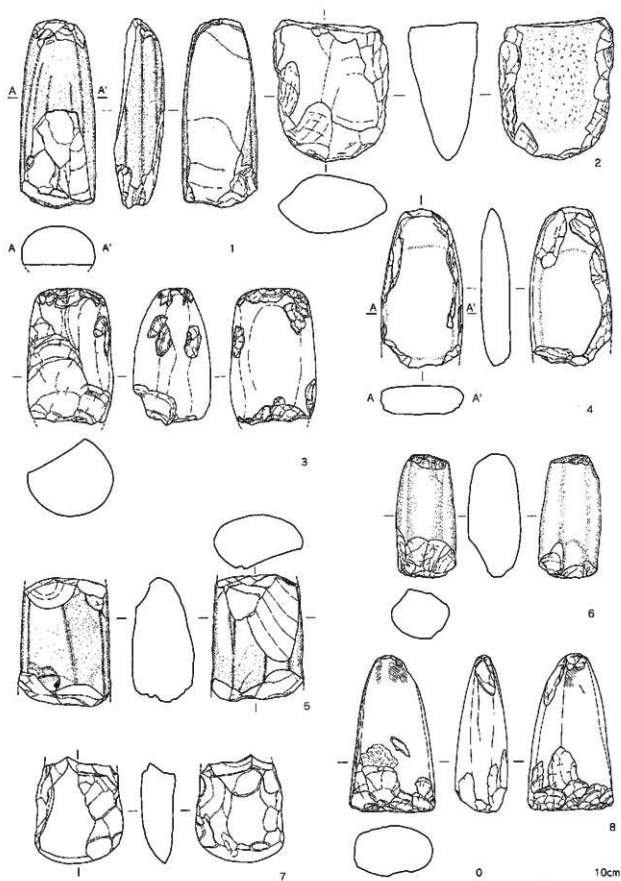
大溝・窪ち込み出土石器 (第66~70図)

石斧 (1~9) 1はE-8から出土した蛤刃石斧で、刃部を欠損する。長さ14.8cm、最大幅5.9cm、厚さ3.1cm、重さ564.14gを測る。玄武岩製。2はG-10から出土した石斧で、剥離面を多く残し、側辺に二次加工を加える。玄武岩製で、重さは774.75gである。3は大溝から出土した石斧で、打撃による剥離が残っている。長さ10.8cm、幅6.7cm、厚さ6.1cm、重さ678.97gである。4は刃部を欠損する磨製石斧で、側辺の敲打痕が多く残る。長さ12.4cm、幅6.4cm、厚さ2.25cm、重さ335.71gを測る。5は刃部、基部共に欠く蛤刃石斧で、玄武岩製。長さ10.2cm、幅7.2cm、重さ597.32gを測る。H-10より出土。6は刃部を欠損する蛤刃石斧で、玄武岩製。長さ9.8cm、幅4.7cm、厚さ4.1cm、重さ331.33gを測る。7は敲打痕跡を多く残す石斧で玄武岩製である。基部を欠損し、長さ7.9cm、幅6.6cm、厚さ2.5cm、重さ217.26gを測る。大溝からの出土。8は刃部に敲打による剥離面が多く残る石斧で、基部の入念な研磨が行われている。刃部の一部に研磨痕跡が見られることから、刃部欠損後、再度調整したものか。大溝からの出土。9は基部側を欠損する石斧で、Aトレンチの11層から出土。長さ8.5cm、幅6.5cm、厚さ3.0cm、重さ272.24gを測る。10は刃部を欠損する蛤刃石斧で、玄武岩製である。長さ14.0cm、幅5.7cm、厚さ4.3cm、重さ529.75gを測る。

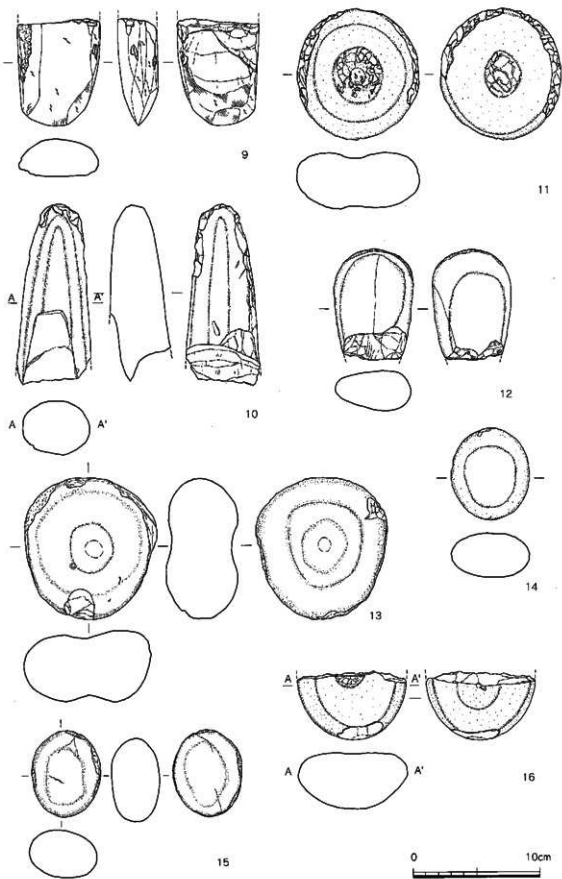
敲石・磨石 (11~16) 11は円碟の平坦面中央が敲打によって凹む。また周縁部も敲打痕が多数残る。長さ10.4cm、幅9.6cm、重さ665.12gを測る。H-13より出土。12はH-14から出土した側面に敲打痕が見られる敲石で、石英製である。長さ8.9cm、幅6.2cm、厚さ3.3cm、重さ276.94gを測る。13はE-9から出土し、円碟の平坦面中央が凹み、周辺部に敲打痕が残る。長さ11.2cm、幅10.4cm、厚さ5.5cm、重さ955.02gを測る。片麻岩製である。14は表裏全面が磨かれた磨石で、大溝からの出土。長さ7.4cm、幅6.1cm、厚さ3.5cm、重さ224.18gを測る。15も大溝から出土した敲石で、周縁部に敲打痕が多数残る。長さ6.8cm、幅5.4cm、厚さ3.7cm、重さ193.40gを測る。16は全体の約半分を欠損する敲石で、Aトレンチ8層からの出土である。平坦面中央が敲打により凹み、側面にも敲打痕が見られる。片麻岩製。長さ5.1cm、幅8.5cm、厚さ4.3cm、重さ278.76gを測る。

砥石 (17~31) 17~24は粗砥石。17はG-8から出土した砂岩製の砥石で、4面とも砥面として利用し、

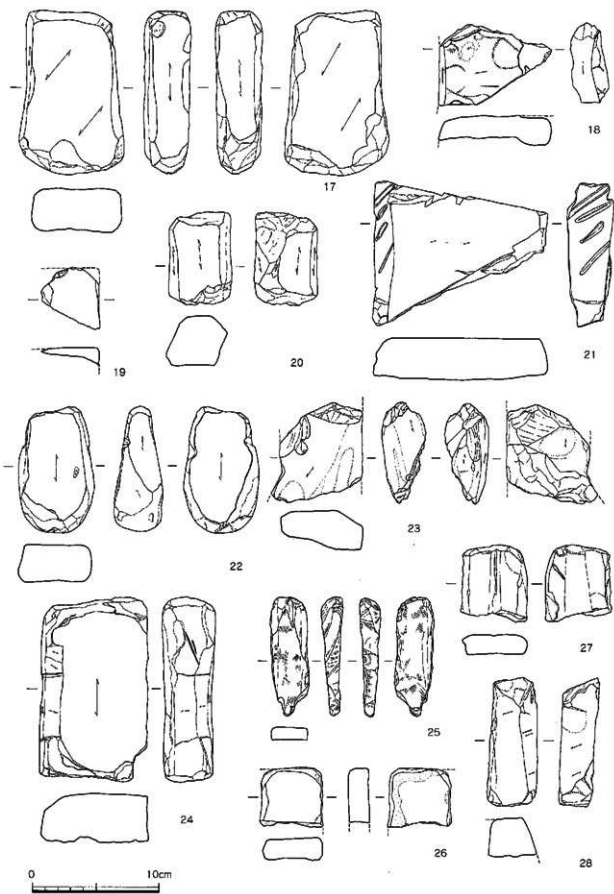
浅く凹む。長さ13.0cm、幅8.2cm、厚さ3.7cm、重さ604.11g。18は裏面が剥離し、2面を砥面として利用する。表面の使用による窪みが多数残る。長さ8.7cm、幅6.3cm、厚さ2.1cm、重さ111.57gで砂岩製。19も裏面が剥離する砥石で、砂岩製である。残存で、長さ5cm、幅4.5cm、厚さ1.5cm、重さは27.75gを測る。大溝からの出土。20は断面が七角形の砥石で、うち、5面が使用されている。長さ7.4cm、幅5cm、厚さ4cm、重さ202.43gを測る。G-10からの出土。21は平面三角形の砂岩製筋砥石で、G-10からの出土である。側面側の砥面には3~5mmの断面・字形筋が3条、断面U字形の筋1条が入る。長さ13.4cm、幅11.4cm厚さ3.3cm、重さ569.56g。22は石斧であったものを砥石に転用したもので、側面には挟り痕が左右対称にある。3面を砥面として利用しており、H-13から出土する。長さ9.6cm、幅5.7cm、厚さ2.8cm、重さ298.13gを測る。23はH-16から出土した砂岩製砥石で、4面全てに砥面が確認される。使用による円形状の浅い窪みが各面に見られる。長さ8cm、幅7.1cm、厚さ3.2cm、重さ205.43gを測る。24は平面が方形形状となる砂岩製の砥石で、2面が使用される。側面の凹みは段ができていたため、鉄砥石の可能性が高い。長さ14.0cm、幅8.3cm、厚さ3.9cmで、大溝からの出土。25は緑色凝灰岩製の砥石で、4面全てを砥面として利用しており、砥面の擦痕が明瞭に残る。長さ9.4cm、幅3.0cm、厚さ1.0cm、重さ64.05gを測り、大溝から出土している。26は正方形形状に残る砥石で、大溝からの出土。長さ4.8cm、幅4.9cm厚さ1.8cm、重さ77.85gを測る。27は表裏2面を利用する砂岩製の砥石で、表面に幅1cmの筋が1条入る。筋が断面V字形となることから、鉄器用と考えられる。長さ5.5g、幅5.0cm、厚さ1.6cm、重さ94.98gを測る。大溝からの出土。28は断面が台形状となる砂岩製の砥石で、3面を砥面として使用する。大溝からの出土で、重さ175.94gを測る。29は側面に敲打痕が残る砥石で、大溝からの出土である。残存で長さ8.0cm、幅6.7cm、厚さ2.0cm、重さ169.17gを測る。30は歪な長方形を呈する砥石で、表面は砥面として利用しているが、裏面は利用が僅かであったのかその痕跡を見出すことができない。長さ9.2cm、幅5.7cm、厚さ2.9cm、重さ252.62gを測る。31は断面が台形状の砂岩製砥石で、4面全てが砥面として利用されている。表面の両端には、段が入りその部分が黒化していることから、鈍型の転用砥石と考えられる。長さ3.9cm、幅3.0cm、



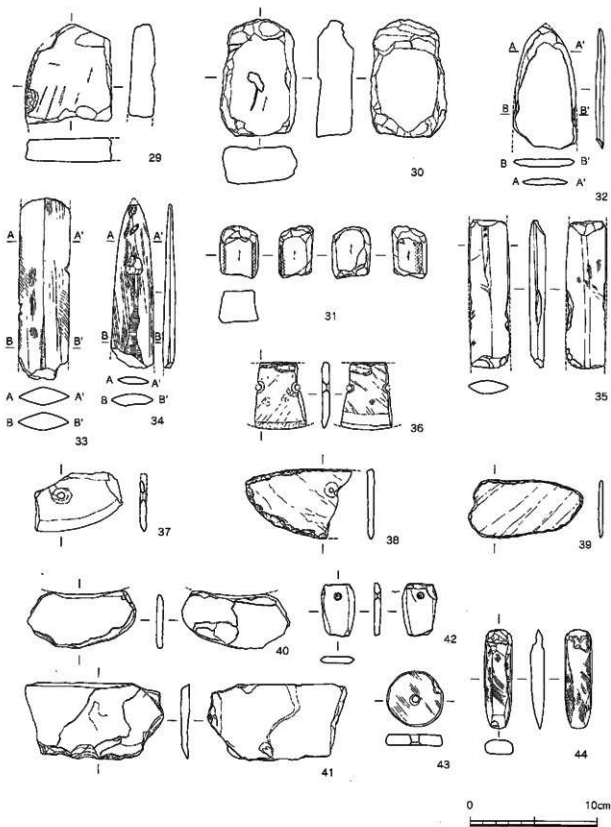
第66図 大溝・窪ち込み出土石器実測図① (1/3)



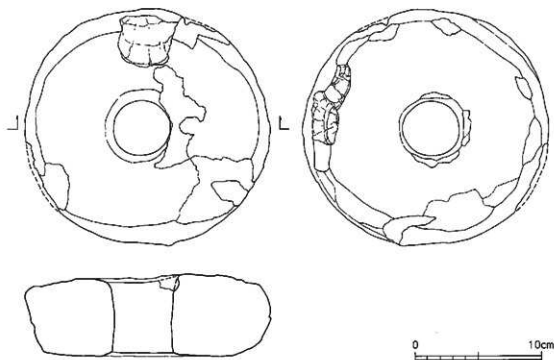
第67図 大溝・落ち込み出土石器実測図② (1/3)



第68图 大溝・猪ち込み出土石器実測図③ (1/3)



第69圖 大溝・落ち込み出土石器実測圖④ (1/3)



第70図 大溝・落ち込み出土石器実測図⑤ (1/3)

厚さ2.4cm、重さ47.32gを測る。Aトレンチからの出土。

石戈・石剣(32~35) 32は先端部と基部を欠損する石戈で、非常に扁平である。表面の風化が著しく、僅かな研磨痕跡を平坦面に確認できる。長さ9.5cm、幅5cm、厚さ0.6mm、重さ42.41g。G-9からの出土。33は先端部、基部を欠損するが、基部寄りである。研磨によって中央の稜が明瞭で、基部側で2条となる。北側落ち込みからの出土で、残存で長さ14.4cm、幅3.9cm、厚さ1.4cm、重さ46.53gである。34は石剣の切先側部分で、中央の稜はあまり明瞭ではないが、研磨によって刃をきれいにする。長さ13.0cm、幅3.3cm、厚さ1.0cm、重さ112.73gを測り、Aトレンチからの出土である。35は表側の石剣で、先端部、基部を欠損する。中央の稜はあまり明瞭ではなく、2条となり、断面楕円状となる。長さ11.8cm、幅3.2cm、厚さ1.1cm、重さ74.55gである。

石包丁(36~41) 36は両側を欠損するもので、両面基部側に敲打痕が残る。裏面には両面から穿たれた孔のほかに、未貫通の穿孔痕がある。F-8からの出土で、重さ21.31g。37も両側を欠損する。予備穿孔が大きく、孔径も0.6cmとやや大きい。残存で、長さ4.7cm、幅6.8cm、厚さ0.5cm、重さ20.12gで、大

溝からの出土。38は未成品で、周縁に敲打痕が多数残る。中央には浅い窪みがあり、予備穿孔まで行われている。残存で、長さ5.5cm、幅8.3cm、厚さ0.5cm、重さ34.70gを測る。F-9からの出土。39も38と同様の未成品で、周縁の敲打、穿孔痕が観察できる。長さ4.5cm、幅8.9cm、厚さ0.4cm、重さ25.01gを測る。F-9からの出土である。40は成形から研磨の途中の未成品で、刃部の敲打痕がわずかに残る。長さ8.4cm、幅4.2cm、厚さ0.6cm、重さ34.27gを測る。砂岩製で大溝からの出土。41は相割段階の未成品で、粘板岩製である。刃部の打撃痕が多数残る。長さ10.1cm、幅6.0cm、厚さ0.7cm、重さ82.5gを測る。

垂飾石製品(42) 42は大溝の遺構検出時に出土したもの。扁平で両端に鋭くはない刃を作り出し、先端部に向かって窄まるため、石剣の転用したものであろうか。上位に石製工具による両面穿孔を行う。長さ4.1cm、幅2.5cm、厚さ0.5cm、重さ10.9gを測る。

石製紡錘車(43) 43はほぼ円形の滑石製紡錘車で、石製工具による両面穿孔が行われている。

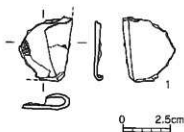
盤状石製品(44) 44は大溝からの出土で、2条に分かれる稜はあまり明瞭ではないが、基部、先端部両方に細かい研磨による刃部を作り出す。先端幅が1cm前後であることから、底部、胴部穿孔に使用されたも

のであろうか。長さ8.0cm、幅2.2cm、厚さ1.2cm、重さ34.88gを測る。

大型石鍾 (45) 45は砂岩製の大型石鍾で、大溝からの出土。全体に風化が著しく、剥落が進行し現場での取り上げも困難であった。断面形は菱形となり、中央には孔径4.6cmの穿孔が1つある。長さ18.7cm、幅19.2cm、厚さ6.6cm、重さ2400gを測る。

大溝・落ち込み出土鉄器

鉄製鋤先 (1) 1は大溝から出土した鉄製鋤先で、折り返し部分のみの残存である。折り返しは側面で三角形に、刃部でも若干の折り返しが行われている。残存で、長さ3.4cm、幅2.6cm、厚さ3mmを測る。内側に木質が残る。



第71図 大溝・落ち込み出土鉄器実測図 (1/2)

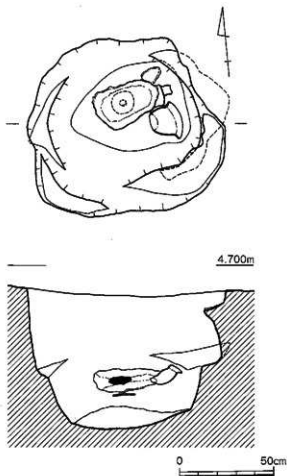
D. 井戸 (第72図)

南西側へ流れる大溝を切り込む井戸で、調査区西側に位置する。平面形は長さ1.05m、幅0.90mの略円形を呈し、東西に傾斜の強いテラスを設ける。床面はU字形に掘り込まれ、湧水層に達している。深さはGから約70cm、底面標高が3.83mである。

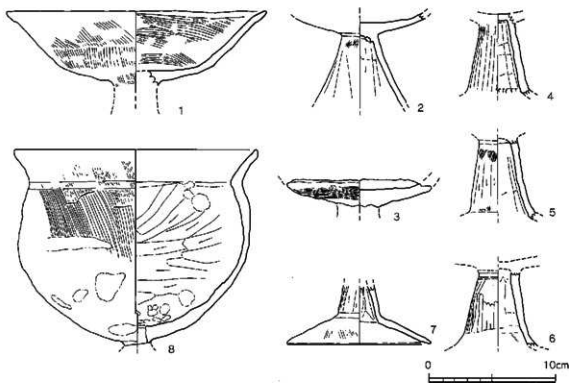
テラスの上端のレベルで、高環や脚台付鉢などが検出されており、井戸の廃棄に伴う祭祀が行われていたと考えられる。具体的には、高環の脚部の上に台石・脚台付鉢を置く。高環の環部と脚部の分離は意図的に行われているものの、台石下の高環脚部とその上の高環環部に接合関係が認められない。また、高環環部内面にススが付着していることを考えると、一度使用されたものを祭祀用に再利用したのか、祭祀行為の一環として全て掘えられるのかは判断が難しい。同様の資料の増加を待ち判断したい。時期は5世紀前半～中頃と考えられる。

出土遺物 (第73、74図)

高環 (1～7) 1は高環の環部のみ出土で、他の脚部とは接合しない。外面縦方向のハケメ、内面横方向の粗いハケメが明瞭に残る。2は環部と脚部どちらも欠損するもので、脚部には縦ミガキを施す。環部内面にはススが薄ら付着している。胎土は精良である。3は高環の環部片で、外面には横方向の細かなハケメが施される。内面にはススが付着しており、2,3共に灯明に使用されたものであろうか。外面には横方向のハケメを施す。4～6は高環の脚部片で、環部と脚部は意図的に打ち欠いている。脚部外面は上位が細かな縦方向のハケメ、中位～下位にかけて縦ミガキが明瞭に残る。非常に細かい胎土を使用する。7は脚部部のみ残存するもので、脚部は縦方向のハケメの後、ナデ



第72図 1号井戸断面実測図 (1/20)

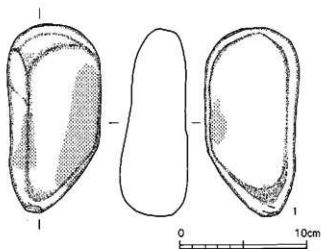


第73図 1号井戸出土石器実測図 (1/3)

消し。上位は縦ミガキが残る。

脚台付鉢 (8) 8は1/2程度残存する鉢で、くの字口縁を呈する。外面は粗い縦方向のハケメ、内面はヘラ状工具による強いナアを施す。底部には焼成筒の穿孔があるが、脚部との接合部分であろう。内面の一部に縦帯状のススが附着する。

敲石 (1) 1は敲石で、自然面をよく残す。両端に使用痕跡を残すが、側面にススが染く付着するため、カマドの支石とも考えられたが、二次焼成痕が見られないため、判断が難しい。



第74図 1号井戸出土石器実測図 (1/3)

E. 土坑

本調査では9基の土坑が検出されたが、7号土坑を除けば、全て南北に伸びる微高地上に位置する。この微高地は削平が著しく、微高地が狭く田区においても粟柏墓の上面が削られた状態で出土するなど、当時は現状よりも2m近く高かったのではないかと考えられる。

1号土坑 (第75図)

調査区南西端に位置する土坑である。長さ1.25m、幅0.94mの略台形を呈し、深さ8cmと非常に浅い。この付近は削平を大きく受けた微高地上であるため、本来はまだ深く残存しているものと考えられる。

2号土坑 (第75図)

楕円形を呈する土坑で、1号土坑の北東側に位置している。長さ0.72m、幅0.56m、深さ14cmを測る。土坑内には、土器が床面から5cm程度浮いて検出される。流れ込みであろう。

3号土坑 (第76図)

微高地上のほぼ中央に位置し、東西に伸びる溝が連結する土坑である。平面形は不整形で、長さ3.52m、幅2.17mを測る。深さは7cm程度であったが、溝と同じ深さであり、これに関連すると考えられる。土器は風化が著しい破片が西側に集中して見られた。

4号土坑 (第77図)

調査区の南西側、微高地の端に位置する。平面形は不正形の土坑で、長さ1.06m、幅0.72cm、深さ7cmを測る。土坑中央に蓋の胴部～底部片が1点出土した。

5号土坑 (第77図)

調査区南側で、1・2号掘立柱建物の間に位置する土坑である。平面形は略楕円形で、長さ2.10m、幅

1.12m、深さ8cmを測る。風化が著しい土器が土坑中央に集中して見られ、鹿茸土坑と考えられる。

6号土坑 (第77図)

2号掘立柱建物の南側に位置する。長さ0.92m、幅0.74mの不正形を呈している。北側には1段のテラスがあり、床面は隅丸長方形である。上層で、蓋の底武辺が出土している。

7号土坑 (第77図)

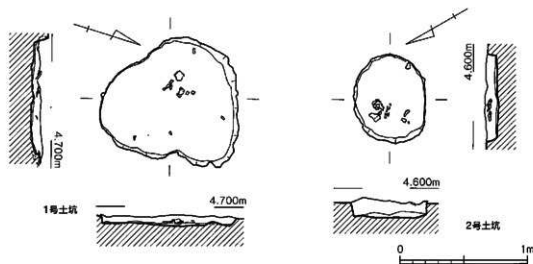
溶ち込み西側に位置する土坑で、平面形は略円形である。長さ1.00m、幅1.04m、深さ40cmを測り、遺物が全く出土せず、時期は不明である。

8号土坑 (第77図)

4号土坑の東側で、微高地南端に位置する。長さ1.92m、幅1.24mで、不整形である。深さが4cm程度とかなり浅いが、本来はまだ深かったものと思われる。

9号土坑 (第77図)

調査区の北側中央に位置する。平面形は隅丸方形を呈し、長さ1.52m、幅1.14mを測る。床面は端が1段下がるため、中央が盛り上がる。



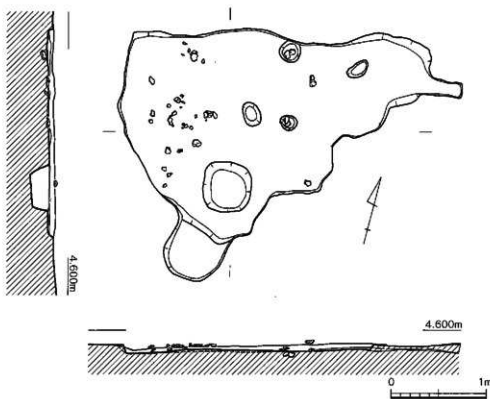
第75図 1・2号土坑平面断面実測図 (1/30)

出土遺物 (第78図)

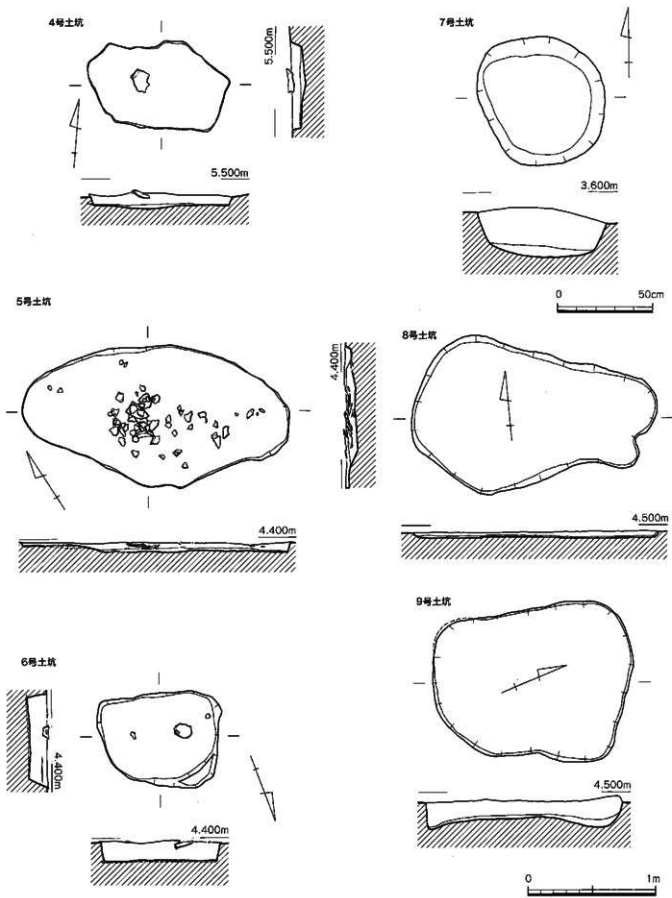
土坑から出土した土器の大部分が、風化が著しく調整が不明瞭である。

1は1号土坑から出土した甕の口縁～胴部片。逆し次状口縁を持つ小形の甕で、外面は風化が著しく、調整不明瞭である。2、3は3号土坑からの出土。2は逆し次状口縁を持つ甕で、口縁部のみ残存している。口縁下の三角突帯は張り出しが弱い。全体的に風化が著しい。3は底部片で、1/8程度の残存である。これも風化が著しい。4は4号土坑からの出土。胴下位～底部にかけて残存する甕で、黒底が胴下位に付着する。底部の接合痕跡がわずかに残る。5、6は5号土坑から出土したもの。5は1/4程度残存する甕の底部片で、風化が著しいため、調整不明瞭。底部はやや丸みを帯びる。6はく字口縁を持つ甕で、口縁～胴上位を残す。口縁外面に黒ススが帯状に付着する。7は6号土坑からの出土で、小型甕の底部～胴下位まで残存するものである。外面にはスガが濃く付着し、使用されていると考えられる。胴部穿孔は内から外への焼成後穿孔で、強い打撃によるものである。8～13は7号土坑からの出土である。8は大型鉢で、口縁～胴上位にかけて残存。逆し字状口縁を持ち、その下に三角突帯を

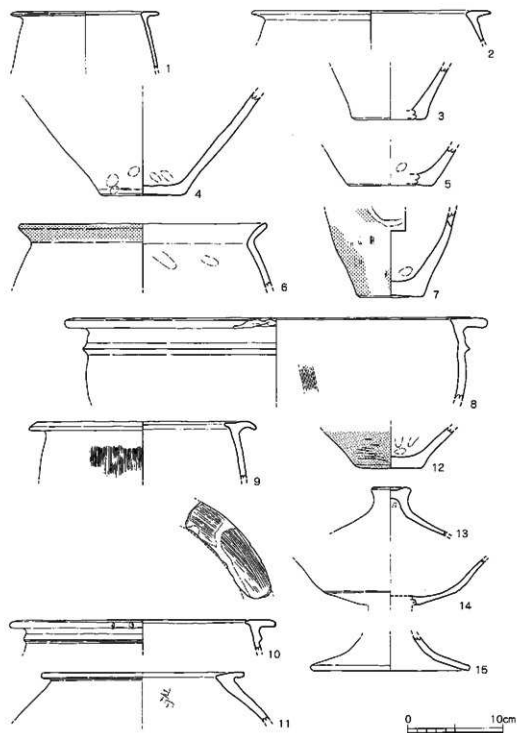
1条連らす。9は端部が垂れた鋤先口縁を持つ甕で、口縁～胴上位まで残存する。外面には縦方向のハケメが明瞭に残る。10は鋤先口縁を持つ甕で、口縁下の三角突帯の張り出しが弱い。口縁端部には刻み口が2箇所に見られる。外面調整はナデが主であるが、口縁上面にはハケメ調整が残っている。11は内傾する逆し字口縁を持つ丸みを帯びた甕である。口縁～胴上位まで残存する。12は甕の底部片である。外面には丹が帯々と残り、横ミガキを施す。内面ナデ調整。13は蓋のつまみ部分のみの残存。外面は風化により調整不明瞭。14は8号土坑からの出土である。14は高坏の坏部片である。内外面ナデ調整が強く残る。15は9号土坑からの出土で、高坏の脚座部片である。風化が著しく、調整が不明瞭。



第76図 3号土坑平面断面実測図 (1/40)



第77図 4~9号土坑断面実測図 (1/30、7のみ1/20)



第78图 1~9号土坑出土土器实例图 (1/4)

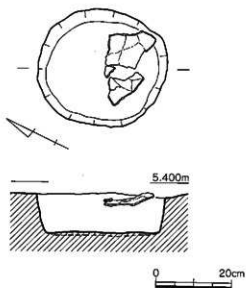
c. ビット

11号ビット (第79図)

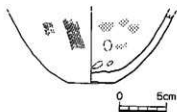
調査区南西側に位置し、微高地のほぼ中央にあるビット。長さ0.35m、幅0.31mの円形を呈している。深さは11cm程度であり、土器が上層で出土している。

出土遺物 (第80図)

1は底部が丸底気味となる型で、胴下位～底部まで残存する。風化が著しいため、調整が不明瞭であるが内面にはコゲが若干残る。



第79図 P-11平面断面実測図 (1/10)



第80図 P-11出土土器実測図 (1/4)

(3) まとめ

今回の調査によって、前年度報告したⅢ区と合わせ、全体の南半分の状況が明らかとなった。検出された大溝と落ち込みはⅠ・Ⅱ区に展開する墓域、住居域と一連のものであり、その報告を待つべきであるが、本遺跡にかかるとする現状の特筆すべき点について、簡単に述べたい。

1. Ⅳ区の遺構

出土遺物は、獨立柱建物3棟、大溝1条、落ち込み、井戸1基、土坑10基、ピット12基である。

獨立柱建物はすべて1間×1間のもので、竪穴式住居であった可能性がある。1号、2号獨立柱建物間には6号土坑があり、弥生時代中期の土器が廃棄されている。また、3号獨立柱建物周辺にも同時期の土器が確認されるため、この建物群は落ち込みと同期的に併行すると考えられるが、落ち込みの南側は、弥生中期の遺構が希薄であるため、中心集落の外縁部に位置すると考えられる。

大溝と落ち込みについては、出土する土器群から、弥生時代中期前半～後半が主体であり、乳玖Ⅰ(古)～須玖Ⅱ(古)の範疇である。中期末～後期前半は比較的少量である。大溝は落ち込みが沼地化した段階で掘削、使用され、大溝と落ち込みは、同様の埋没過程を辿ることから一連のものである。大溝は集落の区画としての役割を担っているが、落ち込みもその役割を意識されていたと考えられる。また、本遺跡は標高2.75～4.5mと低地に位置するため、地下水位が高く、排水を意図していた可能性も考えておきたい。

そして、その廃絶については、一旦埋地状まで意図的な埋め戻しが行われているが、この時に完形の高杯や甕が逆さに置かれた状態での出土があったことや土器自体に底部穿孔や口縁部・胴部穿孔が確認され、丹塗磨上器も出土していることなどから、何らかの祭祀が行われたことを想定させる。

その後自然堆積によって埋没しているが、穿孔・打ち欠き・丹塗が大量に出土することから、集落内祭祀に使用された土器の廃棄が続けて行われていると考えられる。

2. 大溝、落ち込みの遺物

大溝、落ち込みから出土した遺物は、パンケース200類以上に及んだ。ここでは、本遺跡に見られた、遺物を通じて、祭祀行為の形態について考えてみたい。

①個体計測について

グリッド別の個体数計測は、底部と口縁の両方を行

ったが、底部については、個体数計測が容易な甕と壺を対象に、口縁部に関しては把握できるものについて全器種を対象に行った。底部個体数計測では総数1080点のうち、最も出土数が多かったグリッドは、F-8の195点で、次いで、F-8周辺のF-9、10、11、G-8、H-10などが多く、F-8から離れるに従って個体数が減少している傾向が見られた。口縁部計測においても総数2648点中F-8が496点と最多で、その傾向は変わらない。F-8は大溝と落ち込みとが接続する部分にあたり、この場所に対する意図的な廃棄から、ここでは水辺の祭祀を想定しておきたい。

一方、出土量の多い順に器種を並べると、甕、壺、器台、高杯、甗、鉢である。甕が最も多く、底部計測で全体の73.83%、口縁部計測で74.24%である。ちなみに三坂七尾遺跡(両部、牟田2001)の住居域調査でも同様の計測(弥生中期前半～中頃)がされており、甕が全体の72.8%と今回と近い数値である。一方、三坂七尾遺跡との相違点として、甕、高杯の割合が比較的高い。

グリッド名	底部個体計測				口縁部計測				計
	壺	甕	鉢	器台	甗	高杯	壺	計	
E-8	81	15	76	142	8	8	7	2	170
E-9	28	9	37	39	2	8	1	5	87
E-10	1								0
E-12	17	1	18	42	2	19		1	58
F-7	3	4	3	26	22	2			1
F-8	129	36	169	347	29	29	9	2	496
F-9	32	11	77	124	14	3			145
F-10	88	29	119	127	19	2	1	4	145
F-11	83	19	79	169	17	11		2	200
F-12	2		2						4
G-7	12	2	14	11	2				13
G-8	60	16	76	168	20	2		9	214
G-9	29	16	52	128	4	12	1	2	146
G-10	32	18	50	184	19	15	1	2	210
G-11	2		2			1			1
G-12	13	8	18	20	15	1			38
H-9	1		1	5	2	4			11
H-10	74	11	85	148	13	4		2	178
H-11	11		11	21	3	4			1
H-12	32	11	43	68	18	7		2	84
H-13	7	11	18	24	9	5	1	1	38
H-14	15	10	25	47	23	4	2	1	62
H-15	8	7	15	25	16	8		1	54
H-16	21	13	35	52	22	12	1		87
H-10	4	2	6	7	8	3			1
H-14	8	10	19	22	15	3			8
J-11	2		2	1	2	3			7
合計	817	283	1080	1906	225	142	25	20	2648
全体割合	36%	12%	47%	83%	10%	6%	1%	1%	100%

グリッド別個体数計測表

また、グリッド別に器種構成を見ていくと、出土量の最も多いF-8を除外すると、大溝との接続部付近では甕の個体数に比例して、壺、高杯の数も多い。ところが、落ち込みの南側(H-14,15,16,1-10,14, J-11など)では、甕の個体数に対して、壺、高杯の割合が高い。煮込に供される甕が主体となっていることから、集落内の生活で使用された土器の廃棄も行

われたのであろうが、土器に対して穿孔、分離行為が行われる点や壺、高杯の割合が高い点を考慮すれば、水辺の祭祀もしくは集落内祭祀で使用した日常土器の廃棄も行われていたと考えたい。

②穿孔・折損・打ち欠き行為について

これら行為については、器種によってその対象部位が異なっており、本遺跡で出土した土器に観察された諸行為は、下表に示す。これら行為のうち、特徴的な部分をまとめれば、

①壺には外面にススの付着や内面にコゲが観察されており、日常に使われていた土器に対しても行われている。

②甕先口縁壺、広口口縁壺は他器種に比べ一つの個体に対し、より複数の穿孔、分離が行われる傾向にある。

③口縁部、突帯の打ち欠きはほぼ全ての器種に認められる。口縁部の打ち欠きは打撃によるものと細かな敲打によるものとがあり、打撃は1~2箇所、敲打は口縁全周に渡って行われることが多い。蓋や器台の器部打ち欠きも同様の行為と考えられる。

④分離行為は細かな敲打によってなされており、丁寧に切り離すことが意識されている。

⑤胴部の穿孔は頸部があると穿孔しにくいので、胴部と頸部の分離行為を先に行うと考えられる。

⑥穿孔方向は壺、鉢、高杯において内→外へむきされ壺は内→外である。口縁打ち欠きは高杯だけが下→上の打撃を加える

⑦広口口縁壺には丸窓状に穿孔されるものがあり、打撃による胴部穿孔とは区別される。細かな敲打で円または楕円形を意識して行われている。

これら土器に対する諸行為について、馬田弘修氏の優れた論考がある。(馬田1982) 馬田は祭祀土器出土遺物の検討と遺物の詳細な観察から、土器祭祀における基礎概念化を試みており、これらの行為が潜在的日常空間と非日常空間の両者にかかわる許容と否定の

行為に起因し、祭祀土器の再使用の許容と否定が行われた結果と見る。その中で、穿孔・折損行為については、土器機能を否定するものとした。

本遺跡でも穿孔土器に明確な二次的使用痕を見出すことができないことから、現段階では土器機能の否定とするのが妥当と考える。これを前提とした場合、壺に打ち欠き・穿孔・分離が行われ、再使用が不可能な状態にしていることは、徹底的な土器機能の否定であり、その土器の再使用を認めない行為と考えられる。これに対して口縁部や突帯の打ち欠きは、機能の否定とまでは行かないが、完形で打ち欠きのみ行われている個体(鉢が最も多い)が少数出土することから、打ち欠きで実用を否定することが想定されるが、甕先口縁壺や広口口縁壺、高杯など複数の穿孔、分離が行われるものは、打ち欠き行為が土器再使用に対する初段階の否定行為となるのであろう。

このような実用否定行為について、山中清美氏は近畿地方の墳墓と集落から出土する穿孔、打ち欠き土器を検討した結果、集落と墳墓の供献土器のあり方が同じであることから、死者が出た場合、集落内で行われた飲食物共食備礼や墓前祭祀で使用した土器の実用否定とする。(山中1988) また、勝部明生氏は方形周溝墓の周溝内に見られる供献土器に行われる穿孔行為は、日常土器を祭祀化するための変更行為とし、穿孔された壺が神霊の依代となり、それを祭ること、富への再来を願ったとしている。(勝部1986) この両者の違いは、穿孔・打ち欠き土器自体を祭祀土器と見るかどうかである。

北九州の場合、祭祀土器として一般的に認知されている丹塗磨研土器の存在がある。丹塗磨研土器の穿孔、折損行為はこの時期多くの遺跡で認められ、本遺跡でも丹塗磨研土器の穿孔・折損が見られる。よって、短絡的に穿孔、欠損行為を祭祀化するための行為と断定することはできないであろう。これは丹塗磨研土器

	口縁打ち欠き		頸部打ち欠き	きね部打ち欠き	分離	頸部穿孔	頸部穿孔						胴部穿孔			
	全面(敲打)	一部(打撃)					敲打			打撃			打撃	敲打		
							上位	中位	下位	上位	中位	下位				
壺		上→下							内→内	内→内	内→内	内→内	内→内	内→内	内→内	内→内
壺	広口口縁	上→下	上→下		頸部と胴部の分離		外→内	外→内	内→内	内→内	内→内		外→内	内→内	内→内	内→内
	甕先口縁			○	頸部と胴部の分離	内→外(敲打)			内→内	内→外						
鉢	上→下	上→下										内→外	内→外			外→内
高杯	下→上	下→上	上→下		胴部と頸部の分離								(鉢部)内→内			
壺				○												
器台				○												

器種別打ち欠き・分離・穿孔一覧表

の評価とも関わってくるが、近年、中國聡氏は筒形器台など祭祀専用器種が存在すること、非丹塗土器に対して丹塗研土器の製作に多くの労力が必要であることを認めた上で、多くの器種が祭祀専用ではなく、むしろ身分表示を含めた象徴的なものと指摘されている。

(中國1998) 丹塗土器が祭祀専用土器か象徴的なものかは、更なる基礎調査と分析が必要であるが現状では、祭祀土器の実用否定行為として捉えておきたい。これらの問題については、他地域を含め資料の蓄積や再検討が必要であり、稿を改め言及したい。

底部穿孔土器について

本遺跡からは底部穿孔土器が多く出土した。これら穿孔は焼成後に行われたもので、焼成前のものは確認されていない。その穿孔方法については、大きく大別して「敲打による穿孔」と「打撃による穿孔」に分けることができる。

①敲打による穿孔

穿孔方法A 敲打

穿孔方法B 敲打→調整敲打

穿孔方法C 敲打→調整敲打→削り

穿孔方法D 敲打→(調整敲打)一回転削り

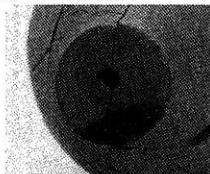
②打撃による穿孔

穿孔方法E 打撃

①敲打による穿孔

穿孔方法A (敲打)

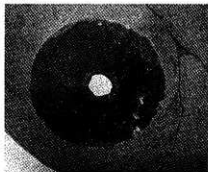
使用工具は不明であるが、細かな敲打によって貫通させる方法である。外孔壁は敲打のため凸凹しており、孔断面には貫通した際の縦方向の工具痕が明瞭に残る。Fig54-51、52は敲打技法を知るよい例で、それぞれ明瞭に敲打痕が残る。内孔は貫通後の剥離が著しく広がり、孔形は共に瓶で孔径も非常に小さい。例としてはFig48-6、7がある。敲打穿孔では、石包丁の紐孔や石製玉類の穿孔で見られるような貫通での剥離、破損を防止する両面穿孔を行わず、内外いずれか一方から行われ、剥離が明瞭に残る。



方法A (fig48-6)

穿孔方法B (敲打→調整敲打)

敲打によって貫通させた後に更に孔を広げ、形を整えるために調整敲打を行う。調整敲打の多くは外面から行われるが、両面に行う例もある。外孔壁には調整敲打痕が残る場合と外孔壁に残る敲打痕や内面の剥離を調整敲打によって垂直に落とし、その痕跡を残さない場合がある。このため、孔断面はX字形、V字形、平行など様々である。敲打の際に失敗して底部が外れたものもある。この穿孔方法は本遺跡では最も多く確認できる。型ではFig47-2、3、Fig50-9~14、Fig50-16、Fig51-17~21、fig52-22、24、28、Fig53-30~40、45~47、Fig54-50、fig55-53、54、56、58、59、61、63などがある。孔の形はいびつな形から正円に近いものまで様々ある。中でも3、11、13、16、17、21、50などは正円に近い。多くは、二次焼成痕(スス・コゲなど)が付着し、中には被熱による剥離が著しいものがある。これは壺・壺岡器種に認められる。



方法B (fig50-16)

穿孔方法C (敲打→調整敲打→削り)

敲打で貫通させ、調整敲打を行い、さらに削りまで行うもので、「丁寧なもの」は正円に近くなる。孔壁には縦・斜めなど無秩序に擦痕が入る。Fig47-1の孔形はほぼ正円に近く、外孔に敲打の痕跡はないため、敲打後に大きく削られたと考えられる。一方fig53-42の孔形はいびつで、外孔に敲打痕が残る。1、42はいずれも内孔壁には貫通した時の工具痕がそのまま残る。孔の形はfig47-1のように大部分削られたものは断面

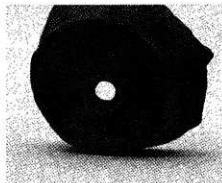


方法C (fig47-4)

形がVに近く、fig53-42のようにわずかに削られたものはXに近い。要ではfig47-1、4、fig53-42、fig57-67、fig62-183などこれに属する。鉢のfig-223もこの工程で穿孔された可能性がある。

穿孔方法D (敲打→(調整敲打)→回転削り)

敲打から回転削りを行うものである。調整敲打は回転穿孔の際に、その痕跡が失われている可能性があるため、調整敲打が行われたかどうか判断が難しい。また、同様の理由で、敲打についても一度適するのかわからない穿孔に止まるのか不明である。回転穿孔であるため、孔壁に横方向の擦痕がいくつも入り、孔形は



方法D (fig53-41)

ほぼ正円となるが、外孔の輪郭に敲打痕が残るため歪である。孔の断面形はX字形近く、外孔断面は回転削りで円錐状となり、内孔は敲打の貫通時の剥離が残っていることが多い。

回転削りの大半は外面から行われるが、fig53-41のように内外面ともに施すものもある。fig48-8、fig52-25、fig53-41、43、48、49、fig60-142、fig61-167がこれに属する。

② 打撃による穿孔

穿孔方法E 打撃

打撃によって穿孔する方法で、最初に敲打を行う方法(A~D)と比べて孔径は大きく、力を加えた反対側は薄く広く剥離する。工具痕が明瞭に残るものも多い。本遺跡からは要ではfig52-23、fig57-72、要ではfig63-192~194、200、fig63-205などがある。穿孔方向について、要は外面から、壺は内面から穿孔する。また壺の底部穿孔fig52-23、fig57-72はともに二次焼成痕のス・コゲが付着するが、壺に付着はない。穿孔方向の違い、二次焼成痕の付着の有無が器種の違いによる可能性があるが、今回は資料が少ないため、断定はできない。

以上、穿孔方法を略述したが、先述したとおり、穿孔方法は「敲打による穿孔」と「打撃による穿孔」に



方法E (fig52-23)

大別される。両者は、力の入れ方に違いがあり、その加減が孔径や剥離に反映されている。打撃技法は敲打などの調整を行わず、当初から異なる意図で穿孔された可能性が高い。

参考までに、敲打穿孔、打撃穿孔の底部厚の平均値、最大値、最小値を換算した。結果は表にしたが、ともに平均は0.9cmと同じ値を示す。また、敲打穿孔は打撃穿孔に比べ最大値は大きく、最小値は小さい。つまり穿孔方法の違いは底部厚によるものではないことがわかる。

	敲打 (A~E)	打撃 (F)	不明	総数
壺(点数)	112	2	87	191
壺(点数)	18	5	10	31
底部平均 (cm)	0.9	0.9	/	
最大厚(cm)	2.1	1.2		
最小厚(cm)	0.2	0.5		

底部穿孔土器器種別・穿孔方法別個体数及び厚さの数値

またそれぞれの方法で底部穿孔されたものの個体数を器種別に示した。その結果、壺は圧倒的に敲打穿孔が多く、打撃穿孔のものは少ない。一方、壺は個体数が少ないため不安は残るが、打撃穿孔によるものが壺よりも多く、器種によって穿孔方法が異なる可能性があるが、資料の増加を待ち、今後の検討課題としておきたい。

底部穿孔土器の出土量について

出土量については、木下正尚が過去の研究で遺跡から出土した総底部数に対する底部穿孔土器の比率を出している。(木下1976) 職内の例であるが、弥生前期で、藤原宮下層四分遺跡土器出土の一括資料では底部72点(壺36点・壺35点)中、底部穿孔土器1点(1.3%)、上ノ島遺跡では底部破片1375点中18点(1.3%)、勝部遺跡では底部破片1086点中(壺539点・壺500点)中、47点(壺5点・1%、壺42点・約8%)という値を示

す。また、木下氏は四ツ池遺跡で出土した土器を各種式で値を示している。(下記の表参照) 勝部遺跡が8%と高い値を示す以外は、1~2%である。

一方、洲地頭給遺跡をみると、豊のIV区出土総点数1247点、壺の総点数427点中、底部穿孔土器は壺165点(可能性があるもの含むと191点)、壺24(31点)である。比率を出すとき豊13.2%、壺5.6%と高い値を示す。比較対象が畿内のため、地域差も考慮しなければならないが、縄文晩期~古墳時代まで過去の研究を行った木下・堀田啓一・岩崎卓也は豊で底部穿孔されたものは弥生中期になると減少の傾向にあるとしている。福岡平野では弥生前中期に比べて弥生中期は一つの遺跡から出土する底部穿孔土器が減少する傾向があり、洲地頭給遺跡の底部穿孔土器の出土量は今までの傾向とは異なるものである。

	壺	壺	鉢	底部穿孔土器(割合)
第I様式	36	35		3(4%)
第II様式	144	120	1	8(3%)
第III様式	228	161	2	8(1.5%)
第IV様式	102	80		1(0.5%)
第V様式	327	364	99	51(6%)

宗島泉四分遺跡出土底部穿孔土器時期別割合表

周辺遺跡の底部穿孔土器

周辺遺跡においても底部穿孔土器の出土事例がある。弥生前期では、雀居遺跡4次調査SX-13、那珂遺跡64次調査SU-121、比恵遺跡30次調査SU-010出土例があり、壺の穿孔は穿孔方法Bによるものである。また比恵遺跡30次調査SU-021から出土した壺は穿孔方法Dである。比恵遺跡30次調査SU-012から出土した壺は敲打の途中で放棄され、貫通していない。この個体は敲打痕が明瞭に残り、本遺跡fig54-52のような皿状の断面形をとる。

弥生中期の例では、周船寺遺跡群6次調査20号土壌、11次調査SD-069、飯氏遺跡9次調査SD-04の出土例などがあり、すべて穿孔方法Bである。一方、比恵遺跡群71次調査SK-24から出土した壺は各工程が非常に丁寧に施している為、方法BかDのいずれかであるが決定は困難である。

これらの弥生時代前期、中期の他遺跡の穿孔方法は本遺跡のものと同じである。ただし、本遺跡の壺に方法DかEで穿孔されたものはなく、他遺跡でもこれらの方法で穿孔する壺はみられないため、比恵遺跡30

次調査SU-021で出土した壺は特殊な例となる可能性がある。

古墳時代前期では、雀居遺跡9次調査の1号溝状遺構西側から出土した壺は、孔径が5mmほどで、孔断面はほぼ垂直で凹凸が少なく、孔周辺に敲打の痕跡がみられないので細い棒状の工具で穿孔したと思われる。これは回転穿孔が主体となる例であり、穿孔方法が時期によって変化した可能性がある。

以上、底部穿孔土器について見てきたが、蓄積された資料の詳細な観察、分析が行われていなかったため、まず穿孔方法の分類を行った。穿孔方法は壺または時期的に変化していく可能性を指摘したが、現状では北部九州の様相を把握できていないため、用途、目的についてはあえて触れず、問題提起をするにとどめた。今後、基礎調査を行い、これらの問題について検討していきたい。

主要参考文献

- 河部博俊、車田孝代編2001『三坂七尾遺跡』前原市教育委員会 馬出弘毅1982『弥生時代の土器形制について—聚泥行為の基礎概念化—』『奈良次郎博士古希記念学文化論集』上 福岡：森貞次郎博士古希記念論文編刊行委員会
- 田中清美1988『弥生時代前・中期における穿孔・打ち欠きのみられる土器について』『考古学論集2』考古学を学ぶ会
- 勝部明生1986『穿孔土器の考察—船橋遺跡出土例を中心として—』『櫻川健一先生追悼記念 日本史論叢』須川健一先生追悼記念会
- 中園聡1998『丹波関原古墳群の背景とその性格—卑土アゾアの中の須玖Ⅱ式土器』『人類学研究』第10号人類学研究会
- 樋口清之1929『底部に一孔を有する弥生式土器』『史前学雑誌』第1巻第3号 史前学会
- 直良信文1947『古文化叢刊—4—古代日本人の食生活』大八洲出版株式会社
- 岩崎卓也1966『瀬小寺』『信濃』第18巻第4号 信濃史学会
- 堀田啓一1970『日本上代の壺について』『日本古文化論叢』櫻原考古学研究所
- 木下正史1976『古代炊飯具の系譜』『古代・中世の社会と民俗文化』和歌森太郎先生追悼記念論文集編集委員会
- 岡川生2003『掘り置かれた飯形土器の用途について』『筑波大学先史学・考古学研究』第14号 筑波大学
- 福岡市教育委員会1995『周船寺遺跡群』福岡市埋蔵文化財調査報告書429号
- 福岡市教育委員会2000『周船寺遺跡群3』福岡市埋蔵文化財調査報告書655号
- 福岡市教育委員会2000『飯氏遺跡群9次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書654号
- 福岡市教育委員会2000『雀居遺跡5』福岡市埋蔵文化財調査報告書635号
- 福岡市教育委員会 2001『比恵30—比恵遺跡群第69・70・71次発掘調査報告—』福岡市埋蔵文化財調査報告書671集

し と ま つ も と
志登松本遺跡



IV. 志登松本遺跡の調査

1. はじめに

(1) 遺跡の概要と調査の経過

志登松本遺跡は、前原市大字志登字松本に所在する集落遺跡である（地名は平成18年度より住居表示の変更で更多江駅北2丁目となる。）。この遺跡は原田大六氏による挟入片刃石斧の米製品が紹介されたことで、発掘調査以前から著名な遺跡であった。

今回の調査は、前原市潤に新設された東風小学校へいたる道路の設置に伴うもので、調査面積約685㎡、調査期間は平成15年5月1日～同年6月30日までである。

調査区は既存の道路や河川の関係からⅠ～Ⅳ区まで設定したが、Ⅳ区では遺構が確認されなかったため、Ⅰ～Ⅲ区の遺構・遺物の報告を行う。

遺跡の時期は大きく弥生時代中期、弥生時代後期後半～古墳時代前期と平安時代に分けられ、遺構は掘立柱建物・土坑・溝・木棺墓・竪棺墓が確認された。遺物は土器・石器を中心にガラス小玉等も出土したが、盗難にあったため、図化して報告できないものがあることを、紙面を借りて陳謝する。

なお、遺物の整理、報告書作成業務は平成18年度に行い、本遺跡が東風小学校建設関連の発掘調査であるため、源地頭給遺跡の報告（Ⅳ区）とあわせて行う。

註

原田大六 1983「挟入片刃石斧の再検討」（1・2）『古代学研究』34・35 古代学研究会

(2) 調査の組織

平成15年度の発掘調査に係る組織は以下の通りである。

調査主体者：前原市教育委員会

総括	教育長	菊竹利剛
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信
	文化課課長補佐	中村鉄弥
	文化財係長	岡部裕俊
庶務	文化振興係主事	浜地 克
調査	文化財係主事	平尾和久

発掘作業

市丸千賀子・井上狭衣・柏田睦子・川上久美子・
藤森啓子・山崎千代子・和田治子・鹿見島一代・
一ノ宮嘉弘・田中康夫・宮本ミキヨ・佐藤秀行・

馬場義照・木山八重子

平成18年度の遺物整理、報告書作成業務に係る組織は以下のとおりである。

総括	教育長	菊竹利剛
	教育部長	久我和彦
	文化課長	鬼木武信
		(12月末日で退職)
	文化課課長補佐	久保静代
		(平成19年1月より課長に昇格)
	文化財係長	角 浩行
庶務	文化財係主事	大久保二葉

伊都国歴史博物館係

主事 平尾和久

復元・整理作業

柏田睦子・藤野さゆり・藤森啓子・和多治子（五十音順）



調査風景

1. 遺構と遺物

(1) I区の概要

志登松本遺跡は東風小学校の取り付け道路建設の事前調査として行った発掘調査である。調査区の中央部よりやや西よりに農道が南北に走っているため、農道の東側をI区とした。現在はほぼ平坦な田園風景が広がる志登松本遺跡であるが、I区の中央部には幅8mの大きな谷が認められ、弥生時代終末期までに大量の砂で埋まったものと考えられる。弥生時代終末期にはこの谷を埋めた砂の上に木棺墓が築かれた。また木棺墓の周囲には古墳時代初期の墓棺墓も確認された。

その他の遺構としては掘立柱建物、土坑、溝のほか多くのピットが確認されている。

遺物は土器、石器、ガラス玉類が出土した。土器は主に弥生時代中期と弥生時代後期後半から古墳時代前期、平安時代後期の3時期に区別される。

(1) 木棺墓・墓棺墓 (第81・82図)

①木棺墓 (第81図)

第81図は、I区中央部に位置する谷の埋上である砂の中に設けられた木棺墓である。約20cmの耕作土を剥ぎ取るとすぐに検出されたもので、既に積の大部分が削平されており、掘方まで含めても15cmほどしか残っていない。また、木棺簿の南半分はI区を東西に横断する掘乱溝（時期不明）や暗渠排水溝により分断されている。

この木棺墓の全長は $2.28\text{m} + \alpha$ 、北側端部幅0.81mを測り、南に向かうにつれて幅を減少することから、北頭位であったと考えられる。土層断面図から木棺墓の構築を復元すると、まず竪堀を掘り込み、その中に木棺を固定するための青灰色粘土を敷き詰める。粘土の上に木棺をすえつける。木棺の縦断面形態は数cmの残存であるが、舟形を呈する可能性がある。

棺内からは土器の小片が7点出土し、木棺の時期比定に有効かと期待されたが、いずれも周辺のピットから出土する弥生時代中期の土器で、おそらく木棺が後の耕作で削平された時に紛れ込んだものと思われる。なお、棺内、特に頭部付近に赤色顔料が敷かれていた。分析の結果、ベンガラに水銀朱が少量混じったものであることが明らかとなった。赤色顔料の分析は福岡市埋蔵文化財センターの比佐嶋一郎氏に依頼し、氏による玉粒を掲載しているのをご参照願いたい。

第82図は木棺墓から約2m離れた場所に築かれた墓棺墓である。長軸0.63m、短軸0.60mのほぼ正円に近い平面プランをもつ。墓棺の上部は削平され、東西方向に伸びる暗渠排水溝が墓棺の合わせ口部を分断し

ている。このため、上蓋・下蓋の組み合わせの詳細は不明であるが、おそらく口頭部を打ち欠いた蓋を用いたと考えられる。

棺内からは、コパルトブルーのガラス小玉2点が出土したが、盗難にあい、図化することができなかった。

1は上蓋で蓋の頸部の破片である。外面には帯状突帯を貼り、突帯上は横ハケ、それ以外は縦ハケを施す。内面は基本的に横ハケを施す。

2は下蓋で蓋の胴下半部である。外面には帯状突帯を貼り、突帯上に平行タタキを垂直に組み合わせた縦格子タタキを施す。その他の部分は剥離箇所が多いが、基本的に縦ハケを施す。底部は凸レンズ底である。これらの形態から古墳時代初期に位置づけられ、木棺墓はその直前の弥生時代終末期に築かれたと想定される。

(2) 掘立柱建物 (第83～85図)

1号掘立柱建物 (第83図1)

I区東側に所在する掘立柱建物で、2号掘立柱建物に切られる。規模は $1.80\text{m} \times 1.92\text{m}$ 。

2号掘立柱建物 (第83図2)

I区東側に所在する掘立柱建物。 $2.52\text{m} \times 2.34\text{m}$ を測る。

3号掘立柱建物 (第83図3)

I区東側に所在する。柱穴は調査区南側に伸びており、規模等は不明。

4号掘立柱建物 (第83図4)

I区東側に所在する掘立柱建物。 $2.1\text{m} \times 1.8\text{m}$ を測る。5号掘立柱建物 (第83図5)

$3.30\text{m} \times 2.25\text{m}$ を測る掘立柱建物。I区東側に所在する。

6号掘立柱建物 (第83図6)

I区東側に所在する掘立柱建物。建物は南西側に伸びており規模等は不明。

7号掘立柱建物 (第83図7)

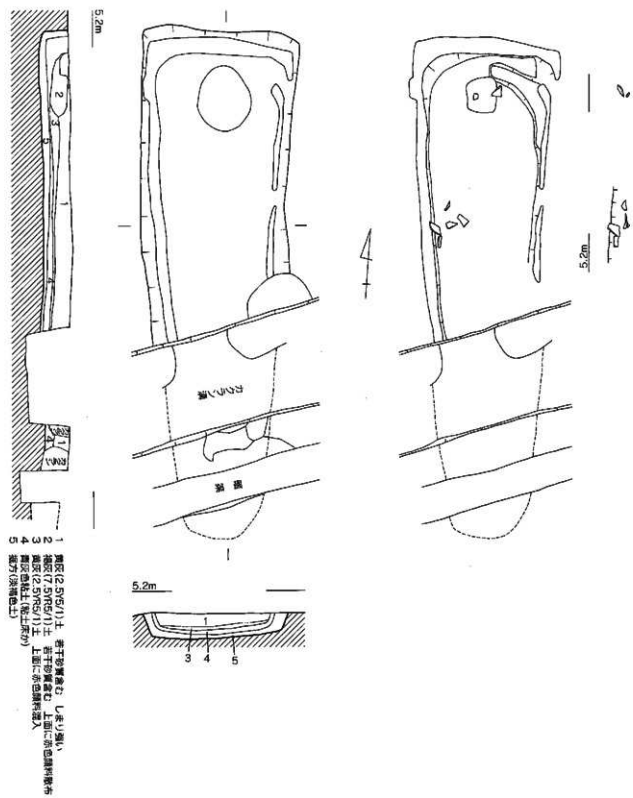
I区東側に所在する掘立柱建物。 $1.95\text{m} \times 2.25\text{m}$ を測る。

8号掘立柱建物 (第84図8)

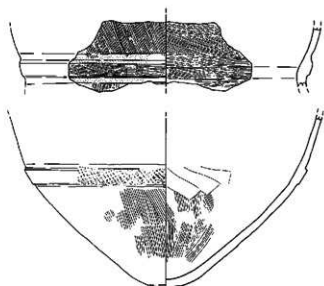
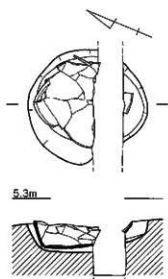
I区中央で検出した掘立柱建物。建物は調査区北側に伸びており、規模等は不明。

9号掘立柱建物 (第84図9)

I区中央北側で検出した掘立柱建物。1間 \times 2間の建物で、一部調査区外に伸びる。現状で $4.08\text{m} \times 2.70\text{m}$ を測る。なお、一部の柱穴から礎板・礎石が確認された。



第81図 志堂松本遺跡 木棺墓実測図(左:遺構検出時 右:完掘時) (1/20)



第82図 志登松本遺跡竪穴出土状況と竪穴実測図 (1/20、1/6)

10号掘立柱建物 (第84図10)

I区中央で検出された1間×1間の掘立柱建物。暗渠等に切られる。2.01m×2.01mを測り、ややゆがむ。

11号掘立柱建物 (第84図11)

I区中央で検出された掘立柱建物。調査区外に伸びており、建物の規模等は確認できない。

12号掘立柱建物 (第84図12)

I区中央で検出された掘立柱建物。1間×1間の建物で2.10m×2.16mを測る。ややゆがんだプランを持つ。

13号掘立柱建物 (第84図13)

I区西側で検出された掘立柱建物。1間×1間の建物で、2.25m×3.15mを測る。

14号掘立柱建物 (第85図14)

I区東側で検出された掘立柱建物。1間×1間の建物で、2.10m×3.45mを測る。

15号掘立柱建物 (第85図15)

14号掘立柱建物と一部重複する建物で、1間×1間の建物で、2.25m×2.55mを測るが、一部調査区外に伸びる。

16号掘立柱建物 (第85図16)

I区西側で確認された掘立柱建物。1間×1間の建物で、1.50m×1.89mを測る。

(3) 土坑 (第86図)

1号土坑 (第86図1)

平面不整形の土坑で、東西方向に長軸を持つ。長軸0.93m、短軸0.80m、深さ15cm。断面は二段掘り状で、床面は平坦ではない。出土遺物はない。

2号土坑 (第86図2)

平面楕円形で、断面がすり鉢状の土坑である。土坑の上層から弥生土器が割れた状態で出土したが、要の

胴部片のみで実測できなかった。そのほかの出土遺物はない。長軸0.88m、短軸0.73m、深さ37cm。

3号土坑 (第86図3)

平面は正門に近く、断面が逆台形の土坑である。直径0.59m、深さ15cm。土坑床面から弥生土器1点が出上した。

出土遺物 (第87図1)

台付甕の胴部である。外面は横ナデで、脚端部を積みあげた。内面は断続的な横ハケを施す。2箇所に黒斑が認められる。脚径13.0cm。

4号土坑 (第86図4)

平面楕円形で、比較的浅い土坑である。長軸0.50m、短軸0.35m、深さ15cm。土坑のほぼ中央部から弥生土器が割れた状態で出土した。

出土遺物 (第87図2)

弥生時代後期の甕である。く字口縁であるが屈曲部はやや丸みを帯びる。外面胴部上半は斜ハケ、下半部は底部からの削痕が残る。内面は屈曲部が斜ハケで、以下、縦ハケを施す。底部は欠けているが、おそらく凸レンズ状の底部であろう。なお、外面上半部に黒斑がある。

5号土坑 (第86図5)

平面隅丸方形で、断面も方形の土坑である。長軸0.52m、短軸0.45m、深さ24cm。出土遺物はない。

6号土坑 (第86図6)

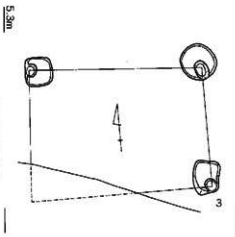
平面が正門近く、断面が方形の土坑である。長軸0.52m、短軸0.48m、深さ40cm。土坑の上層から鉢の破片、中層から兜形の甕が出土した。甕のなかの土を採取し洗浄したが、出土遺物はなかった。

出土遺物 (第87図3・4)

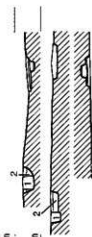
3は鉢である。外面の底部付近は下からのヘラケズ



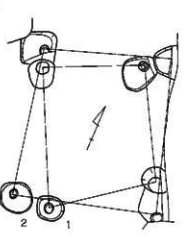
5.3m



5.3m



5.3m



5.3m

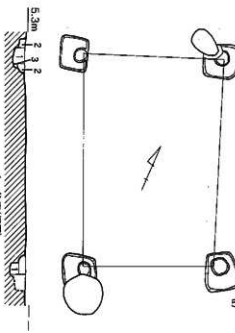


5.3m

1 柱石(10754~471)
2 礎石と地山ブロック(明洞)の裏じり



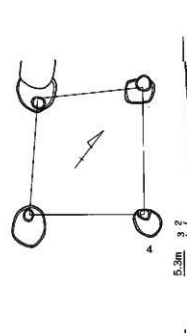
5.3m



5.3m



5.3m



5.3m

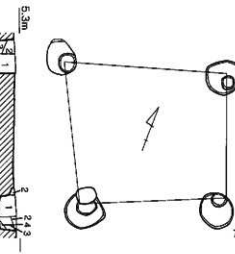


5.3m

1 柱石(礎石)
2~5 礎石と地山ブロック
(3~4は地山の割合が高い)



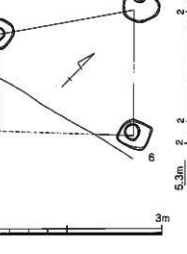
5.3m



5.3m



5.3m



5.3m



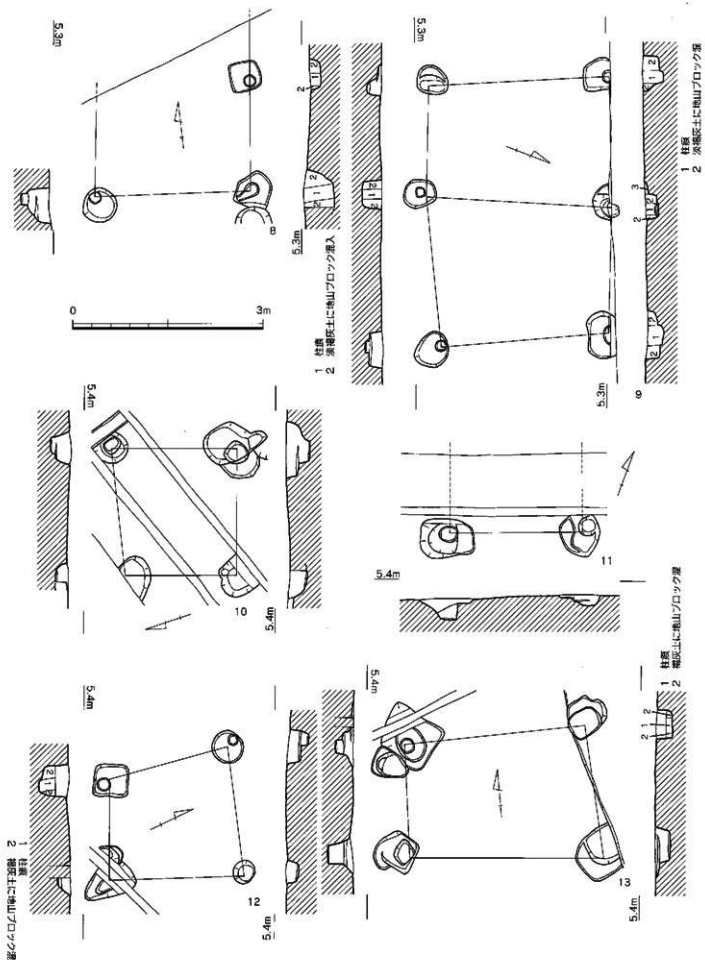
5.3m

1 柱石(礎石)
2 礎石と地山ブロック

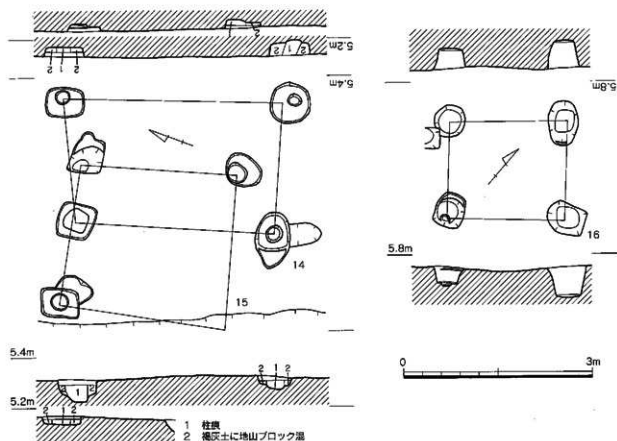
1 柱石(礎石)
2 礎石と地山ブロック
3 < 9m径礎石

1 柱石
2 礎石
3 礎石と地山ブロック
4 礎石と地山ブロック

第83図 志松本遺跡1~7号独立柱礎物実測図 (1/60)



第84図 志登松本遺跡8～13号竝立て柱建物実測図 (1/60)



第85図 志登松本遺跡I区14~16号掘立柱建物(1/60)

り、底部以外は斜ハケを施す。内面は縦ハケを多用し、口縁部付近は間隔が広い斜ハケを施す。外面には黒斑が見られる。4はほぼ完形の甕である。胴部中央に最大径を持ち、外面上部に横ハケ、下部に縦ハケを施す。底部からは縦ナデに近い削痕が認められる。内面底部は指頭圧痕が認められる。内面上部は横ヘラケズリ、下部は縦ヘラケズリを施す。外面下部には黒斑があり、一部スモも付着する。

7号土坑(第86図)

長軸3.60m、短軸2.70mの楕円形の土坑。深さは14cmと浅い。東西方向に軸を持つ。床面からは炭や焼土も検出された。遺物は床面に扱って弥生土器と磁石が出土した。

出土遺物(第87図5~10、第88図1~13)

第87図5~10、第88図1~10は弥生時代中期の甕の口縁部である。完形に復元されるものはなく、全て反転復元して図化している。

第87図5・9、第88図3・4は黒斑が認められる。第87図6はやや跳ね上がる口部縁をもつが、その大部分が打ち欠かれている。第88図11は甕の底部である。欠損部分があるが上底になる。内面底から3cmぐらい

まで炭化物が付着する。12は注口付帯である。胴部に取り付けられた注口部のみの出土で、復元径に若干の不安が残る。外面には丁寧な横ミガキを施す。類例は吉武遺跡群や比恵遺跡、原の辻遺跡に認められる。13は完形の投擲である。

(4) その他の遺物(第88~90図)

第88~90図にはピットや包含層から出土した遺物を掲載する。

第88図14~20は線刻や文様を持つもので外来系土器と考えられるものである。14はP140から出土した連続三角文を刻む土器である。線刻は細くシャープであるため、刀子などで刻んだと考えられる。線刻の順番としては、まず、水平方向に直線を引いたあと、斜め方向に線刻を施すことで、連続三角文を作る。次に正位の三角文の内側を約3mmおきに左上から右下への直線で充填する。この土器片は縦5cm、横3.5cmほど残存するが、この中だけで三段の連続三角文が認められる。器厚は6.5mm。

15・16・18も14と同様な連続三角文を持つ土器で、線刻の方法から同一個体の可能性も考えられる。15はP197、16はP138、18は表探資料である。

17は同じ連続三角文を持ちながらも、ヘラ状の工具で線刻を施したものである。P85出土。三角文自体も一辺が1.5cmと14・16、18と比べて一回り小さい。

19はP202出土の土器片で、2本一単位の沈線を幅1.3cmの間隔で水平に引き、その間をヘラ掻きで連続三角文を施すものである。正位の三角文の中には二枚貝の口唇部で弧状の文様を施す。

20はP3出土の土器片で壺の頸部であろうか。縦4.5cm、横3.5cmの範囲で、6~8本一単位の沈線を6~7mm間隔で横方向に施し、沈線と沈線の間をタマキガイの椎貝の口唇部を用いて、斜め方向に互い違いの文様を施す。北部九州では基本的にタマキガイを用いた施文は認められず、西谷三号墓など出雲地域で認められることから、当地域から搬入された土器であると考えられる。

第89図1~6は弥生時代中期の甕。4の口縁部下には二次焼成の痕跡が認められる。また、5は口縁部に突起がある。1はP86、3はP228、6はP255、2・4・5は包含層より出土した。8は甕の底部。外面に縦ハケを施し、底部は上げ底である。P192出土。9~11は甕もしくは壺の底部。9は外面に黒斑をもつ。9はP322、10はP146、11はP308から出土。12は複合口縁部の口頸部、外面に縦ハケを施す。口縁端部は横ナデでやや窪む。P251出土。

13~16は器台。13~15は脚部のすぐ上に屈曲部を持つが、16は胴部上半に屈曲部をもつのであろう。13はP254、14はP264、15はP187、16の器壁は薄く、脚部内面を内側に折り曲げる。P259出土。

17は手捏ね土器。表面に指オサエの痕を多く残す。また口縁部的一端を若干下げる。底部は直径2cmほどの平坦面をもつ。包含層出土。18はミニチュア土器の底部片。外面調整は丁寧なナデで仕上げた。底部の平面は多角形になる。P171出土。

第90図1は甕の上半部。口縁端部は方形で、頸部はく字形に屈曲する。外面は縦ハケ、内面は横ハケを施す。P174出土。2は甕の底部。胴部上半部を欠く。外面は黒斑が広がる。内面は縦ハケと横ハケを全面に広がり、底部は赤褐色を呈する。二次焼成の影響か。底部は凸レンズ底から丸底への過渡期的な形態で非常に不安定である。3は布留甕である。胴部はやや長胴化し、口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。内外面とも器表面剥離が著しい。P309出土。4は甕の口縁部の小片。口縁部端部が内面に摘み出される。包含層出土。5は小型の二重口縁甕。内面ヘラケズリを用い、器表面を薄く仕上げる。P205出土。6は壺の底

部か。外面は粗い縦ハケ、内面は細かい斜ハケを施す。外面の調整は粗く、接合痕がみえる。P175出土。

7は鉢。ほぼ完形に復元される。内面は横ハケ、外面は上部に斜ハケ、縦ハケを施し、下部は底部からヘラケズリを施す。P240出土。8は須志器壁の口縁部片包含層出土。9は内面に強いヘラケズリを施す甕の破片。P317出土。10~17はP250から出土。10は上唇器柄。外面の半分以上に黒斑がある。11は焼成炎焼成の須志器。高台端部が欠けるがそれ以外はほぼ完形に復元される。12~15は土師器柄の高台部分の破片。14はやや長脚化する。16・17は黒色土器A類。内面にヘラミガキが施される。

註 この土器の類別等については福岡市埋蔵文化財センター常松幹雄氏から御教示いただいた。

(2) II・III区の調査

II・III区は南北に走る農道の西側に位置する調査区である。西側も東西に走る農道に区分されるため、北側をII区、南側をIII区とする。遺構は溝・掘立柱建物を確認する。II・III区の西側は雷山川の氾濫原となっている。

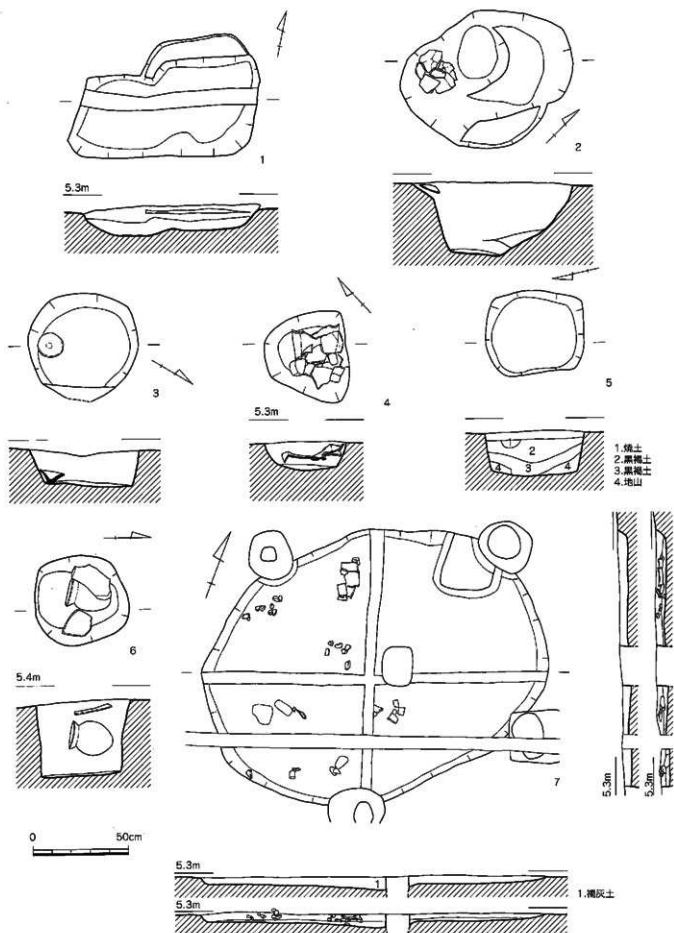
(1) 溝(付図)

II区を東西に横断する1号溝は幅0.4~0.6m、深さ0.2mを測るもので、削平されているせいか、非常に浅い。しかし、古墳時代前期の土師器が比較的多く投棄されていた。なお、1号溝からは蛇紋岩製の勾玉が出土したが、盗掘にあったため、図化して報告することができない。

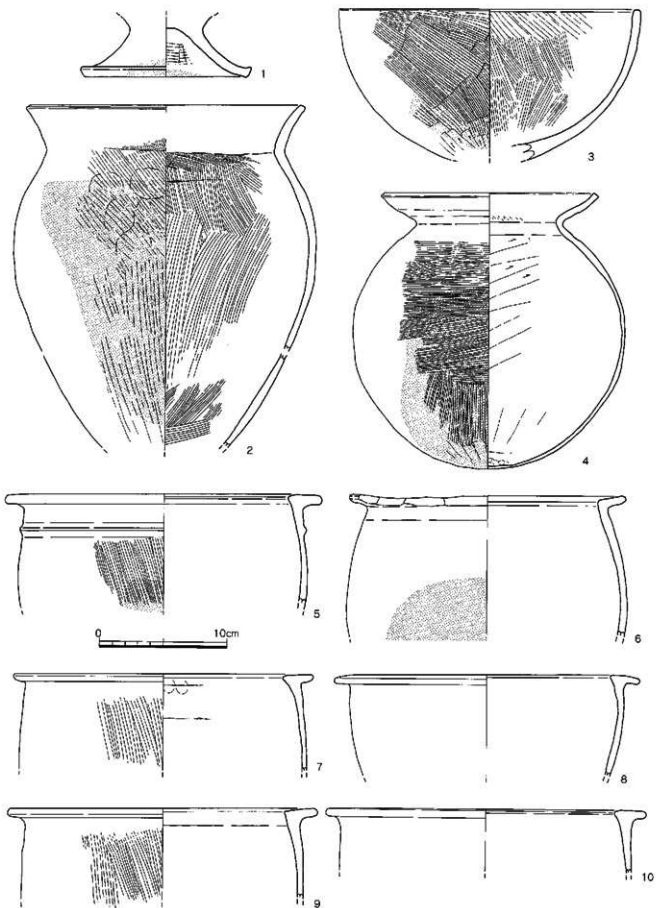
出土遺物(第91・92図)

第91・92図は1号溝からの出土品である。第91図1は弥生時代中期の甕の口縁部片。混入であろう。2~12は古墳時代前期の土師器である。いずれも、表面が剥離している箇所があるが、基本的に外面に縦ハケ、横ハケを施し、内面にヘラケズリを施す。口縁部は内湾しながら立ち上がるものより、直線的に立ち上がるものが多い。12は最もよく残る甕で、外面肩部にヘラ掻きによる波状文を施す。

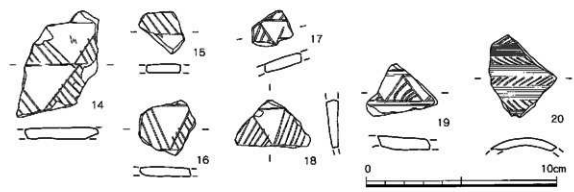
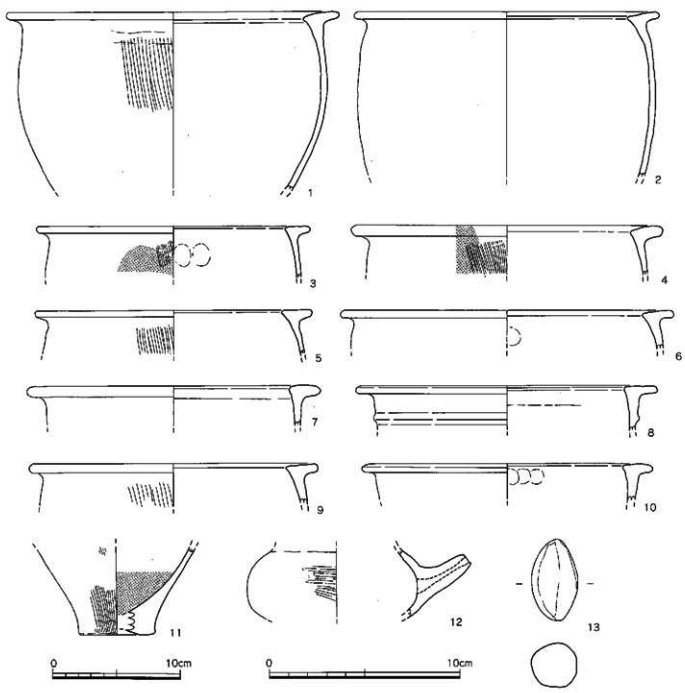
第92図1~3は小型丸底甕である。1・2は口径が胴部最大系より大きい。3はつくりが粗雑で、器壁も厚く、時期的に後出するものか。4は中型甕である。内外面に斜ハケを施す。頸部の屈曲はゆるい。4は直口甕。口縁部は内湾しながら立ち上がる。肩は張り、外面は丁寧な横ミガキを施す。内面は底部からヘラケズリを施し、胴部接続部分は指ナデを施すが、接続痕は残っている。その上にケズリを施す。6は高坏の坏部。口縁部が若干肥厚する。7は脚部片。脚付甕であろう



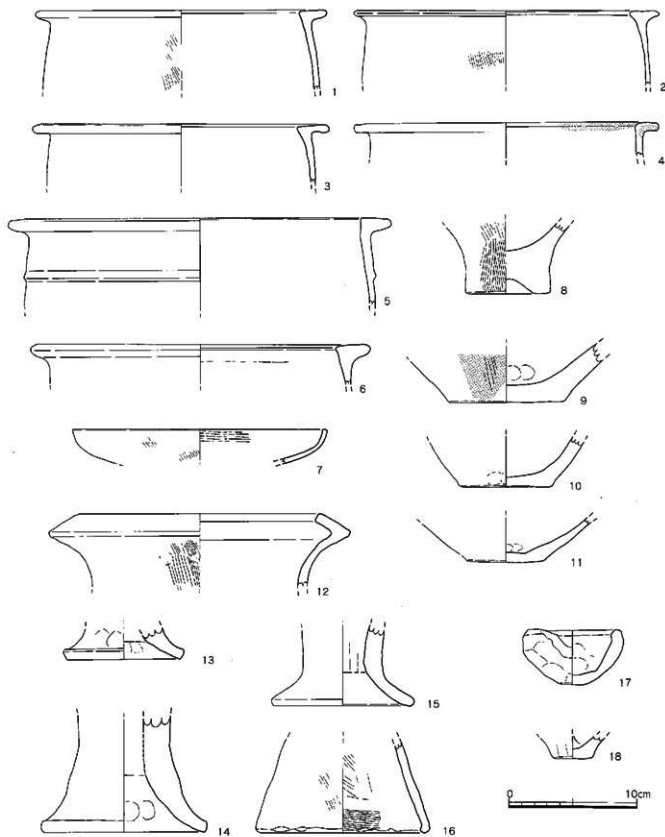
第86図 志登松本遺跡1~7号土坑 (1/20)



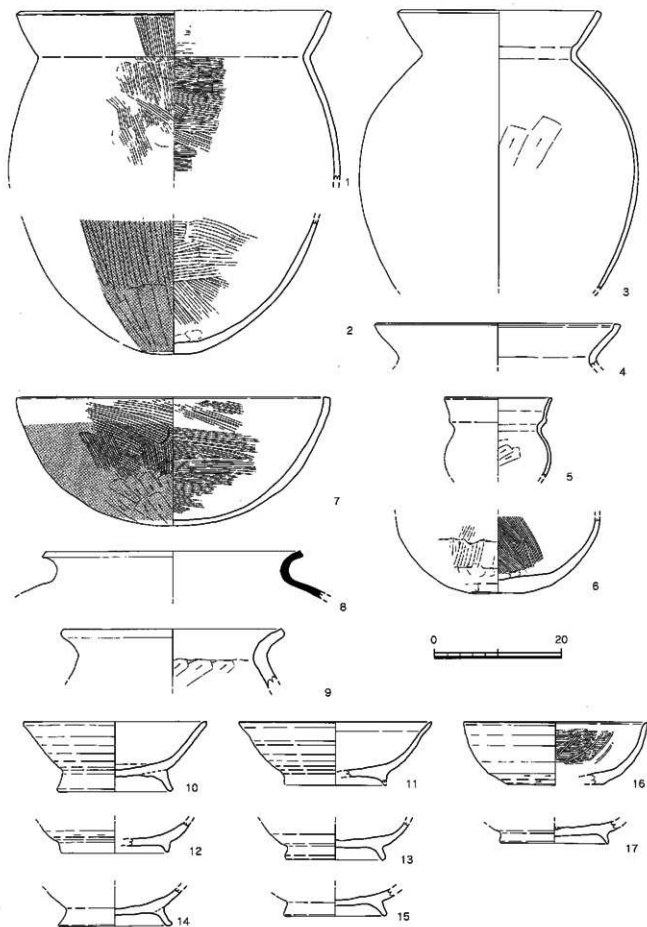
第87圖 志登松本遺跡土坑出土土器実測図 (1/3)



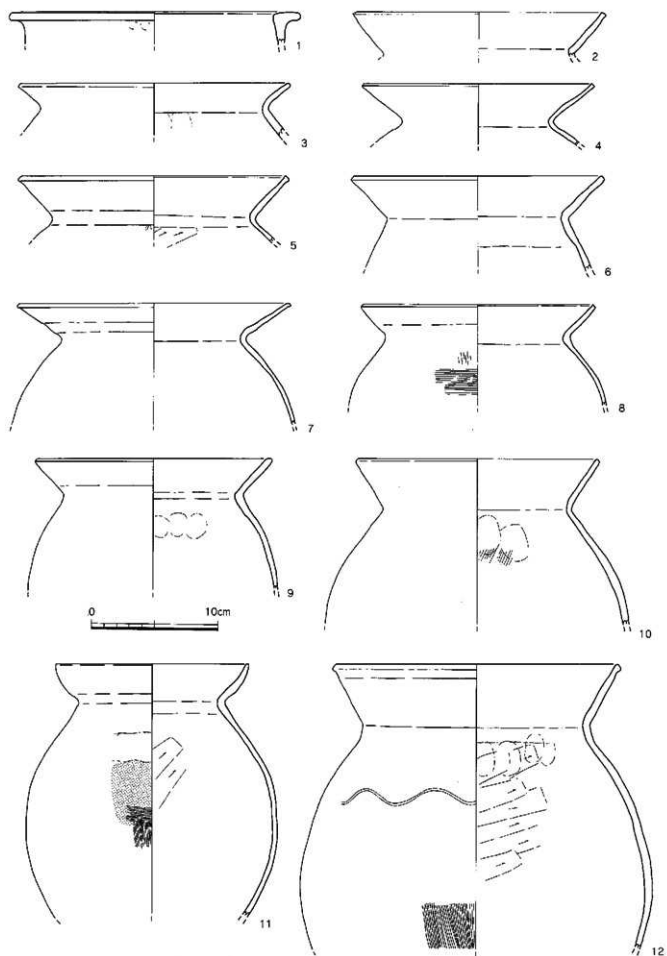
第88图 志登松本遺跡土坑出土土器 (1/3 · 1/2)、有文土器 (1/2)



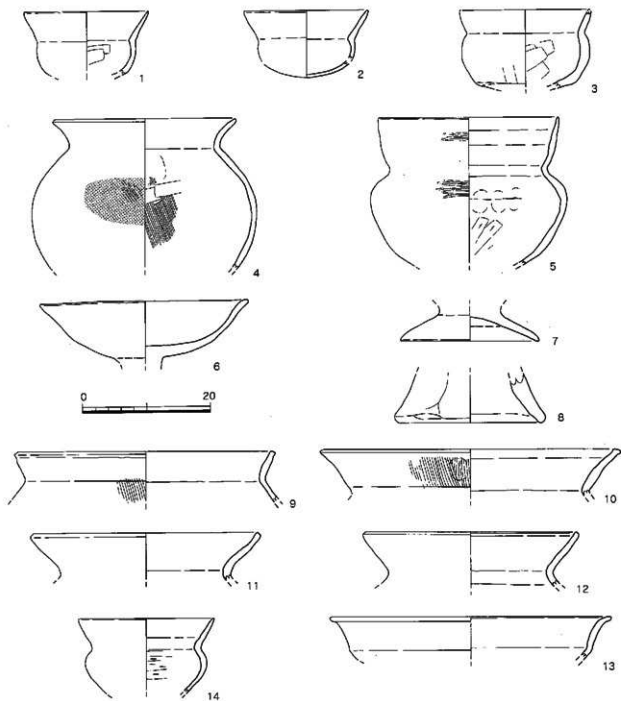
第89図 志登松本通防ピット・包舎層出土遺物1 (1/3)



第90図 志登松本遺跡ピット・包含層出土遺物2 (1/3)



第91图 志登松本通跡Ⅱ区SD01出土土器実測图 (1/3)



第92図 志登松本遺跡Ⅱ区SD-01・ビット、Ⅲ区ビット出土土器実測図 (1/3)

か。8は臺台の脚部。

(2) その他の遺物 (第92図9~14)

第92図9~14はビットや包含層から出土した遺物である。9・10は甕の口縁部でⅡ区P2出土。11・12も甕の口縁部で端部を積み上げる。13は高坏の口縁部である。11~13はⅡ区P3出土。14は小型丸底蓋。Ⅲ区P4から出土。

2. まとめ

志登松本遺跡は先述したように、集落と墳墓からなる遺跡である。ここでは、墳墓について若干の所見を述べて、まとめたい。

木棺墓と甕棺墓はⅠ区中央部に北西-南東ラインでのびる谷の埋土の上に築かれている。谷の東側は近代以降の溝により切られ、正確な規模はわからないが、幅約8mを測る。確認のため、トレンチを設定したが、埋土が砂であり、50~60cmほど下げると湧水により、壁が崩壊してしまった。

この谷の埋没時期は不明であるが、木棺墓・甕棺墓の時期から弥生時代終末期には埋没して平坦になっていたようだ。

弥生時代終末期になると木棺墓が壊かれ、その約2m離れた箇所には甕棺墓が覆られていることから、直径4mほどの墳丘あったと推測される。

この地域の弥生時代終末期の木棺墓として、潤地頭給遺跡Ⅰ区で検出された木棺墓がある(江野編2005)。潤地頭給遺跡は志登松本遺跡とは雷山川を挟んだ対岸に位置し、弥生時代終末期に碧玉・水晶を用いた玉作り工房が確認されており、玉作りとの関係が想定されている。

一方、志登松本遺跡でも、出雲の土器が搬入されており、潤地頭給遺跡同様、山陰地域との密接な関係が想定される。

潤地頭給遺跡と志登松本遺跡は伊都国王都への玄関口ともいえる箇所形成されており、弥生時代終末期~古墳時代初期にかけての時期には、さまざまな地域から人や物が集まったと考えられる。

志登松本遺跡の報告はここで終わるが、これからも継続される潤地頭給遺跡の報告の成果をもとに、弥生時代終末期~古墳時代初期の墓制について今後、検討していきたいと考えている。

【参考文献】

江野道和編 2005『潤地頭給遺跡』 前原市文化財調査報告書第89集

3. 分析

前原市志登松本遺跡出土赤色顔料の調査

比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）

弥生〜古墳時代の赤色顔料には酸化第二鉄（ Fe_2O_3 ）を主成分とするベンガラと、硫化水銀（ HgS ）を主成分とする朱が知られている。今回の対象資料は1号木棺墓頭部付近より採取されたもので、土壌中に赤色の粒子が散見される。この赤色粒子は土中に薄くばんやりと広がる部分と、1〜数mmの範囲で強く凝集する部分とが見られる。実体顕微鏡による40倍程度での観察では、特に赤色粒子が凝集する場所で、色調、彩度、光沢などが様ではなく、朱色に近い色や重厚感のある赤色、観察用の照明をよく反射する粒子とそうではないものが混在している。

次に蛍光X線分析による材質調査を行った。この方法は試料にX線を照射し、含有する各元素から発生する二次X線（特性X線）を検出器でとらえてX線エネルギーとその強度をピークとして表すものである。ここでは各顔料の主要成分、つまりベンガラであれば鉄（ Fe ）、朱であれば水銀（ Hg ）の検出により両者を判別することとなる。ただしベンガラの場合、土壌中にも多くの鉄分が含まれることから、鉄の検出のみをもってベンガラの存在を肯定することにはならず、観察や他の手法による分析など裏付けを要する。

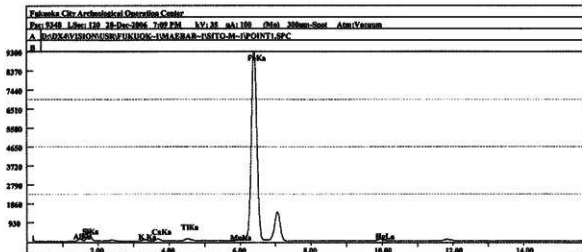
分析は資料の中から顔料を含む小土塊を取り出し、試料台にそのままの状態で置いて顔料の部分にX線が照射されるようにして行っている。今回使用した装置はエネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製/Eagle μ probe）で、X線の照射面積が

0.3mmφと細かく絞れることから、微小な顔料塊の調査に有効である。

分析の結果、非常に強い鉄（ Fe ）のピークと共に、極僅かながら水銀（ Hg ）のピークも検出された。水銀の検出は朱の存在を示すものであるが、同時に顔料の部分分析しながらも水銀が弱く鉄が強く現れることから、ベンガラも少なからず存在していることを示すものと思われる。比較のため、隣接する凝集の見られない土壌を中心とした部分も分析したが、ここではアルミニウム（ Al ）、ケイ素（ Si ）、カリウム（ K ）、カルシウム（ Ca ）といった土壌に由来すると見られる元素のピークが上昇し、相対的に鉄は低くなっているが、水銀はこの部分でも僅かながら検出されており、朱の粒子が不可視レベルで土壌中に散在しているものと考えられる。

分析結果を踏まえて実体顕微鏡観察の結果を振り返ると、粒子の不均一さがベンガラと朱の併存ということで説明されよう。つまり今回の調査範囲では、ベンガラと朱が併用されていたことが分かる。ただし、それらの詳細な使用状況（前後関係等）を知るには、遺構状況の把握、緻密なサンプリング、より複雑な調査手法などが必要であり、ここでは事実報告に止まらざるを得ない。

最後に、調査にあたり九州国立博物館志賀智史氏には、赤色顔料とその調査方法についてご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。



別冊 番号	地上座標	緯度	経度 (°E)	色 調	物 立	状況	調査状況	備 考
03-00	F-10C-10 SK-01	座	②0.6座25.5座	内:黄・外:黄・緑・暗褐色	~2mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	207と同様に、磁器穿孔孔
03-04	H-8	座	②0.8座14.4座	瓦葺灰色	~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	207と同様に、磁器穿孔孔
03-06	F-11	座	②0.0座25.2座	暗褐色	中々、瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	磁器穿孔孔
03-06	H-8	座	②11.6座25.5座	内:黄褐色・外:黄・暗褐色	~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	磁器穿孔孔
03-07	G-9	座	②10.0座30.0座	内:赤褐色・外:赤褐色	~1mの瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:赤褐色、外:不明 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
03-08	H-10	座	②7.8座24.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	磁器穿孔孔
03-09	F-9	座	②9.0座25.2座	白土褐色	~1.5mの瓦葺・石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
03-00	H-10	座	②7.0座24.8座	黄褐色	~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-00	H-14	座	②6.0座35.8座	黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-02	G-8	座	②7.6座24.3座	内:黄褐色・外:黄・黄褐色	~2mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-03	H-16	座	②7.6座35.8座	黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-04	AIV	座	②8.0座1.1座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、石瓦の瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-05	AIV+H8	座	②13.4座34.7座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦葺、石瓦の瓦葺、内瓦葺、瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-06	G-8	座	②7.1座24.6座	黄褐色	~1mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-07	F-10	座	②6.6座30.2座	内:赤色・外:赤褐色	~1mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔、内瓦葺
04-08	F-10	座	②0.4座30.2座	内:暗褐色・外:暗褐色	瓦、石瓦、黄褐色を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-09	H-13	座	②5.2座35.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-10	G-9	座	②10.0座10.3座	黄褐色	~1mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-21	SS-01	座	②6.6座37.3座	内:黄褐色・外:黄褐色	~1.5mの瓦葺・石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-22	F-11	座	②10.0座24.8座	内:暗褐色・外:暗褐色	中々、瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-23	F-10	座	②10.0座24.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦、黄褐色を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-24	H-8	座	②12.2座25.5座	内:黄褐色・外:黄褐色	~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-28	F-8	座	②9.8座24.2座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1mの瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-28	H-14	座	②8.0座30.8座	黄褐色	~1mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-29	H-16	座	②8.0座35.8座	内:黄褐色・外:黄褐色・黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
04-30	H-8	座	②8.0座30.8座	内:暗褐色・外:黄褐色	~1mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
05-01	AH	座	②7.8座24.5座	黄褐色	瓦、~1mの石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
05-05	H-10	座	②8.8座24.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	黄褐色を含む	中々	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
05-21	H-13	座	②6.4座23.2座	内:黄褐色・外:黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔、二次焼成済
05-22	H-5	座	②6.6座32.3座	内:黄褐色・外:黄褐色	~1mの瓦葺、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	磁器穿孔孔
05-23	G-8	座	②11.2座14.0座	黄褐色	~2mの瓦葺、石瓦、黄褐色を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	446と同様
79-1	SK-01	座	②20.4座30.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.2mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1.2mの石瓦、石瓦を含む	
79-2	SE-01	座	②7.4座	内:赤褐色・外:赤褐色	瓦、~1mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-3	SE-01	座	②9.2座	内:赤褐色・外:赤褐色	瓦、~1mの石瓦を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-4	SE-01	座	②6.3座	内:赤褐色・外:赤褐色	瓦、~1mの瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-5	SE-01	座	②6.1座	内:赤褐色・外:赤褐色	瓦、~1mの瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-6	SE-01	座	②6.0座	内:赤褐色・外:赤褐色	瓦、~1mの瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-7	SE-01	座	②11.3座14.7座	黄褐色	瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-8	SE-01	座	②11.1座15.5座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-9	SK-01	座	②15.8座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦葺、瓦葺の瓦葺を含む	良好	内:瓦葺、外:石瓦、~0.7m、 外:~1mの瓦葺を含む	
79-10	SK-03	座	②15.0座32.2座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明(不明)	
79-11	SK-03	座	②7.7座35.5座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦葺、瓦葺の瓦葺を含む	良好	内:不明	
79-12	SK-04	座	②8.8座24.3座	内:黄褐色・外:黄褐色	中々、~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:不明、外:不明(不明)	
79-13	SK-05	座	②8.5座23.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	中々、~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:不明、外:不明	
79-14	SK-05	座	②8.5座23.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	中々、~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:不明、外:不明	
79-15	SK-06	座	②7.0座29.2座	内:黄褐色・外:黄褐色	中々、~2mの石瓦、石瓦を中等多く含む	良好	内:不明、外:不明	
79-16	SK-07	座	②41.2座36.8座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-17	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-18	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-19	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-20	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-21	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-22	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-23	SK-07	座	②3.6座36.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-24	SK-08	座	②4.7座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
79-25	SK-09	座	②16.0座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	
80-1	P-11	座	②4.7座17.3座	内:黄褐色・外:黄褐色	瓦、~1.5mの石瓦、石瓦を含む	良好	内:不明、外:不明	

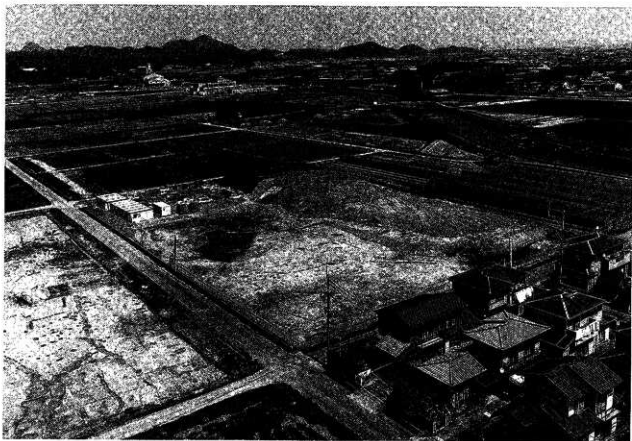
種別	性別	年齢	身長	体重	体高	乳 歯			乳 牙			乳 歯 - 歯 肉			乳歯の歯肉	乳歯について	穿孔方向	穿孔方法	備 考
						乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯	乳 歯					
59-08	雄	C-6	07	歳	1200			0.6	1.3	9月	穿孔の歯肉	穿孔の歯肉	穿孔の歯肉	穿孔の歯肉	V	穿孔	穿孔	B	
59-09	雄	C-6	08	歳	1200	1.0x1.0	1.0x1.0	1.0x1.0											
59-41	雄	SS-01	1	歳	一歳児	2.3x2.5	3.0x2.5	3.0x2.5			歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着	歯肉に付着
59-42	雄	C-6	1	歳	1200	2	3.6x3.5	1.0x1.3			穿孔	穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B	歯肉は穿孔によるものと思われる
59-43	雄	C-6	1	歳	一歳児	1.0	2.7	2.6			歯肉に付着	穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B	
59-44	雄	C-6	1.5	歳	1200		2.9x1.6	3x1.7											
59-45	雄	F-8	0.5	歳	1200						歯肉を穿く								
59-46	雄	F-10	0.0	歳	1200		3	4.4			歯肉を穿く	穿孔	穿孔	穿孔	穿孔	穿孔	穿孔	C	
59-47	雄	F-9	0.5	歳	1200	2.8x3.5	2.8x3.8	3.2x3.3			歯肉を穿く	穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	A	
59-48	雄	F-9	0.0	歳	1200														
59-49	雄	SS-01	0.5	歳	1200						歯肉に付着								
59-50	雄	F-9	0.0	歳	1200														
59-71	雄	SS-01	0.75	歳	1200	1.4	2.2	0.7x1.3			歯肉を穿く	穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B	穿孔は穿孔によるものと思われる
59-72	雄	F-11	1.2	歳	1200		1.0x1.0				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	F		
59-73	雄	C-6	1.2	歳	1400														
59-74	雄	C-6	2.1	歳	1400														
59-75	雄	F-8	1.3	歳	1200	1.0x1.3	4.0x4	1.0x1.4			歯肉を穿く				V	穿孔			
59-76	雄	F-14	1.4	歳	1200										V	穿孔			
59-77	雄	F-10	1	歳	1200	3.2	5	3.0			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-78	雄	F-8	1	歳	1200		0.5 (歯)				歯肉を穿く				V	穿孔			
59-79	雄	C-6	0.9	歳	1100														
59-80	雄	F-11	0.0	歳	1200		2.7x2.7				歯肉を穿く	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-81	雄	C-6	1	歳	1200			1.1 (歯)											
59-82	雄	SS-01	1	歳	1200	3.4 (歯)					穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-83	雄	F-11	0.7	歳	1200	3.4x3.5	3.0x2.7	3.0x2.6			歯肉に付着	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		歯肉は穿孔によるものと思われる
59-84	雄	F-8	1.2	歳	1200		4.8 (歯)				歯肉を穿く	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-85	雄	C-7	0.8	歳	1200		0.8x0.1				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-86	雄	C-6	1	歳	1200	2.6x1.0	4.2x2.2	2.0x1.5			歯肉を穿く	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-87	雄	F-10	0.7	歳	1200		2.2x1.1 (歯)				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-88	雄	C-6	1.5	歳	1400						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-89	雄	F-9	0.7	歳	1200		6.0 (歯)												
59-90	雄	SS-01	0.5	歳	1200		2.7x2.9	2.1x1.9			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-91	雄	F-10	0.9	歳	1200		3.8 (歯)				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-92	雄	SS-01	0.75	歳	1200	1.3	12.1	1.0			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-93	雄	C-10	0.5	歳	1400						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-94	雄	C-15	0.5	歳	1500						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-95	雄	SS-01	0.5	歳	1400						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-96	雄	C-6	0.7	歳	1200	1.9x1.5	2.5x1.7	2.0x1.7 (歯)			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-97	雄	C-10	0.9	歳	1200	2.0x1.5	2.4x4	2.3x1.5			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-98	雄	F-9	0.9	歳	1400		4 (歯)				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-99	雄	SS-01	0.9	歳	1200		4.4 (歯)				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-100	雄	SS-01	0.6	歳	1200		4 (歯)	3 (歯)			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-101	雄	C-6	0.5	歳	1400						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-102	雄	C-6	0.5	歳	1400			0.7											
59-103	雄	SS-01	0.6	歳	1200						穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-104	雄	SS-01	0.9	歳	1400		1x1.3 (歯)				穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-105	雄	F-14	0.8	歳	1400		4.0 (歯)	4.0 (歯)			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-106	雄	C-9	0.4	歳	1050														
59-107	雄	C-10	0.7	歳	1400	1.6	1.8x3.2	2.2			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-108	雄	F-6	0.7	歳	1050	1.3x1.4	3.3	1.8x1.8			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-109	雄	SS-01	0.5	歳	1200		2.7x1.3	1.3x2.4			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-110	雄	E-9	0.4	歳	1400	1.4x2.2	1.7x2.9	1.4x2.8			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-111	雄	SS-01	0.6	歳	1400		2.5	2.1			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-112	雄	F-11	0.6	歳	1400		4.2	4.4			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-113	雄	SS-01	0.5	歳	1400	0.9x0.7	2.2 (歯)	0.8 (歯)			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-114	雄	E-8	0.4	歳	1400	1.3x1.1	1.7x1.1	1.9x1.1			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-115	雄	F-10	0.5	歳	1400		1.2x1.4	1.2x1.4			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	B		
59-116	雄	F-8	1.6	歳	1400		3	3.5			穿孔	穿孔	穿孔	V	穿孔	穿孔	C		

探尺番号	探尺種別	探尺径	探尺長さ	探尺形状	探尺径	孔深・傾斜		孔深	傾斜	孔深について	探尺方向	探尺方法	備考
						傾斜	傾斜						
61-175	鋼	G-10	0.9	鋼	1200			2.1 (0)	0°	0°	探尺あり	B	
61-176	鋼	SS-01	0.6	鋼	1200	2 (0)		2 (0)	0°	0°	探尺あり	B	
61-177	鋼	A3	1	鋼	1200	2.2	3.0	1.6 (0)	0°	0°	探尺あり	B	
61-178	鋼	F-7	0.6	鋼	1200			1.2 (0)	2.2 (0)	0°	0°	B	
61-179	鋼	F-10	0.5	鋼	1200			1.0 (0)	1.0 (0)	0°	0°	B	
61-180	鋼	S-8	0.7	鋼	1200	1.5	2.0	2.1	0°	0°	探尺あり	B	
61-181	鋼	SS-01	0.7	鋼	1200					0°	0°	B	
61-182	鋼	G-8	0.9	鋼	1200					0°	0°	B	
61-183	鋼	A3	0.6	鋼	1200			2.3	2	0°	0°	C	
61-184	鋼	F-8	1.3	鋼	1200			1.5	2	0°	0°	B	
61-185	鋼	H-14	0.8	鋼	1200			4.2 (0)		0°	0°	B	
61-186	鋼	SS-01	0.9	鋼	1200					0°	0°	B	
61-187	鋼	H-8	0.9	鋼	1200			2.8 (0)	2.8 (0)	0°	0°	B	
61-188	鋼	A3	0.9	鋼	1200	2.4 (0)	2.2 (0)	3.8 (0)	0°	0°	B		
61-189	鋼	SS-01	0.5	鋼	1200					0°	0°	B	
61-190	鋼	F-9	0.9	鋼	1200	0.27 (0)				0°	0°	B	
61-191	鋼	F-8	0.9	鋼	1200	1.4 (0)	1.9	0.8		0°	0°	B	
61-192	鋼	SS-01	0.9	鋼	1200	1.9	2.4	3.8	0.3	0°	0°	B	
61-193	鋼	S35C	0.6	鋼	1200	3.0	4.5	3.7	2.8	0°	0°	B	
61-194	鋼	F-8	0.8	鋼	1200	2	3.8			0°	0°	B	
61-195	鋼	F-11	0.9	鋼	1200	2	3			0°	0°	B	
61-196	鋼	H-16	0.8	鋼	1200	8				0°	0°	B	
61-197	鋼	G-0	1	鋼	1200					0°	0°	B	
61-198	鋼	H-16	0.6	鋼	1200	4.6	4.6	5.1	0°	0°	探尺あり	B	
61-199	鋼	F-9	0.9	鋼	1200	4.6	4.6	5	0°	0°	探尺あり	B	
61-200	鋼	H-16	0.6	鋼	1200	2.5	2.7	3.2	0°	0°	探尺あり	B	
61-201	鋼	S-14	0.7	鋼	1200	3.5	3.9		0°	0°	探尺あり	B	
61-202	鋼	G-8	0.7	鋼	1200					0°	0°	B	
61-203	鋼	H-16	1	鋼	1200					0°	0°	B	
61-204	鋼	A3	1	鋼	1200					0°	0°	B	
61-205	鋼	F-8	0.5	鋼	1200	8				0°	0°	B	
61-206	鋼	G-8	0.7	鋼	1200					0°	0°	B	
61-207	鋼	G-10	0.9	鋼	1200	1.6	1.6	3	0°	0°	探尺あり	B	
61-208	鋼	F-10	0.4	鋼	1200					0°	0°	B	
61-209	鋼	H-13	1.1	鋼	1200					0°	0°	B	
61-210	鋼	G-9	1.1	鋼	1200	1.9	3.0			0°	0°	B	
61-211	鋼	SS-01	0.5	鋼	1200					0°	0°	B	
61-212	鋼	F-11	0.6	鋼	1200					0°	0°	B	
61-213	鋼	F-10	0.5	鋼	1200					0°	0°	B	
61-214	鋼	F-8	0.8	鋼	1200	4.8				0°	0°	B	
61-215	鋼	F-8	0.9	鋼	1200					0°	0°	B	
61-216	鋼	H-14	0.6	鋼	1200					0°	0°	B	
61-217	鋼	H-16	1.1	鋼	1200	1.6	4.4	2.1	0°	0°	探尺あり	C	
61-218	鋼	F-8	1.1	鋼	1200					0°	0°	B	
61-219	鋼	A3	0.9	鋼	1200					0°	0°	B	
61-220	鋼	H-10	0.5	鋼	1200					0°	0°	B	
61-221	鋼	H-13	0.5	鋼	1200	2.6				0°	0°	B	
61-222	鋼	H-16	0.9	鋼	1200					0°	0°	B	
61-223	鋼	G-8	0.6	鋼	1200					0°	0°	C	



版 图

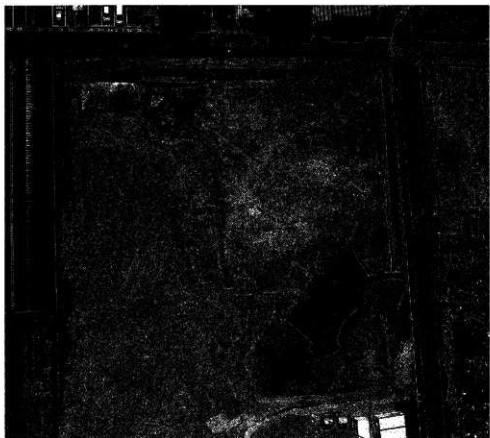
図版 1



1-1 瀬地頭給遺跡から志登支石墓を望む (南西から)



1-2 III-E・IV区全体写真 (西から)

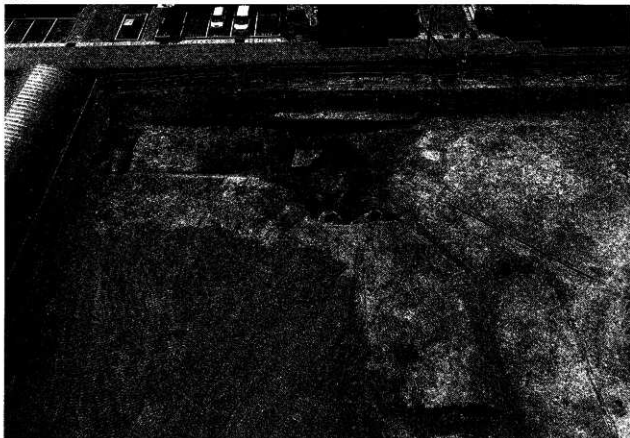


2-1 IV区全体写真 (真上から)



2-2 調査区北側部分全体写真 (真上から)

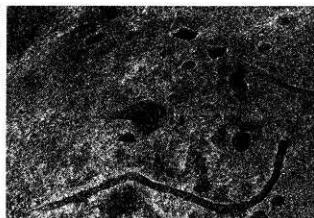
図版3



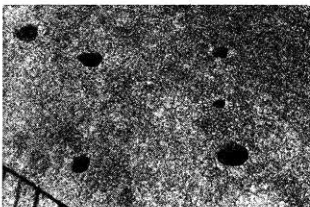
3-1 調査区南側部分全体写真 (真上から)



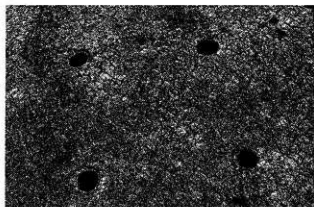
3-2 1号住居遺構 (南西から)



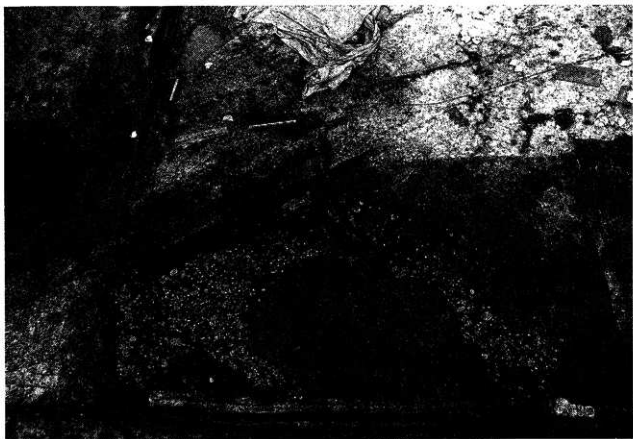
3-3 1号住居近景 (南西から)



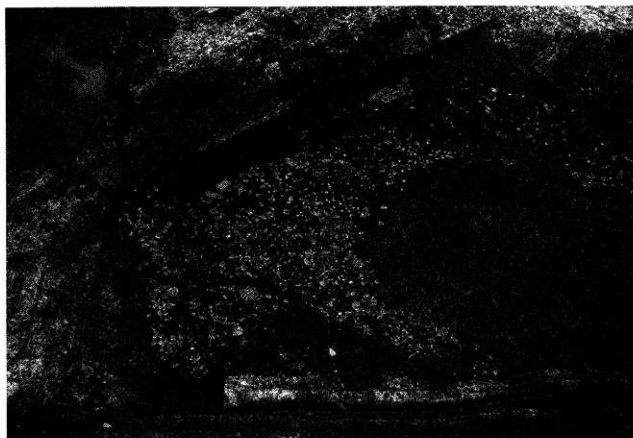
3-4 1号掘立柱建物 (南から)



3-5 2号掘立柱建物 (南から)

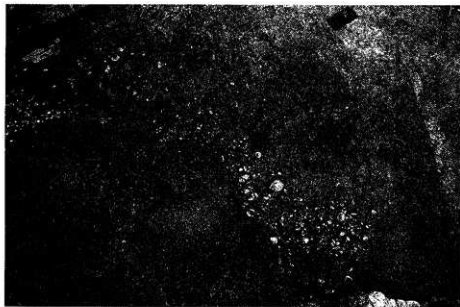


4-1 大溝・落ち込み土器出土状況通景（真上から）



4-2 大溝・落ち込み土器出土状況近景①（真上から）

図版5



5-1 大溝・落ち込み土層
出土状況近景② (真上から)



5-2 大溝完掘状況①
(西から)



5-3 大溝完掘状況②
(東から)

6-1 大淵土層断面状況
(東から)



6-2 落ち込み土層断面状況
(東から)



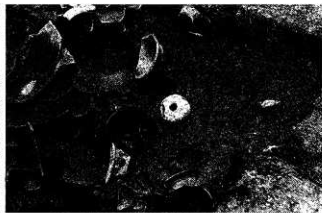
6-3 Aトレンチ土層断面
状況 (南西から)



図版7



7-1 落ち込み遺物出土状況①(北から)



7-2 落ち込み遺物出土状況②(北東から)



7-3 落ち込み遺物出土状況③(北から)



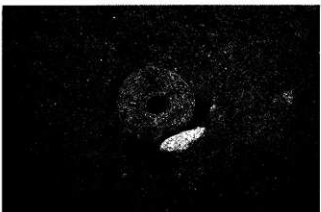
7-4 落ち込み遺物出土状況④(西から)



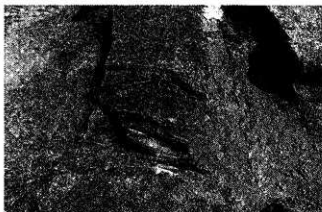
7-5 落ち込み遺物出土状況⑤(北から)



7-6 落ち込み遺物出土状況⑥(北西から)



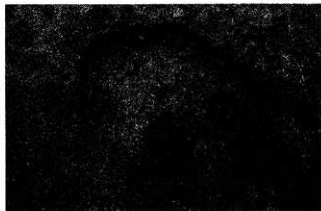
7-7 落ち込み遺物出土状況⑦(北から)



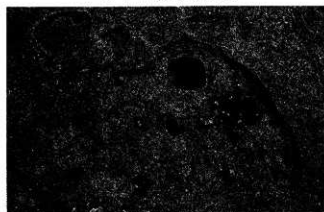
7-8 大溝取水口状況(北から)



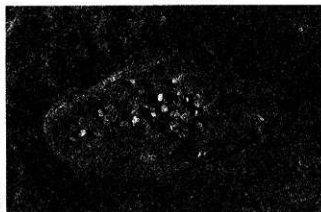
8-1 1号土坑 (北から)



8-2 2号土坑 (北から)



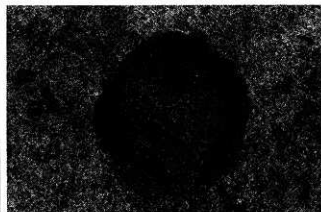
8-3 3号土坑 (北から)



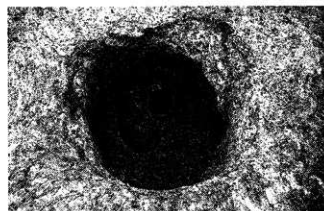
8-4 5号土坑 (北から)



8-5 6号土坑 (北から)



8-6 11号ピット (北から)



8-7 1号井戸 (北から)



8-8 調査区東側谷トレンチ (東から)

図版9



6-1



6-2



6-4



6-8



6-9



6-10



7-12



7-13



10-3



10-4



10-5



10-6



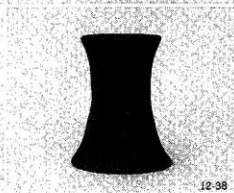
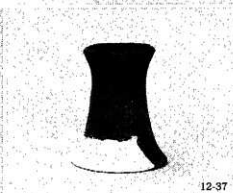
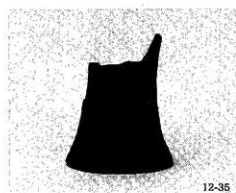
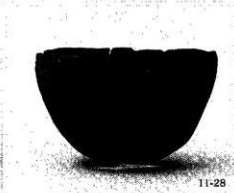
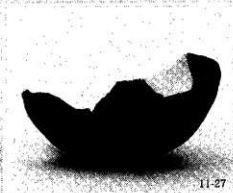
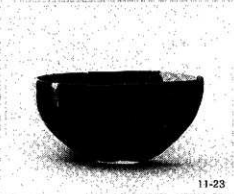
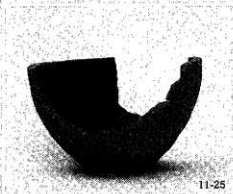
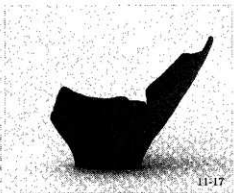
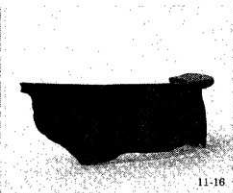
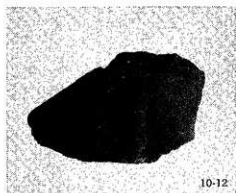
10-7



10-8



10-10



図版11



16-4



16-5



16-6



16-8



16-12



17-16



17-18



17-22



18-1 (上)



18-2



18-3



18-1 (下)



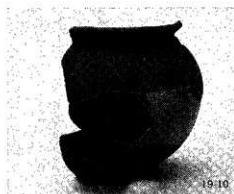
18-6



19-9



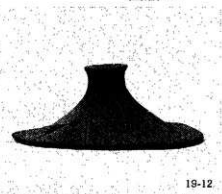
19-11



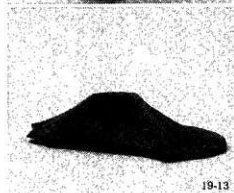
19-10



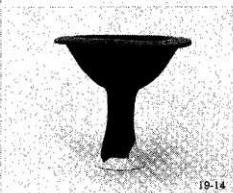
19-10 (穿孔)



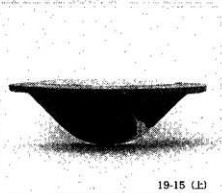
19-12



19-13



19-14



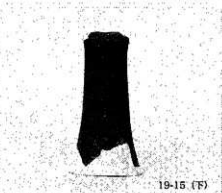
19-15 (上)



20-25



20-26



19-15 (下)



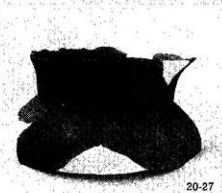
20-17



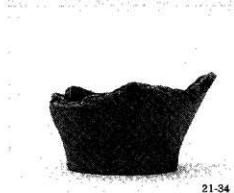
20-20



20-21



20-27



21-34



21-35



21-36

图版13



21-37



21-39



21-40



21-41



21-42



21-43



22-46



22-47



22-48



22-49



22-50



23-52



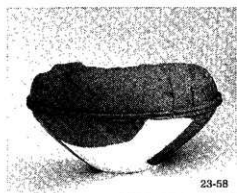
23-54



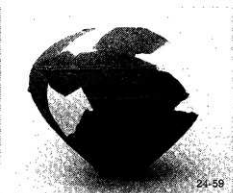
23-56



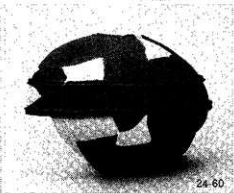
23-57



23-58



24-59



24-60



24-61



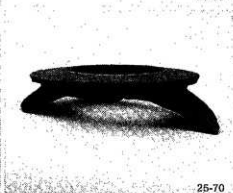
25-63



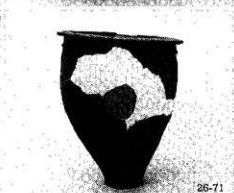
25-65



25-68



25-70



25-71



26-73



26-74



27-77



27-78



27-79



27-81

图版15



27-82



28-84



28-85



28-86



28-87



28-88



28-89



29-90



29-91



29-92



29-95(内面)



29-98



30-100



30-101



30-103



30-105



30-106



30-107



31-112



31-113



31-114



31-115



31-117



31-118



31-120



30-111



31-126



31-127



32-128



32-130

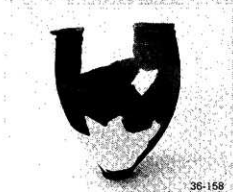
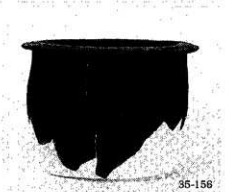
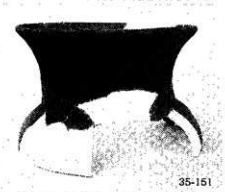
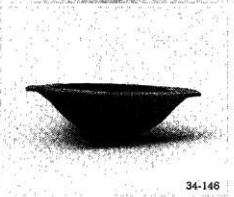
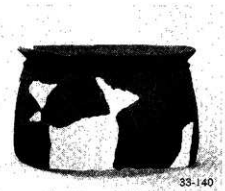
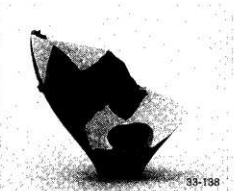
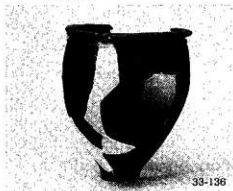


32-131



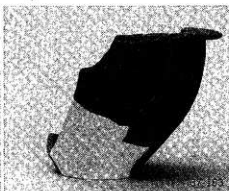
32-134

圖版17





36-162



37-163



37-164



37-168



37-173



37-175



38-178



38-181



38-183



38-184



39-191



39-193



39-194



40-196



40-198



40-197 (上)



40-200



40-203



40-198 (下)



41-205



41-205



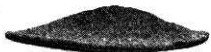
41-206



41-207



41-208



41-210



41-210



41-211



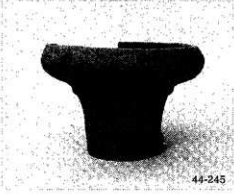
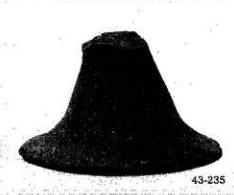
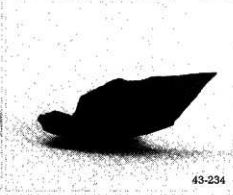
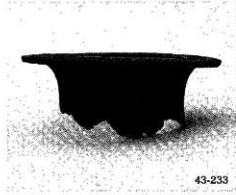
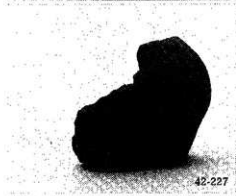
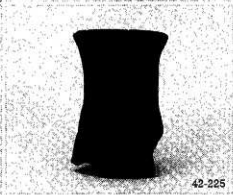
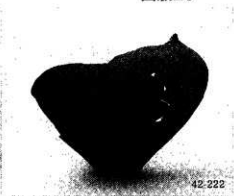
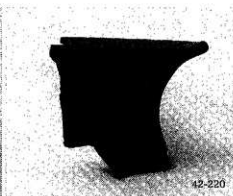
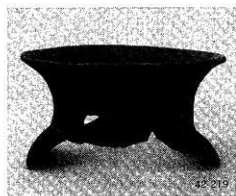
41-212



41-214



41-216



図版21



44-247



45-2



45-3



45-4



46-2



46-3



47-1



47-2



47-4



47-4底部穿孔



47-4底部穿孔



47-4底部穿孔



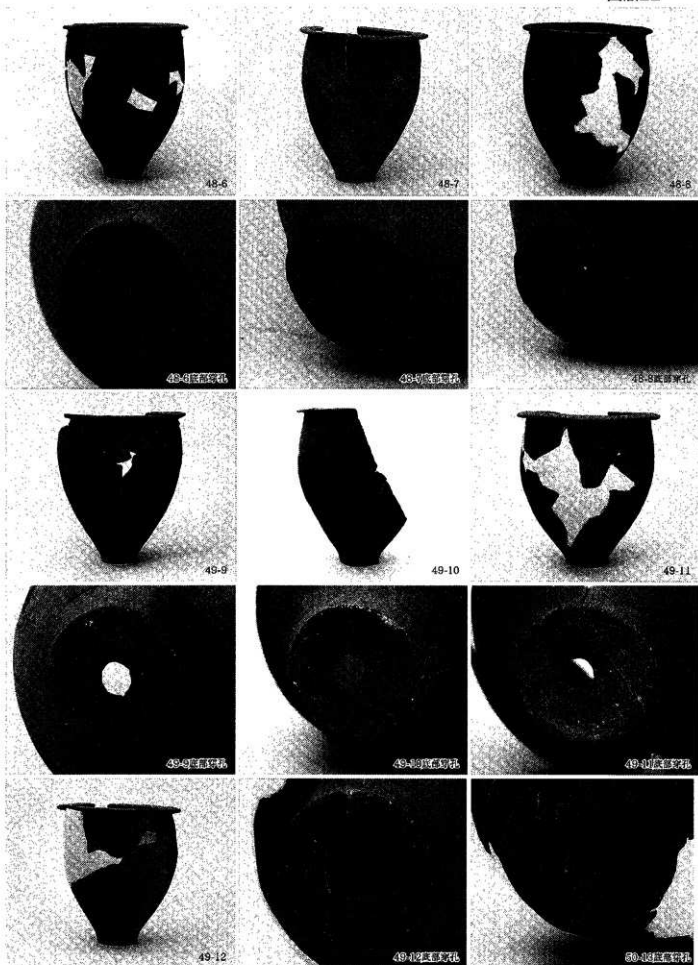
47-4底部穿孔



48-5



48-5底部穿孔



大溝・落ち込み出土底部穿孔土器②



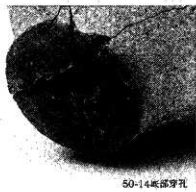
50-14



50-15



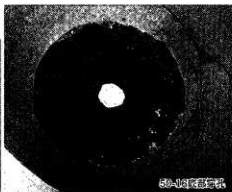
50-16



50-14底面穿孔



50-15底面穿孔



50-16底面穿孔



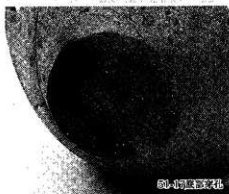
51-17



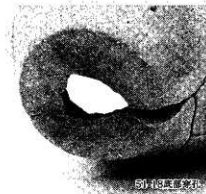
51-18



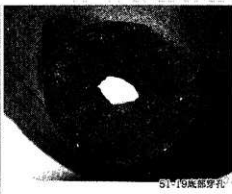
51-19



51-17底面穿孔



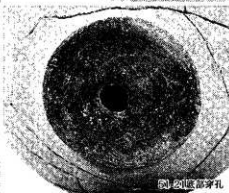
51-18底面穿孔



51-19底面穿孔



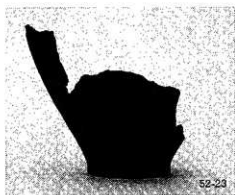
51-21



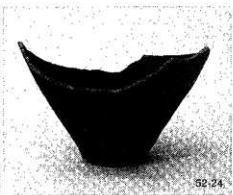
51-20底面穿孔



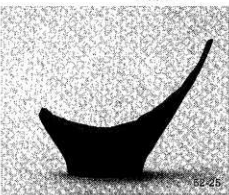
51-20底面穿孔



52-23



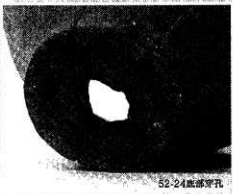
52-24



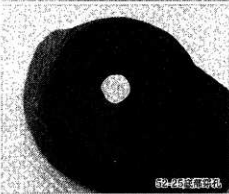
52-25



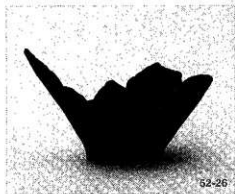
52-23底部穿孔



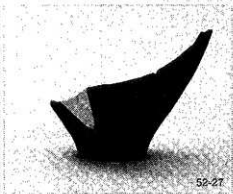
52-24底部穿孔



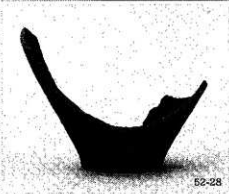
52-25底部穿孔



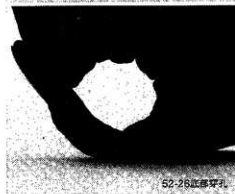
52-26



52-27



52-28



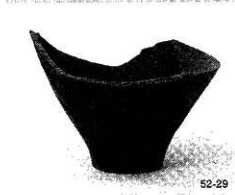
52-26底部穿孔



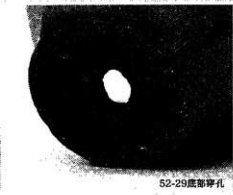
52-27底部穿孔



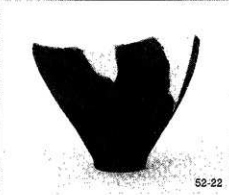
52-28底部穿孔



52-29



52-29底部穿孔



52-22



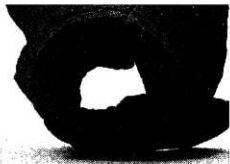
53-32



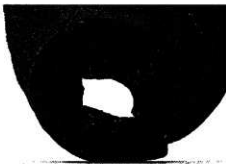
53-34



53-35



53-32底部穿孔



53-34底部穿孔



53-35底部穿孔



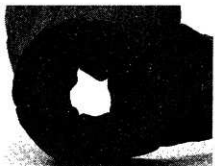
53-36



53-37



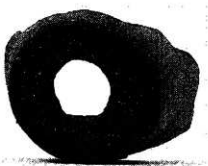
53-38



53-36底部穿孔



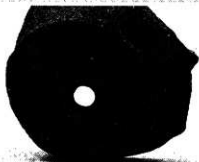
53-37底部穿孔



53-38底部穿孔



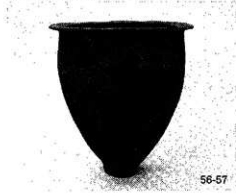
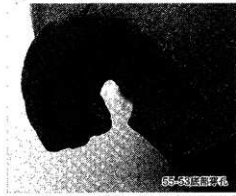
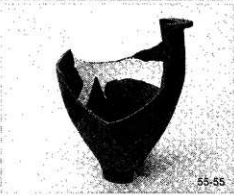
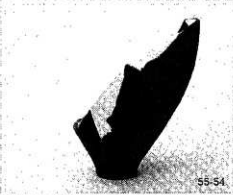
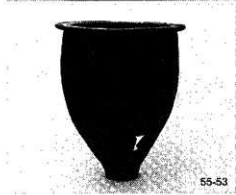
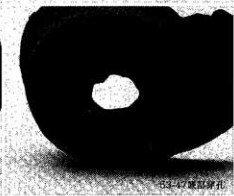
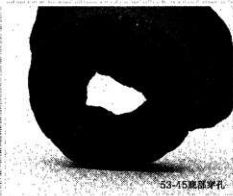
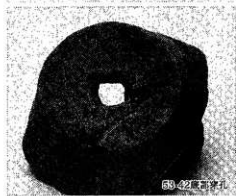
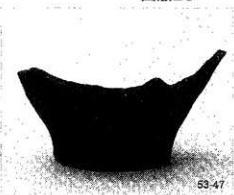
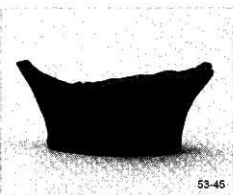
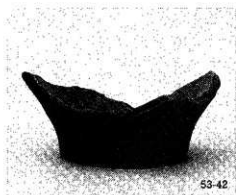
53-41



53-41底部穿孔



53-40底部穿孔



图版27



56-58



56-62



56-61



56-58底部穿孔



56-62底部穿孔



56-61底部穿孔



56-63



58-81



58-86



56-63底部穿孔



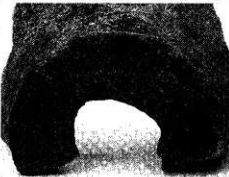
58-81底部穿孔



58-86底部穿孔



57-87



57-77底部穿孔



58-83



58-97



59-108



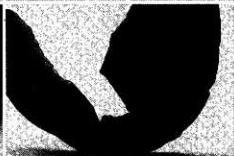
59-110



58-97底部穿孔



59-108底部穿孔



59-110底部穿孔



59-111



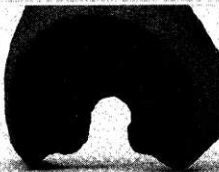
60-142



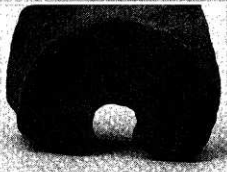
62-183



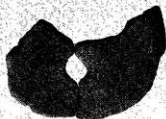
59-111底部穿孔



60-142底部穿孔



62-183底部穿孔



62-186底部穿孔

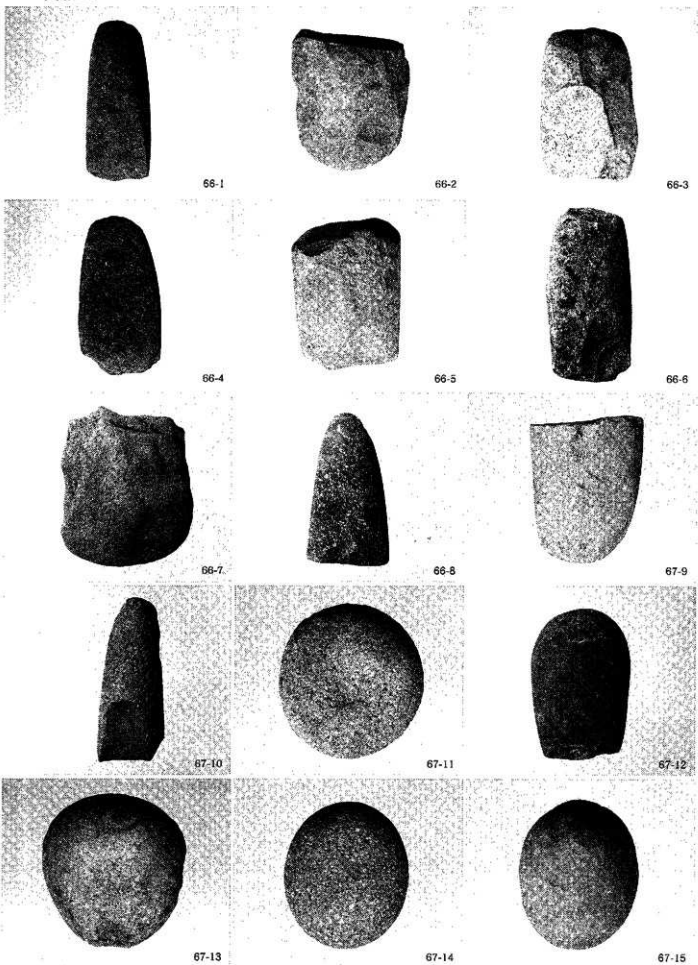


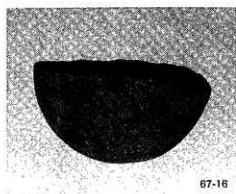
63-192



63-192底部穿孔

図版29

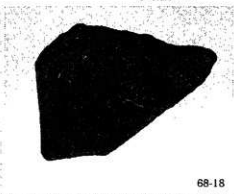




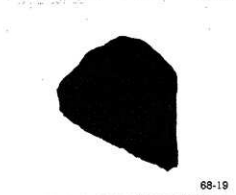
67-16



68-17



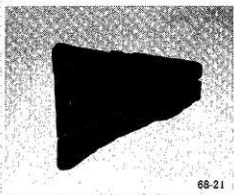
68-18



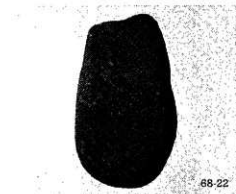
68-19



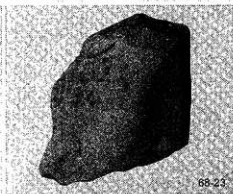
68-20



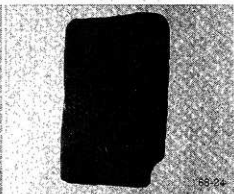
68-21



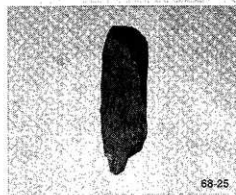
68-22



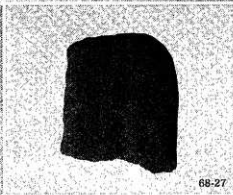
68-23



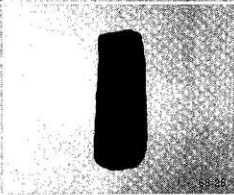
68-24



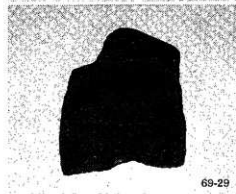
68-25



68-27



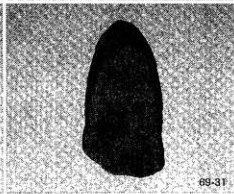
68-26



68-29



68-30



68-31

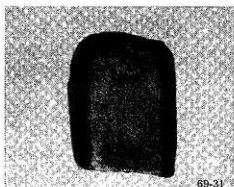
図版31



69-33



69-34



69-31



69-35



69-36



69-37



69-38



69-39



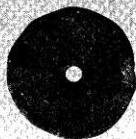
69-40



69-42



69-41



69-43



69-44



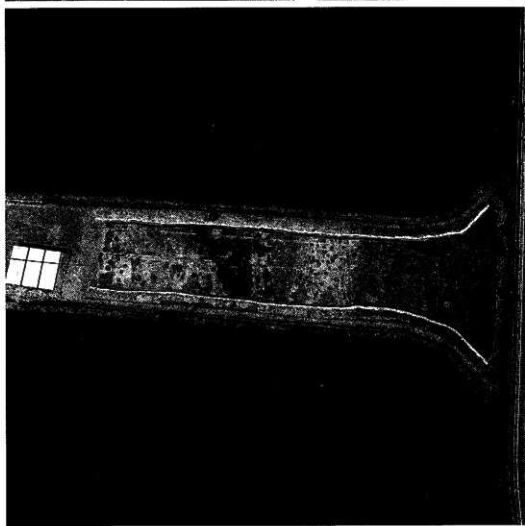
70-45



71-1

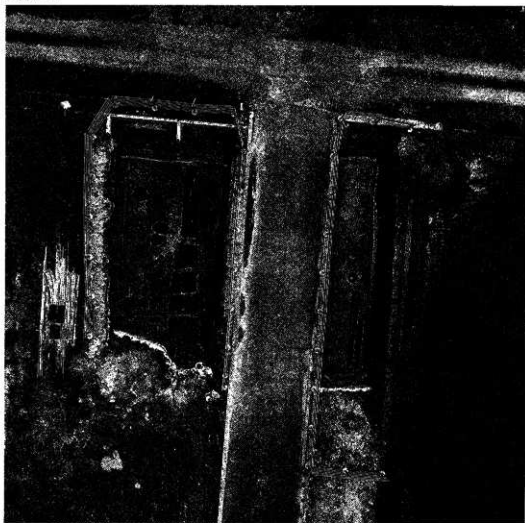


志登松本通跡全景



I区全景

图版33



Ⅱ·Ⅲ区全景

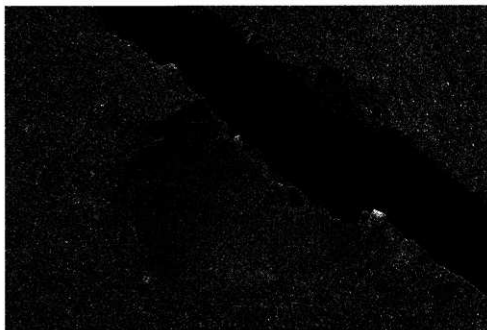


Ⅰ区7号土坑

图版34



I 区木柩墓全景

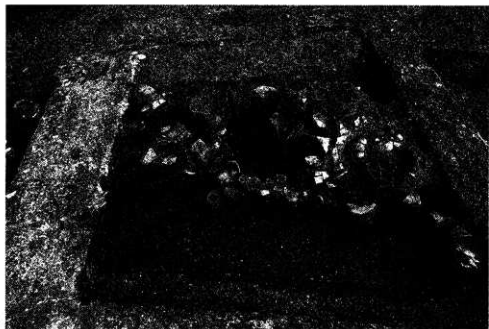


I 区墓棺墓

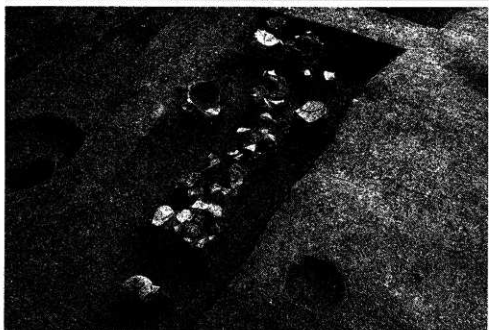


II 区全景

图版35



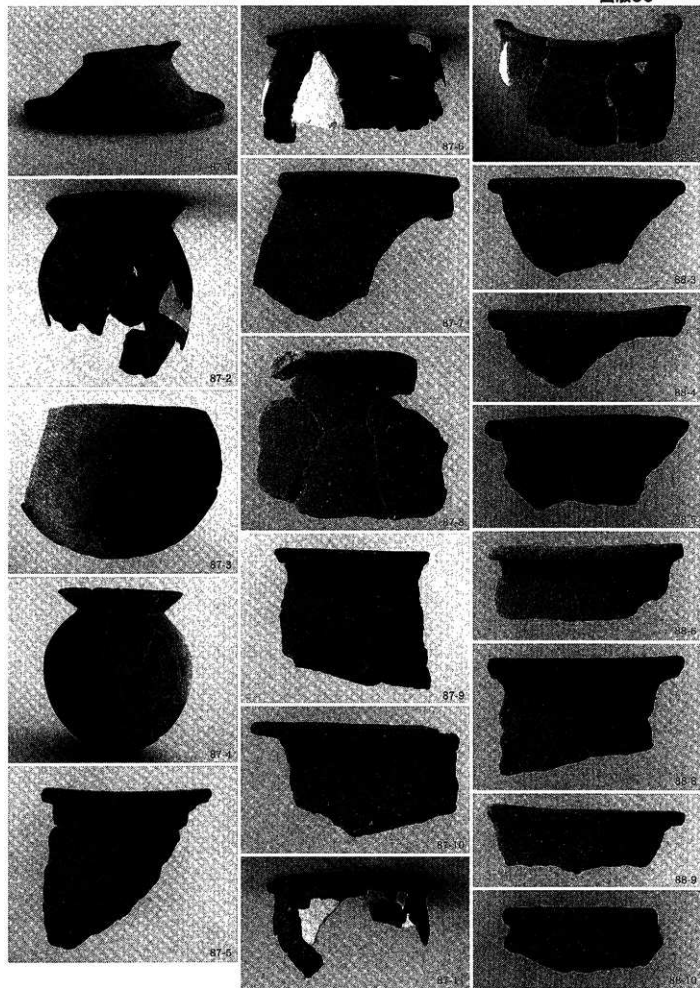
Ⅱ区1号满道物出土状况①



Ⅱ区1号满道物出土状况②

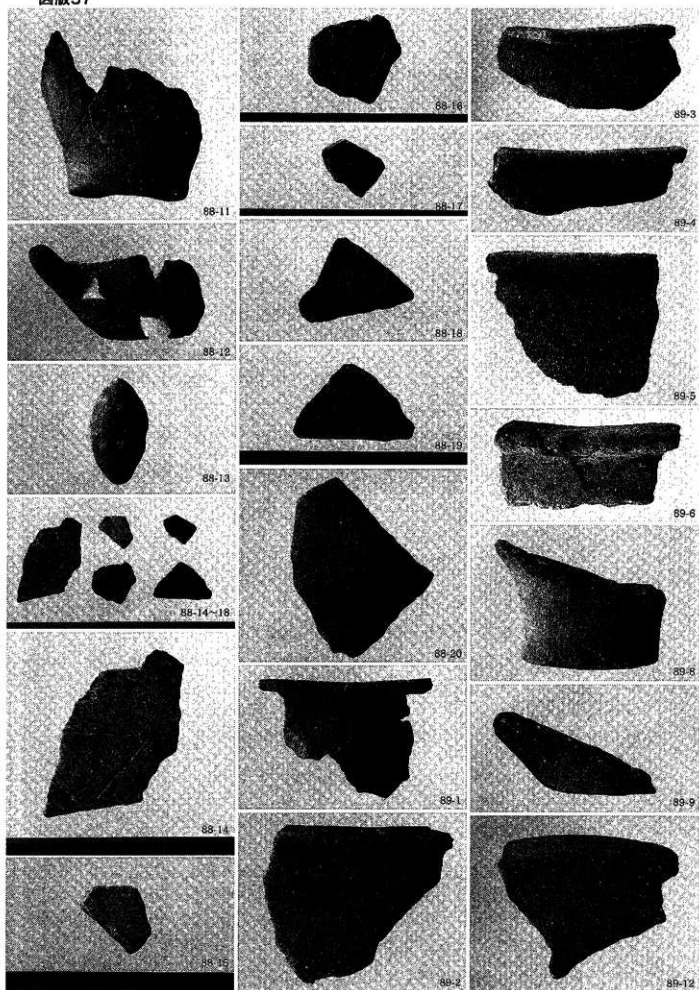


Ⅲ区全景

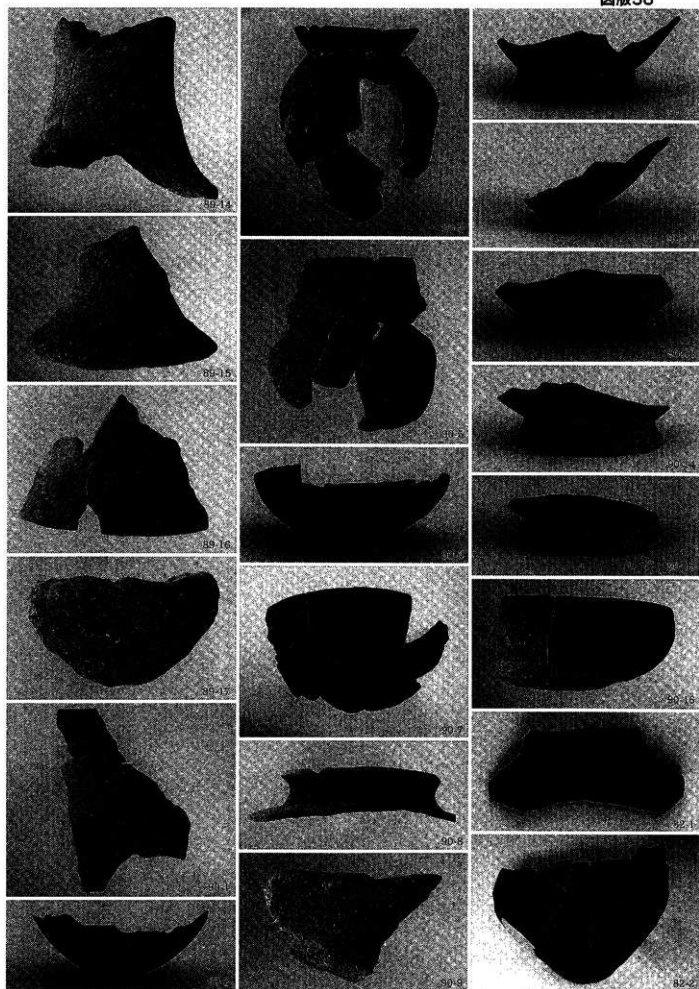


I 区土坑出土遗物 1

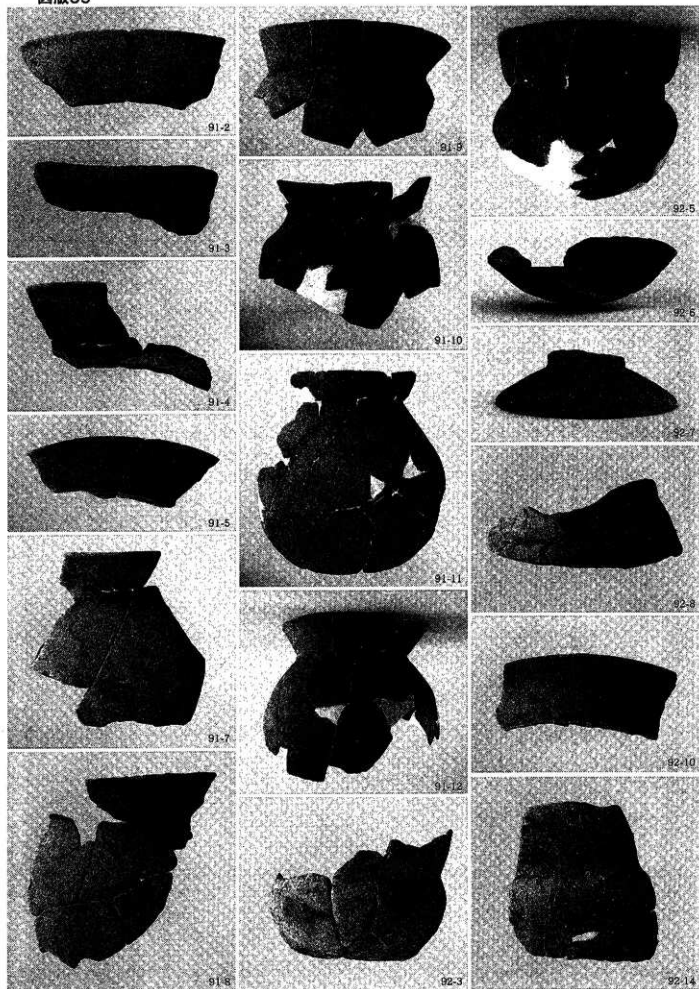
図版37



I 区土坑出土遺物2・ビット・包含層出土遺物1



I区ビット・包含層出土遺物2・墓棺



報告書抄録

ふりがな	うるうじとうきゅういせき							
書名	潤地頭給遺跡II							
副書名	福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	前原市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第96集							
著者名	江崎靖隆 平尾和久 田中裕夫							
編集機関	前原市教育委員会							
所在地	〒818-1192 福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
発行年月日	西暦2007年3月31日							
保管場所	〔写真〕〔図版〕〔遺物〕		前原市教育委員会					
保管場所所在地	福岡県前原市前原西一丁目8番14号							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
潤地頭給遺跡 IV区	福岡県前原市 大字潤字地頭給	40222		33° 33' 51" ~33° 52'	130° 13' 13" ~03'	2003.1~ 2004.3	2,949㎡	小学校建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
潤地頭給遺跡 IV区	集落	弥生時代、 古墳時代前~ 中期	溝、独立柱建物、土坑、溝 込み、井戸		弥生土器、石剣、石器丁、石 斧、投擲、土甕、石鏝、紡錘 車、土師器			
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
志登松本遺跡	福岡県前原市 大字志登字松本	40222		33° 33' 50"	130° 13' 40"	2003.5.1~ 2003.6.30	685㎡	遺跡新設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
志登松本遺跡	集落	弥生時代中期 後期 古墳時代前期 平安時代	溝、独立柱建物、土坑、 木棺墓、甕棺墓		弥生土器、土師器、 小玉、勾玉			

潤地頭給遺跡 II

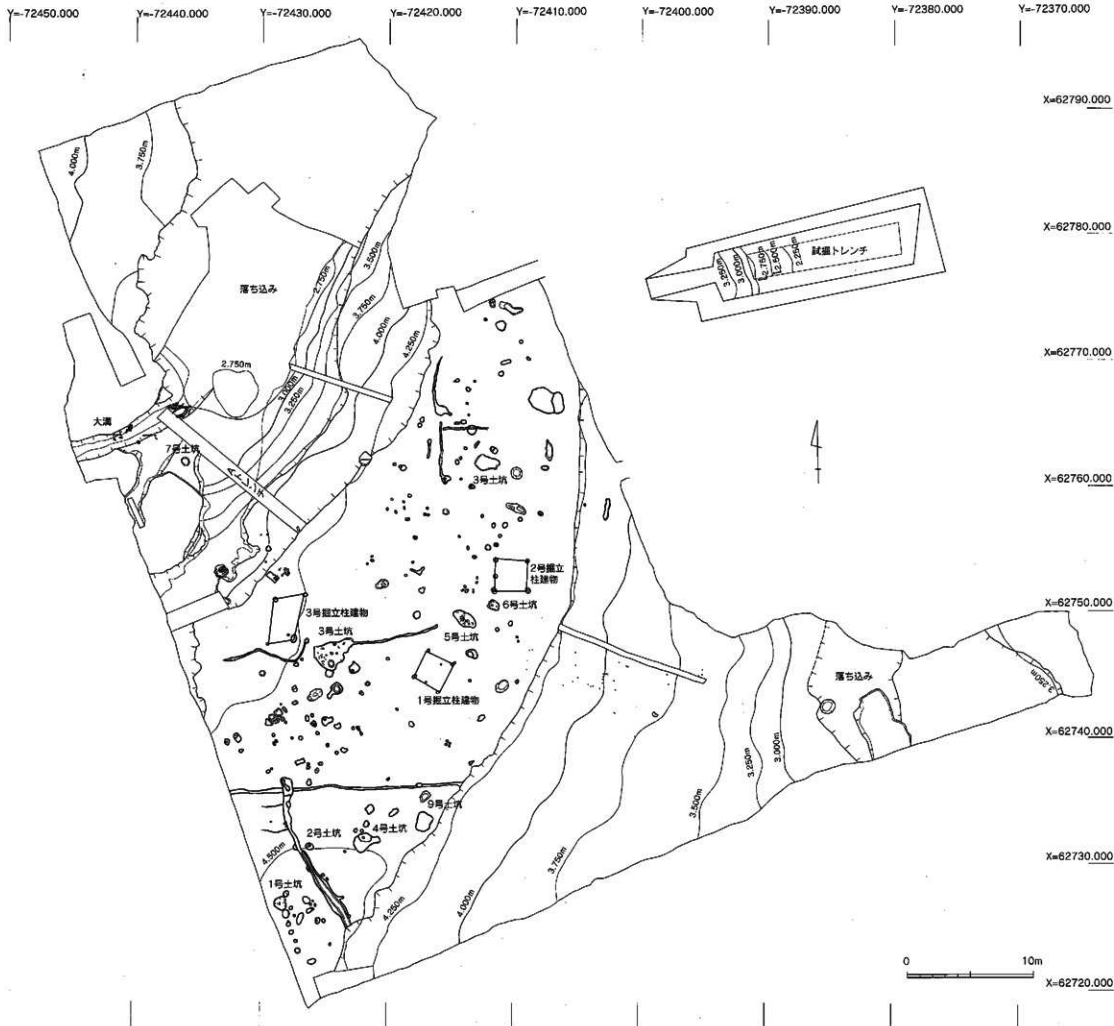
東風小学校建設に伴う文化財調査報告書

前原市文化財調査報告書 第96集

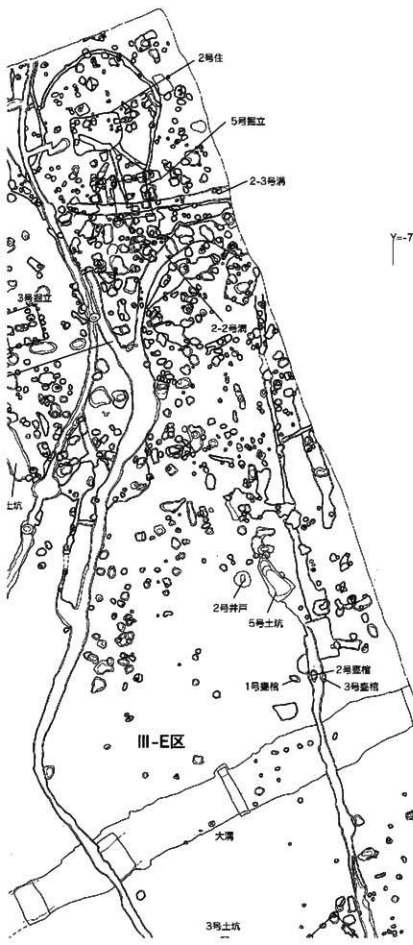
2007年3月31日

発行 前原市教育委員会
福岡県前原市前原西一丁目8番14号
TEL 092-323-1111

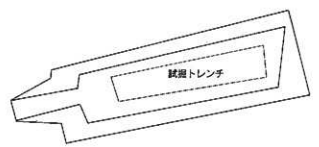
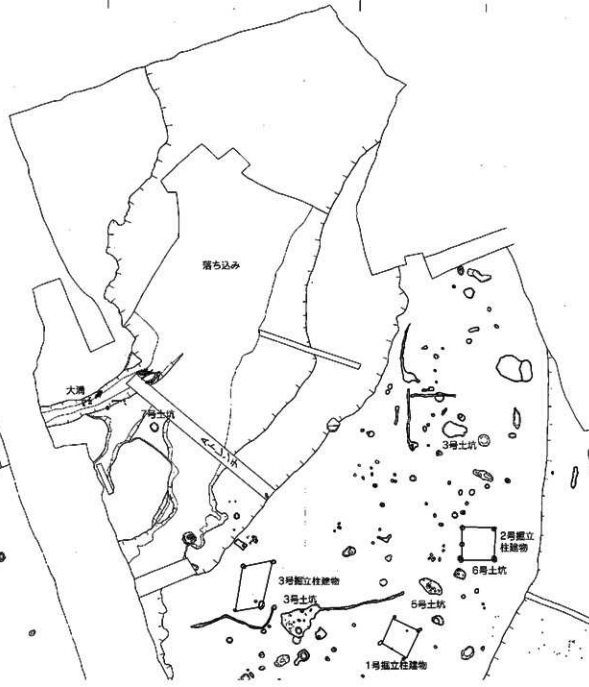
印刷 株式会社 重富印刷
福岡県前原市前原東三丁目1番8号
TEL 092-322-0191 FAX 092-324-2661



付図1 淵地頭給遺跡IV区全体図 (1/300)



Y=-72450.000 Y=-72440.000 Y=-72420.000 Y=-72410.000 Y=-72400.000 Y=-72390.000 Y=-72380.000 Y=-72370.000



IV区

X=62790.000

X=62790.000

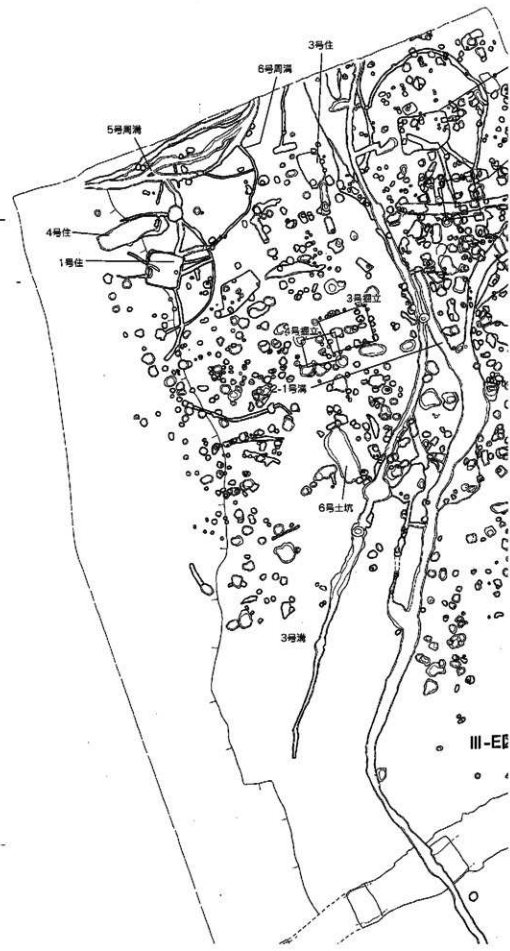
X=62770.000

X=62760.000

X=62750.000

溝ち込み

Y=72500



Y=72550

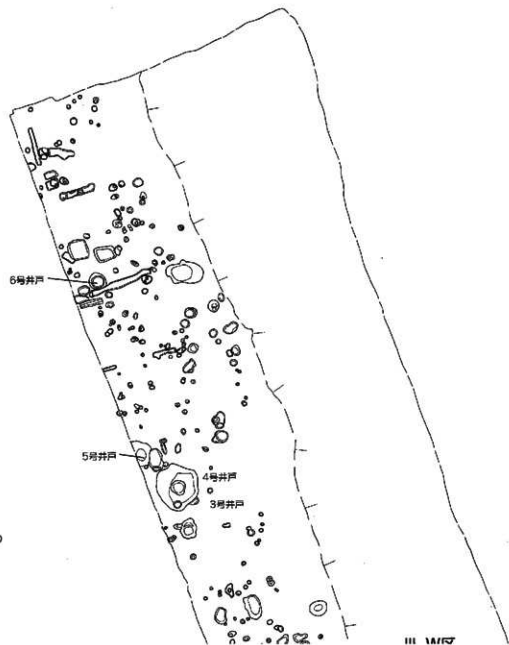
遺 址

III-EE

III-WIS

X=62800

Y=72550



X=62750

谷部

III 1475





X=62720.000

X=62730.000

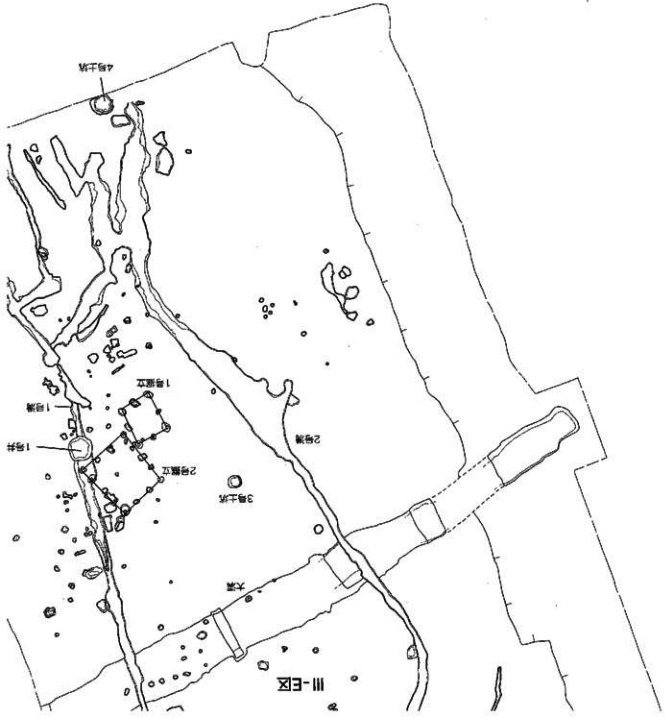
X=62740.000

X=62750.000



III-E区

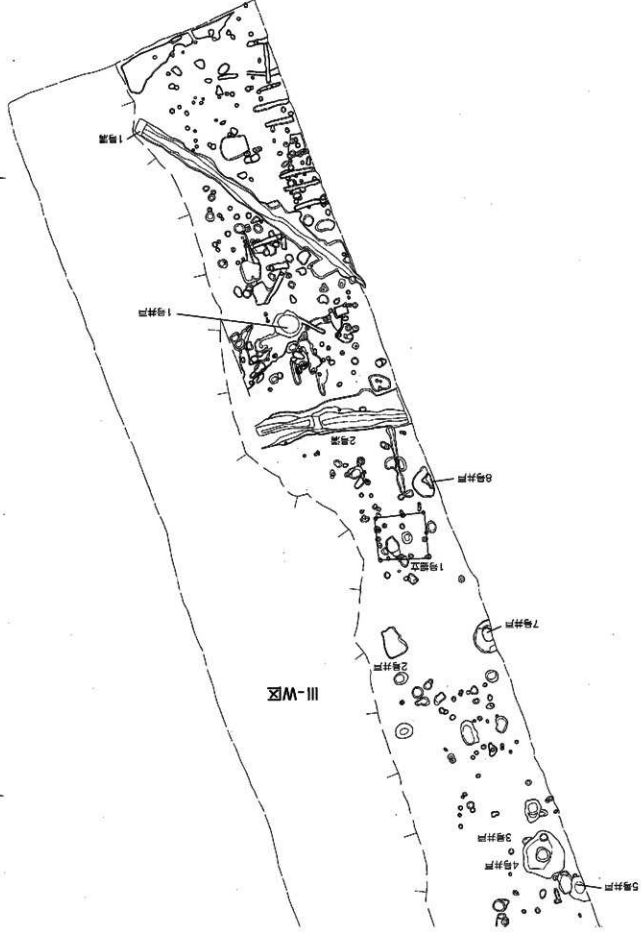
珍珠



付图2 珍珠群岛通称III·IV区全体图 (1/300)



平面图



X-52700

X-52750

Y=72180

Y=72180

Y=72170

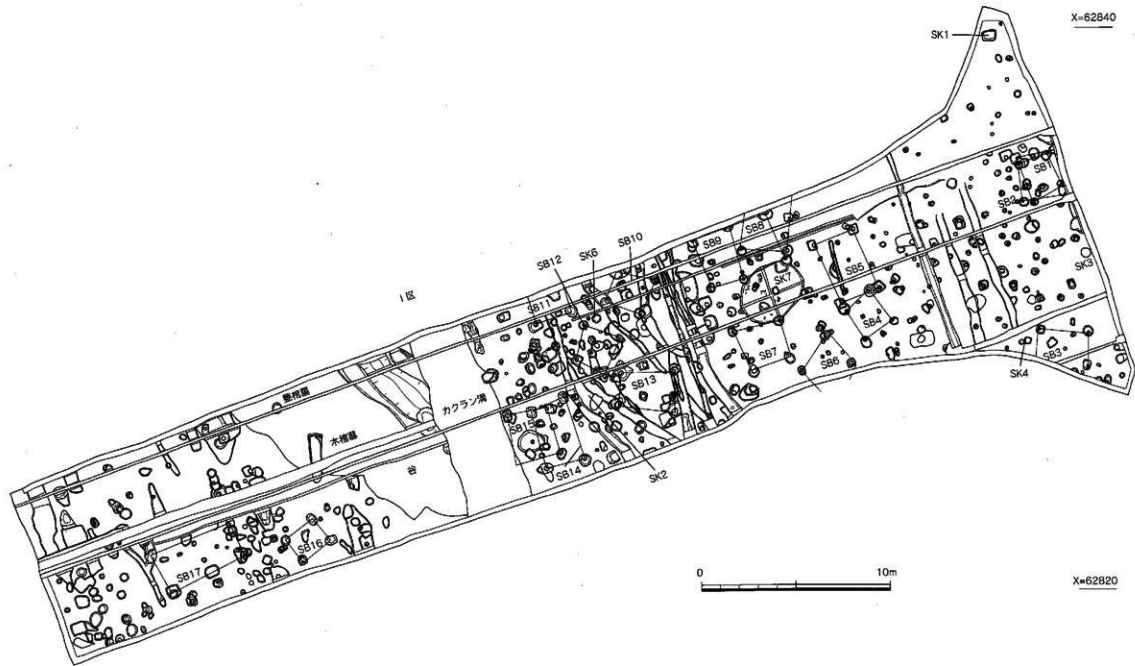
Y=72160

Y=72150

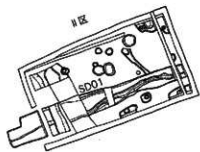
Y=72140

Y=72130

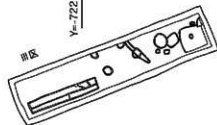
Y=72120



付図3 志豊松本遺跡全体図 (1/200)



Y=72210



Y=72200

Y=72180

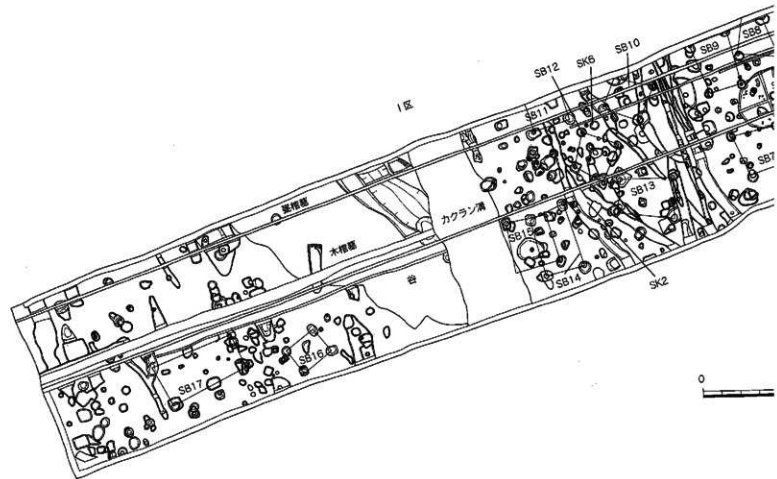
Y=72160

Y=72170

Y=72160

Y=72150

Y=72140



付図3 志量松本遺跡全体図 (1/200)